方正（ほうまさ）友好交流の会　会報 25 号　2017 年 12 月刊

星火方正（せいかほうまさ）

～燎原の火は方正（ほうまさ）から～

自国中心主義を超えるために　木村　護郎 クリストフ
～「満洲国」の歴史から 何をどのように学ぶのか～
沖縄・石垣島から見た「満洲」とは　大浜　敏夫
インパール戦争と父・中野信夫　中野　圭子
―ＮＨＫテレビ『戦慄の記録　インパール』を見て、改めて思う―
今、思うこと――1960 年代から日中国交正常化への道―　西園寺　一晃
「泰阜村」と「方正県」友好提携から２０周年　小林　勝人
さようなら、奥村正雄さん　大類　善啓
―「方正友好交流の会」発足以前からの同志の逝去を悼む―

旧満州への最初の分村開拓団である「大日向（おおひなた）開拓団」が入植した吉林省舒蘭市の旧四家房という場所で、寺沢秀文さんらが 2017 年 5 月に確認した「旧大日向小学校」の校舎の一部。現在は農家として使われている。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第25号）～燎原の火は方正から～

目次

自国中心主義を超えるために　木村　護郎 クリストフ　1
～「満洲国」の歴史から何をどのように学ぶのか～

沖縄・石垣島から見た「満洲」とは　大浜　敏夫　4
―清明節　中国旧「満州」謝恩と巡礼の旅で学んだこと―

インパール戦争と父・中野信夫　中野　圭子　8
―ＮＨＫテレビ『戦慄の記録　インパール』を見て、改めて思う―

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さようなら、奥村正雄さん　大類　善啓　12
―「方正友好交流の会」発足以前からの同志の逝去を悼む―

奥村正雄さん追悼関連記事　14

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今、思うこと――1960年代から日中国交正常化への道　西園寺　一晃　16

日中の歴史は何のために学び、何に活かすのか　田村　美佳　34
―西園寺一晃先生の講演を聴いて―

日中関係の近現代史を知っておこう　永野　俊　41
―西園寺一晃講演に触発されて―

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「泰阜村」と「方正県」友好提携から２０周年　小林　勝人　42
～長野県「泰阜村」と黒竜江省ハルビン市「方正県」友好提携20年の歩み～

天皇皇后両陛下　大日向開拓地訪問と泰阜村友好提携式典記事　46

吉林省水曲柳・大日向両村旧開拓地を訪問して　寺沢　秀文　47

「満蒙開拓平和通信」を発刊して　末広　一郎　56

『満州・奇跡の脱出』がついにテレビドラマ化！　寺沢　秀文　59

天皇陛下の歌碑を建立　信濃毎日新聞　65

〃　南信州新聞　66

＜象徴天皇と平成＞（東京新聞連載記事）に寺沢秀文さん登場　67

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

回想　～チチハルから引き揚げてきた私～　土橋　貞夫　68

中高生たちに歴史を伝えなければいけない　田井　光枝　70
—「満蒙開拓平和記念館」見学で思う—

イスラエル建国を連想させた“満洲国”の建国　有為楠　君代　74
—「満蒙開拓平和記念館」見学で考えたこと—

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

方正日本人公墓の前で思う—公墓訪問の経緯について—　野村　正彦　77

方正で過ごした３日間　伊藤　洋平　79

「平和の時代のベチューイン」藤原長作と
「旅日僑郷」方正県を訪ねて　岡田　実　83

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

記録映画『葛根廟事件の証言』が完成した　大島　満吉　99

映画「葛根廟事件の証言」を制作して　田上　龍一　105

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私を動かす大きな力　中島　幼八　107
—中国残留孤児問題への取り組み、その一年を振り返る—

忘れられない“満洲”の思い出　大津　弘子　111
—残留孤児フォーラムに参加して

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「赦された戦犯たち」の歴史　芹沢　昇雄　113

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

白西紳一郎さんを偲んで　横井　幸夫　大類　善啓　118

書評　丹羽宇一郎著『戦争の大問題』　大類　善啓　119

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

満蒙開拓団　ソ連兵への「性接待」　東京新聞　120

中国人女性に再び光　李徳全氏　〃　122

残留孤児に寄り添う介護を　〃　123

満州開拓民の悲劇を追う—集団自決の地　撮る　読売新聞　124

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

極東ロシアでアイヌ人に出会う　大類　善啓　125
—ウラジオストク、ハバロフスクへの旅—

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

日中交流　つないだ桜満開　東京新聞　130

方正県政府黄力新主任ら来日　大類　善啓　131

日本へ引き揚げ　中国人画家描く　朝日新聞

「方正友好交流の会」へのお誘い　133

報告　書籍案内を兼ねた編集後記　大類　善啓　134

自国中心主義を超えるために

～「満洲国」の歴史から何をどのように学ぶのか～

木村 護郎クリストフ

「国の恥」とは

学生時代、私は縁あって、もともと、満洲に在住する日本人の子弟が東京で勉学する際の学生寮として開設された東京・世田谷の「春風学寮」（1929 年設立）に住んでいました。2017 年夏、建寮 90 周年を前にした、寮のルーツを探る研修旅行に参加して、初めて中国東北部を訪れました。この研修旅行は、日露戦争の「輝かしい」（ように当時は見えたかもしれないけれど実はもう相当無理があった）日本の勝利の戦跡から、「満洲国」の成立と消滅までをたどるものでした。

今回訪れた長春の「満洲国」皇帝宮殿博物館（偽満皇宮博物院）や瀋陽の「九・一八」歴史博物館などでは、これらの歴史が中国にとって「国辱」であることが記され、「勿忘国恥」（国の恥を忘れるな）という標語が記されていました。しかし満洲事変や「満洲国」の実態は、中国にとっての「恥」以前に、日本にとって国の恥であり、忘れるべきでないのは誰よりも先に、日本人のはずです。旅の予習の一環で読んだ山室信一『キメラ　満洲国の肖像』（中公新書 1993 年；増補版 2004 年）の次のことばに深く共感します。

「無惨すぎた犠牲に少しでも報い、そこからいささかなりとも人類の叡智を引き出し、伝え遺していくためにも私たちはそれを過去のものとして忘却などできはしないのではないでしょうか。」（前掲書 385 ページ）

自国中心主義を超えよう

しかし、これらの出来事から何を学ぶことができるのでしょうか。今回訪れた、平頂山記念館を含むさまざまな記念館や歴史博物館は、現地では愛国教育、国防教育の一環として位置づけられ、「立ち後れれば喰い物にされる」とか、「中華の振興には一人ひとりに責任がある」ということが展示の「まとめ」として書かれていました。また土産物屋には、「釣魚島　愛国酒」と書かれた、爆弾（！）の形をした容器に入った酒が並んでいました（釣魚島は日本でいう尖閣諸島）。しかし、このような形の愛国主義を高め、国防を強めることが歴史から学ぶべき第一のことなのでしょうか。かつて日本は列強に対して「立ち後れれば喰い物にされる」という、同じ論理の延長で中国を侵略したのではなかったでしょうか。あのような衝突と悲惨な殺し合いをもたらした自国中心主義（「〇〇ファースト」という発想）を乗り超える学びはどのように可能なのでしょうか。地球規模の環境や貧困の問題などが山積する現在、隣国同士で張り合っている場合ではありません。

今回の旅行には、中国の学生たちが 1931 年にエスペラント語で世界に発信した「Alvoko

al la tutmondo kontraŭ la japana bucado en Manĉurio」（日本の満洲での虐殺に対する全世界への呼びかけ）と題した文書のコピーを携えていきました。（脚注１）

この文書では、異なる民族をつなぐことばとして提案されたエスペラントにふさわしく、自国中心主義を超える見方が示されています。文書は、満洲での日本軍の行いの数々をあげたあと、次のように締めくくられています。

「私たちは、今の満洲での野蛮な行動は日本の人々のなかのごく少数である軍国主義者にのみ由来すると信じます。私たちは、日本の人々の大部分が平和を愛し、そのような行動に反対することを信じます。彼らが私たちを支援することを願います。なぜならば、愛国主義よりも、平和と人間愛が、より高尚でより名誉あることだからです。」[1]

過去の過ちと向きあうこと

おそらくまじめな平和を愛するふつうの市民でありながら中国への進出と侵略という大きな文脈に直接間接におかれてしまった在満日本人。そのあとをつぐ春風学寮に連なる者として、当時の中国の学生たちから日本人への呼びかけにどのように答えることができるのか、と考えさせられました。

まずは、この文書が訴えていることについて知ろうとすることでしょう。好んで知りたくなるようなことでなくとも、過去の出来事から目をそむけないことです。どこの国にも、自国に都合の悪いことはなるべく隠したり、なかったことにするのが愛国的な態度だと思っている人がいます。しかし私が研究してきたドイツでは、過去の過ちと正面から向き合うことこそが愛国主義（Patriotismus）だという考え方があります。過去の過ちを認められる勇気や強さをこそ誇りに思うという愛国心といえるでしょう。今日も使われる立派な建物からきわめて残酷な仕打ちの跡まで、中国東北部における日本のさまざまな足跡を丁寧にたどった今回の研修は、一部の人が言うような「自虐」的なものではなく、歴史の多面性を受けとめる内容だったと思います。

しかし日本から来た人同士で史跡を訪ねて学ぶだけでは、限界があります。加えて大切なことが、国や意見の違いを超えた交流でしょう。異なる考え方や背景をもつ人同士が出会い、対話することで、自分が当たり前と思っていた考えが相対化され、新たな気づきを得ることができます。その点、日本語教員になった中国人の卒寮生（春風学寮には、中国からの留学生に奨学金を出す基金がある）のはからいで、日本語を学ぶ現地の学生たちと共に長春で一日を過ごし、率直な意見交換ができたことは、今回の旅行の一つのハイライ

---

[1] 原文：Ni kredas ke la nunan sovaĝan agadon en Manĉurio respondecas nur la japanaj militaristoj, kiuj el la japana popolo, estas nur la malplej multo. Ni kredas ke la plejparto de la japana popolo amas pacon kaj malaprobas tian agadon. Sed ni petas ke ili nin subtenu, ĉar, antaŭ ol patriotismo, estas paco kaj homamo, multe pli nobla, multe pli honora.

トでした。

また現地での最後の夜、私は、春風学寮に住んでいた学生時代の 1999 年に瀋陽からの訪問団の一員として日本を訪れたエスペランチスト（エスペラントを話す人）と 18 年ぶりに再会して、夜の瀋陽の町を案内してもらいながら、歓談することができました。来日時、瀋陽の観光局のビザやホテルなどを担当する部局の長をしていた彼は、2017 年に退職した後も、遼寧省老齢産業協会顧問など、多方面でひきつづき精力的に活動している様子でした。今度は 18 年も待たずにまた会おう、と言って別れました。旅の最後に、国をこえた交友の価値を実感したのは格別な喜びでした。

今回の旅は、はからずも、80 年以上の年月を経て、満洲事変当時の中国の学生の呼びかけに応えるものであったと思います。今回の旅での学びを心にとめると共に、得られたさまざまな出会いを今後も大切にしたいと思っています。

右から筆者、瀋陽のエスペランチスト、研修旅行者 2 名。前列は同行した筆者の息子。瀋陽の遼寧賓館（元・奉天ヤマトホテル）の玄関ホールで。

偽満皇宮博物院「勿忘“九・一八”」（九・一八を忘れるな）と記されている。

（きむら・ごろう　くりすとふ : 1974 年生まれ。上智大学外国語学部ドイツ語学科教授。エスペランチスト。著書『節英のすすめ―脱英語依存こそ国際化・グローバル化のカギ！』など。近年はドイツとポーランドの「民際交流」の歴史と現在を調査。2018 年 3 月 17 日（土）、満蒙開拓平和記念館冬季講座でドイツの隣国との和解について講演予定がある）

沖縄・石垣島から見た「満州」とは

―清明節　中国旧「満州」謝恩と巡礼の旅で学んだこと―

大浜 敏夫

私は去る３月 31 日から４月５日にかけて表題の旅行企画に参加することができた。この企画に応募しようと思い立ったのは、私の住む石垣島（市）でも「日本復帰」後４０年近くも続いてきた革新市政から 2010 年４月保守市政に替わり、2011 年中学校社会科教科書採択において、最も保守色が強いといわれる育鵬社版公民教科書が採択された。それに反発した隣の竹富町が東京書籍版公民教科書を国の教科書無償措置法の恩恵を受けずに採択・使用するという、同一採択地区に２社の教科書が使用されるという全国的にも珍しい状況を招来した。

また、石垣市は教育委員会が自ら企画・発行した中学社会科副読本の内容に対し、市議会において、歴史改ざん派の一議員から「従軍慰安婦」と「南京事件」についての質疑を受けた結果、以後この副読本の刊行を中止するという失態を曝している。このように、人口５万にも満たない石垣島にも歴史修正主義の波が押し寄せる一方、近年では「尖閣問題」を契機に自衛隊配備問題が現実化し、中国脅威論と相まって島民を二分する状況にある。

このような中で、いわゆる歴史認識問題を自分なりに考える機会にしたいと思っての旅であった。

９・１８歴史博物館に学ぶ

1931（昭和６）年９月 18 日、関東軍によって、瀋陽（奉天）北方の柳条湖にかかる満鉄線との交差点で起きた鉄道爆破事件を契機とした日本軍による宣戦布告なき中国への（満州）侵略戦争が起きた。それも中国人３人を先に殺害して犯人に仕立て上げ、これを中国軍の仕業だとする謀略に基づくものであった。15 年にわたるアジア太平洋戦争の発火点であり、関東軍を中心とする日本軍は半年間で満州全土を占領し、翌 32 年には、清朝廃帝の溥儀を押し立てて傀儡国家「満州国」を樹立した。その首謀者は、関東軍参謀本部作戦部長の石原莞爾と同参謀板垣征四郎らであった。

澤地久枝の著書『もう一つの満州』のなかに『９・１８にみる「満州事変」』という章で、張寒暉作詞・作曲「松花江」についての記述がある。

「我が家は東北、松花江のほとり／そこには森林と鉱山、さらに山野に満ちる大豆と高粱がある。／わが家は東北、松花江のほとり/彼の地にはわが同胞、そして年老いた父と母がいる。／ああ、９・１８，９・１８/あの悲惨な時から、わが故郷を脱出し、／無尽の宝庫も捨て去って、流浪、また流浪、関内をさすらいつづけている。／いつの年、いつの月、私の愛する故郷へ帰れるのだろうか。／いつ、私のあの無尽の宝庫を取り戻せるのだろう

か。／父よ、母よ、／喜んで一堂に会するのはいつだろうか。

これが私のゆきついた「ひとつの歌」だった。日本人の中国観とくに「満州」に関する意見はさまざまある。中国人の中にもかつては共鳴者がいた。しかし、１５年戦争の口火となる昭和６年９月１８日が、中国人にとってどんな思いをかきたてる記念日か、この一篇の歌が広く深く歌い継がれたという事実に、理屈を越えたものがある」

澤地さんがいう「９・１８」（チュウ・イパー）が中国人にとってどんな思いをかきたてる記念日か、中国人の側に寄り添って考える日本人が果たしてどれだけいただろうか。当時の日本には「満蒙特殊権益論」（満州は日清・日露の戦争で日本人の血であがなった特別の地だという認識）が風靡しており、日本は、1933（昭和８）年 2 月の国際連盟総会におけるリットン調査団報告に基づく満州支配（満州国独立）否認決議（42 対 1）を不服として国際連盟を脱退している。また、1936（昭和 11）年広田弘毅内閣では、「満州農業移民 20 カ年 100 万戸」計画が策定され、全国から開拓移民が続々と渡満した。その後、教育界も競って満蒙開拓青少年義勇軍の育成と送出に力を注いできた。

因みに、1938（昭和 13）年　文部省主催の全国農業学校長会の場で、満州農業移民に関する知識の普及と満州農業移民花嫁養成の２点が議題となり、そこに出席した沖縄県立農学校長近藤時太郎氏は、〇義勇軍養成のための学級増　〇新設の八重山農学校に女子部を設置　〇卒業生による開拓団幹部指導員の送出　〇校内掲示板にて開拓団募集要項掲示〇文部・農林・拓務省が共催する「満州国勤労奉仕隊」への派遣等を早速実施している。

その結果、沖縄からも 1939（昭和 14）年から第７次満州農業移民として 19 名が入植し、以後 3000 人近い県民が移民として渡満した。沖縄においては、国策を意識した学校運営（教育）によって、長野県においては「信濃教育会」がそうであったように、満州移民を勧めてきた経緯がある。

旧満州国への農業移民、つまり当時の満蒙開拓団員（義勇軍を含む）の送出は全国に及んでいるが、最も多く送出したのは長野県で３万８千人に近い数に上り、その理由は、昭和恐慌という経済的苦境からの脱出を満州に求めた当時の国策（大陸政策）はもとより金沢大学の小林信介教授がいう、それを勧めた「中心人物」と「中堅人物」の役割、そして移民熱をあおる「バスの論理」（バスに乗り遅れるな）に基づく県下各市町村長会による移民地視察も大きかったようだ。また、当時の映画界や歌謡界の影響も見逃せなかったのではないかと思う。西条八十作詞／古賀政男作曲の「サーカスの唄」「誰か故郷を想わざる」映画にもなった「熱砂の誓い」（建設の歌）などは当時、国民的歌謡として一世を風靡し、人々の耳目を中国・満州へと向かわせるのに大きな役割を演じたといえよう。

しかし、移民地視察を終えた長野県下伊那郡大下條村村長の佐々木忠綱氏のように、「町村会は、この視察により『報告書』をまとめ上げて国策追従路線を明確に打ち出したが、佐々木が分村に反対の立場をとったのもまた、この視察の結果であった。佐々木は、入植地が現地民からの略奪地であること、ならびに満州における日本人の高慢な態度に危惧を

抱いたのである」者もいた。（小林信介著『人々はなぜ満州へ渡ったのか』）

「松花江」にみられるような中国の人々の想いを、移民地視察を通して知った佐々木忠綱村長の分村移民拒否の姿勢は強固で、地元選出の衆院議員中原謹司から「お前の首を切るくらいのことは、世話ないぞ」と威嚇されてもなお、任期の間反対し続けたという。この佐々木村長のように民族や国の違いに関係なく、相手の立場に少しでも想いを寄せることのできるリーダーが多く存在したならば、中国現地民および満蒙開拓団のその後の歴史に燦然と輝く光明となって後世に語り伝えられたに違いない。私は、佐々木忠綱氏の政治姿勢の中に民族や国境、時代を越えて同じ人間としての確固たる一条の光を見る思いである。

反面、中国現地の農民を強制的に追い出して、日本各地から開拓団入植移民を受け入れる工作をした中心人物には、武部六蔵元満州国国務院総務長官と古海忠之元満州国国務院総務次長の二人が挙げられるが、関東軍の東宮鉄男もまたその一人に入る。武部と古海は撫順戦犯管理所において元皇帝の溥儀によって、罪状が明らかにされたといわれる。また、送出の側からみると加藤完治の責任も見逃せないと思う。

平頂山事件にみる日本軍の「治安戦」

中国人にとって屈辱と苦しみが始まった「９・１８」（チュウ・イパー）から、間もなく１周年を迎えようとする 1932 年 9 月 16 日午前零時 50 分、約 200 人の「反満抗日ゲリラ」（中国の若者を中心に満州国を認めず日本に抵抗するグループのことで、日本人はそれを「匪賊」と呼んだ）が、関東軍の経営する露天掘りで有名な撫順炭坑の採炭事務所や警察官派出所、華工（中国人労働者）宿舎、職員宿舎を襲い、放火をして満鉄職員とその家族に死傷者をだした。予め警戒をしていた関東軍守備隊や警察隊、在郷軍人会の反撃によってゲリラは 50 人余の犠牲者を出しながらも近くの平頂山集落へ逃げ込んだ。

その日の午前十時頃、数台のトラックに分乗した関東軍憲兵隊や守備隊、警察隊約 200 名が集落を包囲して全住民を近くの山裾の崖下へと強制的に移動させた。家から出られない病人や纏足の老婆はその場で射殺し、崖下に集められた 3000 人の住民は、機関銃による一斉掃射を受け射殺された後、石油をかけられて焼かれた。関東軍はさらに証拠隠滅の為に山裾を爆破し、崖下の焼死体をすべて埋めてしまったのである。400 世帯 3000 人が暮らしていた平頂山集落が完全に地上から消されてしまった。

日本軍は、以後、このように抗日根拠地やゲリラ地区とみられる集落の徹底的破壊と無人化を目指した作戦を「燼滅掃蕩作戦（殺し尽し、奪い尽し、焼き尽す）」を開始していった。（中国ではこれを「三光戦」と呼んだ）。この作戦は「治安戦」と称され、満州のほか第２の満州国をめざした華北分離工作でも多く実行された。因みに、中国抗日戦争学会の調べによれば、1937 年 8 月以降 1945 年 5 月までの間に、平頂山事件を含む「燼滅掃討作戦」は４９カ村で行われ、66,680 人の尊い命が村ごと消されていったのである。

この「治安戦」と称する残虐行為を指揮した中心人物には、平頂山に関しては撫順独立

守備隊長の川上精一や同じく憲兵隊長小川一郎の将校クラスや撫順警察署長（氏名不詳）が挙げられ、元北支派遣軍 117 師団長鈴木啓久、同じく元北支派遣軍 59 師団長の藤田茂を挙げなければならない。藤田は元Ｂ級戦犯として受刑後、初代中国帰還者連絡会会長として謝罪のため、何度も訪中している。

「前事不忘　後事之師」を銘とするために

今回の旅をまとめるには紙幅が足りない。ナチスドイツによるアウシュビッツ収容所と並び称される 731 部隊のことも書きたいが、次の機会を期したい。私にとってこの度の清明節に因んだ謝恩と巡礼の旅は、日本が過去に中国で犯した数々の侵略行為のなかで最も非人間的な行為の足跡を見る得難い機会となった。

無言で平頂山事件の様子を語る累々と横たわる 3000 体の遺骨、家族・親せきどうし固まって銃殺されたであろう遺骨の群れ、庇う母親の側で黒い炭の塊となった乳幼児の遺体、無造作に投げ捨てられた石油缶を見たとき、思わず背筋が凍るのを覚えた。同じ人間として何故このような残虐極まりない行為ができるのか、まさに悪魔（鬼）の所業というのは、このこととしか言いようがなかった。

この歴史の事実に直面したとき、日本が過去に犯した侵略の事実、加害の事実を伝えていく責任を強く感じたのであるが、今の日本には、安倍首相をはじめとする日本会議や教科書議員連盟など右翼グループの閣僚から成る安倍内閣は、教育政策の目玉である「教育再生」策によって日本の過去の都合の悪い歴史の事実を薄めたり、消し去ったりする歴史修正主義を一貫して取り続けている。日本軍「従軍慰安婦」や「南京事件」、「沖縄戦集団自決（強制集団死）」等はその典型例であるが、中国における加害の事実を学校教育で詳しく教えようとすると、「自虐史観だ」とか「反日的だ」という括りで保護者や地方議員からも苦情が出るようになった。

しかし、言い古された言葉ではあるが、今一度、ドイツの元大統領ヴァイツゼッカーの「過去に目を閉ざす者は、未来において盲目となる」を思い出す。そして、中国では、９・１８歴史博物館や南京虐殺記念館に彫り込まれた「前事不忘　後事之師」は、ヴァイツゼッカーの言よりも強く踏み込んだ「前の経験を忘れず、後の教訓とする」という箴言がある。同じ過ちを繰り返させないためには、戦争の記憶（日本がしてきたこと、されたこと）を風化させない努力が、今の教育には特に求められている。

（おおはま・としお：1947（昭和 22）年、沖縄県石垣島生まれ。小学校教員を経て、沖縄県教職員組合執行委員長、沖縄戦１フィート運動の会理事、子どもと教科書を考える八重山地区住民の会事務局長）

インパール戦争と父・中野信夫

―ＮＨＫテレビ『戦慄の記録 インパール』を見て、改めて思う―

中野 圭子

31 歳で召集された父

私の父は 1910 年生まれ、1941 年 12 月 31 才の時、赤紙がきて軍医として応召しました。その翌年 2 月に生まれた私が 4 才の夏に父は復員してきました。初めて父と対面してから半年ほどは、父と 2 人でいるのが怖かったのを断片的なシーンとして覚えています。

父に赤紙が来たときは自宅で眼科を開業して 6 年が経過していました。応召後しばらくは京都伏見にある陸軍病院へ通い、戦場で必須の外科の再研修を受けていたようです。そのあと、奈良の 138 連隊と上海で合流、海路で台湾、シンガポールをまわって北上、クアラルンプールの北、クワラクブで上陸、ここから陸路でビルマ（ミャンマー）へ入ったと聞いています。

1944 年 3 月にインパール作戦が始まるまでのビルマでの戦場の父が、命の危険を感じた話は私の記憶にはありません。現地のマラリアで寝ているおばあさんに薬をあげたら、お礼に子豚をもらってみんなで食べた話などには戦争の悲惨さを忘れて聞きいっていました。その頃の話は、軍医の父には身の危険を感じるほどの場面が少なかったからだろうし、医療物資、食料もそれほど不足していなかったからだろうか比較的おだやかでした。

夜遅くまでドキドキしながら興味津々で聞いていた話は、いま思えばインパール作戦に入ってからの話です。

白兵戦で盾のすぐ横を相手の弾がかすめた話や、父が自分で掘った壕に隠れていて、そのなかで敵からの焼夷弾がさく裂して、鼓膜が破れたのか耳が聞こえなくなった話。その後マラリアを併発して発熱し、戦線を離れ、後方の野戦病院に入院した話。入院から 1 週間して前線に復帰したとき「軍医が病気して･･･」と周りから白い目で見られた話とか･･･。

この時の後遺症で、父は人と会話しているときは、いつも右耳の後ろに手のひらを当てて聞いていたのを思い出します。

それらの話の後には必ず「牟田口はしゃあない奴や・・・」そして「佐藤中将は命の恩人やと帰れた者はみなそう思てる・・・」と。

父に見せたかったテレビ番組

ＮＨＫスペシャル『戦慄の記録　インパール』のなかで、74 年前に実際の「インパール作戦」さなかに、ずっと牟田口廉也中将の傍に仕えていたという斎藤少将がインタビューに応じておられました。そして激戦当時に、毎日記しておられた日記がテレビ画面に映し出されました。そこには連日の生々しい作戦の詳細な記録と、それに対しての厳しい感想も書かれていました。車椅子に乗ってインタビューに応じられる斎藤さんは 96 才とは思え

ない、はっきりした記憶を、しっかりした口調で語っておられました。

父は2010年1月、満100才を目前に亡くなりました。その前夜は、自宅でお正月気分の家族に囲まれてお酒も入っての楽しい小宴会。そのあと就寝中に息をひきとりました。

私はその「元気なままの大往生」をずっと「よかった」と思っていました。が、テレビで斎藤さんの生々しい証言を聞いたときは「もっと長生きをさせてあげて、このテレビを視て欲しかった」と涙がにじみました。

同時に、父がいつも「命の恩人」と言っていた、軍法会議にかけられることを覚悟の上で撤退を決断した佐藤幸徳中将についての話が出てこなかったことを、父は悔しがったと思います。私も「あれ？・・・」と思いました。

「佐藤中将は命の恩人や・・・」

佐藤幸徳中将の話とは、こういうことです。

「ビルマでインパール作戦に参加して、たくさん死んでしもた。生きて日本に帰ってこられたのは10人に1人やった。佐藤中将は命の恩人や・・・」と、父が涙声で話すのを子供のころからよく聞いていました。

その父が65才のときに出版した戦記『靖国街道』の「あとがき」に佐藤幸徳師団長についてこう記しています

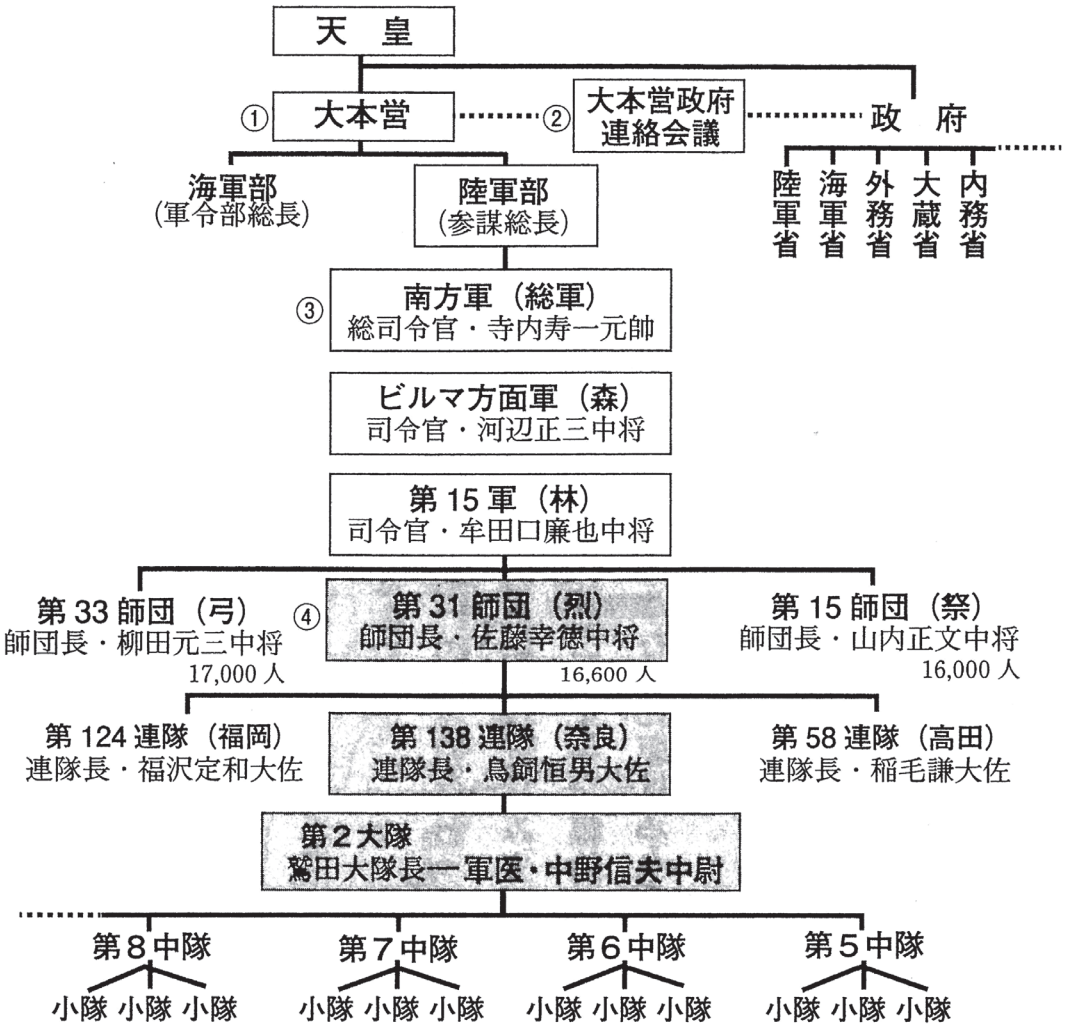
———「138連隊」の生き残りの者にとって、「烈」（参照：次頁の図）の佐藤師団長は命の恩人として尊敬されている。牟田口司令官の思惑通りには動かず、厳しい軍命にそむいてコヒマを撤退させたからである。コヒマで佐藤師団長の命令がもう 2 週間遅かったら、文字通り第二大隊は全滅したに違いない。私の命もなかっただろう。———

今年（平成29年）の夏のNHKの戦争・追悼番組は、今までになく深く、また多く制作されていたかと思います。番組を支えておられるスタッフの方々は私より若い、戦争を経験していない方々です。その活動に感謝申し上げると同時にますますのご活躍を期待しています。ありがとうございました。

なお、父・中野信夫が出版した戦記『靖国街道』は在庫がなくなりましたが、その内容を中・高生向けにリライトした『軍医殿！ 腹をやられました―インパール作戦ビルマ敗走記』（かもがわ出版：定価：600円＋税）と、『靖国街道』の自筆の挿絵をアレンジした絵本『赤紙って、なに？―中野信夫の回想　インパール作戦』（はむぎ出版：定価300円、税込）は少し在庫がございます。（11 頁に 80%ほど縮小して紹介）ご希望の方は「方正の会」事務局に申し出てください。お送りします。

（なかの・けいこ：1942年、京都市で生まれ育つが、最近、忙しい父が夏休みに連れて行ってくれた琵琶湖の見える所ということで大津市に移住。父の遺志を次世代に繋ごうと父が設立に協力した立命館大学国際平和ミュージアムなどで反戦活動や出版活動に携わる）

インパール作戦時の部隊編成
〈第31師団（烈）を中心に〉

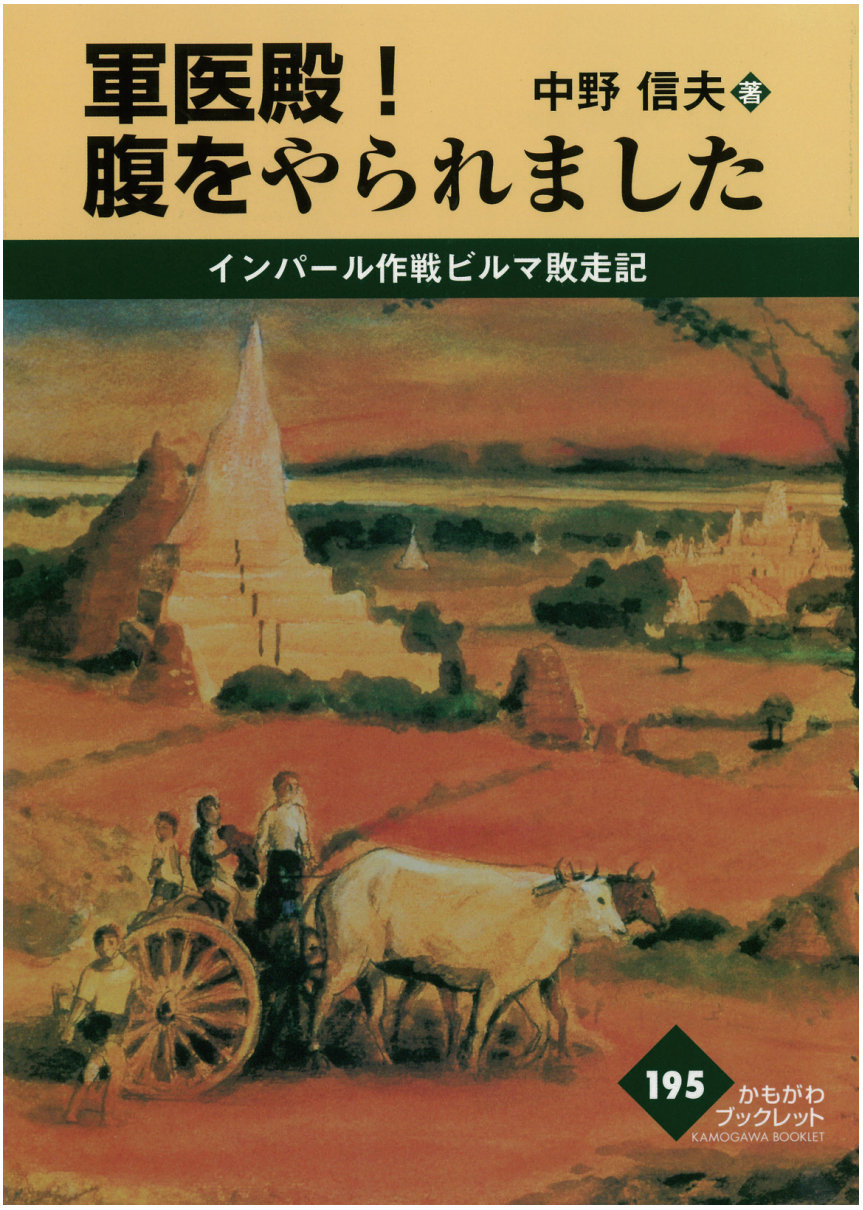


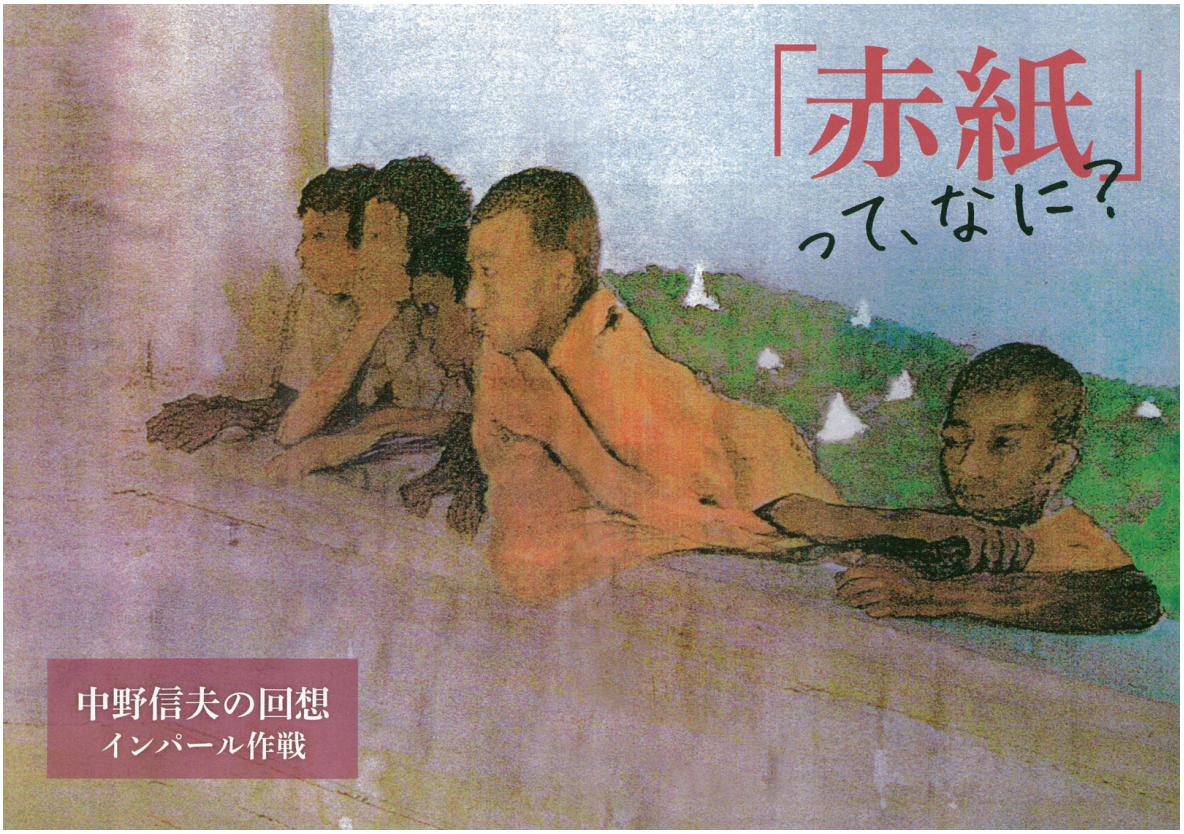
① 大本営　陸軍、海軍を支配下に置く天皇直属の最高統帥機関。

② 大本営政府連絡会議　1937年11月に設置。政府からこの会議に出席できるのは、総理、外相、蔵相、陸相、海相、企画院総裁の6人。大本営側は参謀総長、軍令部総長、各次長。1944年8月に廃止され最高戦争指導会議が設置された。

③ 南方軍　関東軍（満州）、支那派遣軍などと並ぶ総軍のひとつ。1941年11月に編成された。開戦後はマレー、フィリピン、インドネシアなど南方作戦を指揮した。

④ 第31師団　1943年3月バンコクで第18師団川口支隊（久留米）、第13師団の歩兵第58連隊（高田）、第116師団（京都）の歩兵第138連隊、第40師団（善通寺）の山砲兵第40連隊を基幹に編成された。ただちに第15軍に編成されインパール作戦でコヒマ攻略の任務を負った。


軍医殿！
腹をやられました
中野 信夫 著
インパール作戦ビルマ敗走記
195
かもがわ
ブックレット
KAMOGAWA BOOKLET


「赤紙」
って、なに？
中野信夫の回想
インパール作戦

さようなら、奥村正雄さん

―「方正友好交流の会」発足以前からの同志の逝去を悼む―

大類 善啓

享年 86 歳　家族に見送られ旅立つ

今年（2017 年）6 月 18 日、本会参与として方正友好交流の会発足時点から主導的に活動されていた奥村正雄さんが亡くなられた。1931（昭和６）年生まれ、享年 86 歳だった。

４月に急性白血病の診断を受けたという。そういうことは全く知らなかった。本人の希望で家族葬として営まれたと先日、信子夫人から聞いた。

奥村さんは、年２回発行する「星火方正」にはほぼ毎号、原稿を書かれていた。締め切りの時期が近づくと決まって、「最終締め切りはいつ頃？」と電話がかかってきた。

前号 24 号の際も締め切り時期になると当然のように、「ぎりぎりになるが原稿を入れるよ」とか「明後日には入れるよ」と言いながらも原稿は来ず、奥村さんも呆けたかな、と思ったものだった。入院後、一度だけ電話で話をしたが元気な声だった。しかし前号には、残念ながら奥村さんの原稿はない。23 号（2016 年 12 月刊）に寄稿された「徐士蘭の虚と実――新たにわかった 15 年前の厚労省調査」が絶筆になった。

方正友好交流の会の前身である「ハルビン市方正地区支援交流の会」が 1993 年 5 月に発足した当初から奥村さんは参加されたが、それ以前から残留婦人に対して個人的に支援していた堀越善作さんに寄りそって活動されていた。奥村さんの言葉を借りると「俺はカバン持ちみたいに堀越さんにくっついていたんだよ」ということになるが、そのあたりは、ご本人の口から語ってもらおう。

14 頁の記事は、奥村さんを含めて私たちが執筆して発行した『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』（東洋医学舎刊）の中で、「交流を通じてその活動を支えた人たち」というテーマの下、牧野八郎さんを司会に、風間成孔さん、林幹男さん、大類ら６人が参加した座談会での奥村さんの発言である。

「魂の巡礼の聖地として方正を噛みしめたい」という奥村さんの言葉を、それこそ噛みしめたい、と思う。

「若い人たちにバトンタッチしよう」

「方正地区支援交流の会」会長だった石井貫一さんが亡くなって２年後、会が少々停滞し「さぁどうするか」と会議を持った。今なお元気な牧野八郎さん、今は亡き関洋一、木村直美さん、そして奥村さん、私の５人ほどが集まった。

喧々諤々ということではなかったが、何らかの形で会を存続させようという点では意見の一致を見たが、さてどうするか、その先へ進まない。と思っていたところ、奥村さんが「我々は一歩引き下がり、若い人にバトンタッチしよう」と発言したのだ。私以外の４人がほぼ同世代、私より一回り以上も年長だ。奥村さんがこの場合、「若い人」というのは私を指していたことはわかっていた。たぶん他の方々もそう思ったに違いない。

私もここで、「もう逃げることは出来ない」と思った。そこで私は、事務局長として会を

担っていくなら、以前のように方正県に対して経済支援をするような活動は私には到底できない。やれるとすれば、多くの人たちに知られていない日本人公墓の存在を知ってもらうべく活動をしよう。それは意味があることだし、その為なら自分もなんとかできるのではないか、と言ったように思う。奥村さんの一言で私の運命は決まった（！？）。

そして装いを新たにして「方正友好交流の会」を発足させたのである。

創立総会は 2005 年 5 月に決まった。奥村さんは、「大類さん、30 人集まれば大成功だよ」と言った。メディアも開催告知記事を掲載してくれ、当日は予想以上に参加者が多く、30 人は優に越え 50 人ほどの人々が参加してくれた、朝日新聞や読売新聞も取材に来てくれる一方、奥村さんの故郷からは新潟日報、また長野の『信濃毎日』も創立総会を大々的に紹介してくれた。

読売新聞は徳毛貴文記者が夕刊に大きく記事を書いてくれた。この記事を見た今は亡き、かつての李香蘭、山口淑子さんが電話をくれた。この山口さんとのエピソードについては「星火方正」に２回に亘って書いたこともある。

奥村さんも私も雑誌ジャーナリズムに生きてきたこともあり、社会に対するスタンスが近かったせいもあってか、いろいろと問題が出てくると相談して的確なアドバイスをもらった。今やもう、そういう年長の相談役は牧野さんを残すのみになってしまい、本当に寂しい限りである。

また会報「星火方正」によって日本人公墓の存在を知った羽田澄子さんが演出された記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』のコーディネイターとして、また、その映画に出た残留孤児と思われる徐士蘭さんの来日実現に奔走された。そして何よりも、公墓建立の契機を作り大きな役割を果した残留婦人の松田ちゑさんを丹念に取材し、『天を恨み　地を呪いました―日本人公墓を守った人たち―』を文字通り手作りで出版され、初めて彼女の人生を描いたことなど、奥村さんの果たされた功績は本当に大きい。

最後に、奥村さんを偲んで新潟日報に掲載された三波春夫に関する記事を 15 頁に紹介するのでご一読いただければ嬉しい。

「星火方正」11 号（2010 年 12 月刊）掲載の写真から。左端、奥村さん。三人いる女性たちの真ん中が徐士蘭、後方の左、吉川雄作さん、右が飯白栄助さん。2010 年 6 月方正にて。

日本人の魂の巡礼の聖地に方正――この言葉かみしめ

フリージャーナリスト　奥村正雄 氏

石井先生の深慮

牧野　奥村さんがこの会を手伝うようになったのは1992年でしたか？

奥村　そうです。むそれまで私は残留孤児問題にかかわっていたんです。そこで知りあった堀越善作さん（故人）に手伝うよう勧められ、1992年に方正県の政府代表団が訪日した時に東京・市谷の私学会館で行われた方正地区農村発展シンポジウムに堀越さんのかばん持ちで参加したのが最初でした。

牧野　その堀越さんは晩年、不遇のうちに亡くなられましたね。

奥村正雄 氏

奥村　中国へ行って当時まだ中国各地にいた残留婦人に会い、立正佼成会から託された補助金を渡したり、励ましたりしながら毎年8月15日に旅費や宿泊費を負担して彼女たちを各地から方正へ墓参させていたんです。

牧野　それがある時、突然、中国側からビザを出してもらえなくなったと聞きましたが。

奥村　そうなんです。あれだけその仕事に使命感を持っていた方でしたから、ショックだったでしょう。

牧野　原因はなんだったんですか。

奥村　私もそれを知りたくて、堀越さんが亡くなってからも、私が個人的に知り合った黒龍江省の元書記だった方や、方正県の親しい友人にも尋ねたのですが、ある人は「ノーコメント」、ある人は「触れないほうがいい」と忠告してくれるばかりでした。しかし私は今も、たとえばあの方の酒の上での放言などがこじれて思わぬ経緯をたどることになったのではないかと推測しています。

牧野　その堀越さんと関わりの深かった立正佼成会が国交回復30周年の今年、公墓の墓苑に壮大なモニュメントを作りましたね。

奥村　地下で堀越さんが苦い顔で祝杯をあげているんじゃないですか（笑）。

牧野　方正日本語学校の講師をしてお出でいただけるということを会長から伺っておりましたが…。

奥村　中国で日本語を教えるという話は1980年代からハルピンや唐山（河北省）から来ていて、JSVにはもう登録済みだったんです。ただ1987年まで仕事の環境も変わり、仕事が忙しくて行けなかった。それが93年になって私の仕事の環境も変わり、本気で行く気になった。好調の王鳳山さんからも「招請に必要な書類はすべて提出したから」という手紙をもらって、こっちも向こうも中国側教育関係の窓口のOK待ちだったんですが、原因不明のまま、ついにOKが出なかりたですね。

牧野　理由は何だったのでしょう？

奥村　わかりませんが、先方の組織内部の角逐によるものと推測しています。

牧野　その頃各地から墓参に訪れた残留婦人たちもいまではあらかた日本に帰ったそうでしょう。

奥村　そうですね。でも私が堀越さんに紹介されてチチハルで会ったご婦人は、いったん悲願が叶って日本に帰りながら、また誰ひとり身寄りのいないチチハルへ戻ってしまったんです。少なくとも祖国は、もう老い先短い彼女にとって安住の地ではなかったのです。これは中国で唯一、建設を許された方正の目本人公墓がまだまだ1部の日本人しか知らず、大臣も議員も誰ひとり参拝していないことも考え合わせ、石井先生の悲願だった「方正を過去を牽顧みる鏡に！」、「方正を日本人の魂の巡礼の聖地に！」、という思いを私たちは改めて噛みしめたいと思いますね。

牧野　それをこの座談会のしめの言葉にさせて頂きたいと思います。みなさん、本日はどうも有り難うございました。

『新潟日報』 2006年7月22日付

にいがた 時評

命懸けの逃避行 歌忘れず

三波春夫と旧満州

終戦前後、満州開拓団を襲った悲劇の数々を取材していた私は、四年前の夏、新潟市東堀で染物屋を営業しておられた野口幸次郎さん(八四)を新潟市国際課の近藤淳一さんから紹介され、お話を聞く機会があったが、その中に三波春夫のことがでてきた。

「敗戦直後の旧満州・方正県の収容所で三波春夫と一緒だった。その後、彼はシベリアへ移送され、衛生兵だった私は重傷者の保護を命令され、方正の収容所にとどまっていた。だが事態が急迫し、地中に隠していた武器や麻薬などをやって中国軍の顔見知りを買収し、ハルビン行きの貨物列車に潜り込み、収容所を脱出した」

現在の中国黒竜江省、ハルビン市方正県は敗戦時、ソ連軍の侵攻(一九四五年八月九日)で慌ただしい逃亡を余儀なくされた北満各地の開拓団員(ほとんどが老幼婦女子)たちが、想像を絶する苦難の末にたどり着いた田舎町である。しかしここでも迫り来る寒さと飢えと疫病で同胞はばたばたと死んでいった。

それから六十一年、この町はいま日中関係逆流の時代に「方正こそ友好の原点」とする見方が広がりを見せている。それは六三年、まだ日中国交回復もなく中国には侵略者日本への憎悪が渦をまいていたこの時期に、敗戦時死んでいった同胞の遺骨を集めてくれ、ここに公墓を立ててくれたことによる。いまもって中国にある日本人の公墓はここだけだ。

◇

それにしても三波春夫はこの時期、どういう経緯でこの方正県にいたのだろうか。三波の生前、秘書として長年、父に付き添った長女・八島美夕起さんの証言である。

「方正でのことは、三波自身が著書『すべてをわが師として』の中でも書いていますし、取材や講演の時にはこの地名を出して話していました。三波は北満のウルクリ山を陣地としてソ連の参戦に直面したあと退却、四五年九月九日に敗戦を知ります。〈宮城へ向かって…〉と最後の捧げ銃をしたあと武装解除され、方正という部落へ歩いて向かいました」

三波の所属する日本軍がいたウルクリ(烏爾古力)山は、黒竜江省佳木斯から松花江沿いにロシア国境へ向かったところにあり、旧日本軍が三層の頑丈なトーチカを築いてソ連軍と対峙した山岳地帯である。

今年の五月、会田洋柏崎市長らも参加し柏崎市訪問団が、横柳柏崎開拓団跡地や方正の日本人公墓を訪れた。一行には柏崎開拓団と隣接していた長野開拓団の記録を調べている長野県の「旧満州を調査記録する会」も同行したが、記録する会の方々はウルクリ山近くまで足を伸ばし一帯を管理する富錦市で、三波たちがソ連軍と対峙したトーチカ群にまつわる中国側の資料を得て帰国した。その中にこんな下りがあった。

「一九四二年、日本帝国主義侵略者はこの山に大規模なトーチカ陣地を築くため、多くの中国人労働者を連行、工事が終わると軍事秘密を守るため二万人余を皆殺しにした。その中でただ一人馬運栄は首のつけ根に重傷を負いながら、死者の山の中から逃げ延びて村人に助けられ、唯一の生き証人となった」

◇

ところで三波の属した部隊は、ソ連軍が侵攻してきた四五年八月九日から敗戦を知った九月九日まで二十七日間、時には近くを通るソ連軍に気づかれぬよう息をひそめ、時には紛れ込んできた従軍慰安婦や避難する開拓団の婦女子をも従えながら方正へ向かったのだった。(『すべてをわが師として』)

三波がシベリア抑留のためハバロフスクへ移されたのが同年十月二十四日だから、方正に滞在したのは一カ月前後ということになる。この間に野口幸次郎さんは方正収容所で三波の浪曲を何度か聞いたというのだ。

「佳木斯の陸軍病院の衛生兵だった私はこのとき方正に残された十人の傷病兵の世話をしていました。ある日、浪花節のうまい男がいるが、患者の慰問にどうだという話になり、現れたのが当時南條文若という芸名の三波さんで『関の弥太っぺ』をやってもらったのを覚えています」

三波の帰国が四九年九月二十日、そして野口さんの帰国が五三年四月。方正で別れた後二人は五四年八月、新潟市公会堂で九年ぶりに再会した。三波は浪曲師から流行歌手に転身していた。楽屋を訪ねた野口さんに三波は「よく訪ねてきてくれたね。新潟の緑会(三波の後援会)の役員になってください」と言って手を握った、という。

それから時が流れた。三波は五年前に他界し、野口さんは昨年、軽い心筋梗塞で倒れ、いま横浜市の長女のもとで静養している。

奥村 正雄
(方正友好交流の会顧問)

拡散する着火点　山口 秀人

「今、思うこと――1960年代から日中国交正常化への道」

西園寺一晃

≪解説≫

本講演は今年、2017年6月11日（日）第13回方正友好交流の会総会後の記念講演の採録である、西園寺一晃（さいおんじ・かずてる）さんは1942年生まれ。日中が国交正常化する以前の1958年、民間公使として一家で北京に移住された西園寺公一氏の長男である。

10年間を中国で過ごされた後、帰国され欧州に遊学後、朝日新聞社に入社。現在、東日本国際大学客員教授、北京大学客員教授。著書に『青春の北京 北京留学の十年』『中国辺境をゆく』『鄧穎超―妻として同志として』『「周恩来と池田大作」の一期一会』などがある。

今回の総会及び講演会は、東京新聞が開催の告知を掲載してくれたこともあり会員や本誌の読者でない方も聴衆として参加された。その中の一人から「採録されるに当たっては、ぜひ二、三行でいいから、文革時代のことを追加してほしい」と、西園寺さんと大類両名宛に葉書が来た。西園寺さんにこの葉書のコピーを送ったところ、西園寺さんから「文革の時代のことを紹介するには二、三行では無理であのので、今回は触れないでおく」という連絡をもらった。私も、文革時代の体験を書くには、たぶんこの講演以上の枚数を費やさないと紹介することは難しいと思う。文革当時、北京大学に在学中であった西園寺さん故、当時の話そして今、文革をどう振り返るかなど、とても興味ある話が聞けそうであるが、別の機会にお話していただければと思っている。

（大類）

歴史を知らない日本人

ご紹介いただきました西園寺です。本日は、私よりも中国を良く知っている先輩の方々がたくさんいらっしゃいまして、お前そんな話はみんな知っているよと言われるのがオチだと思いますが、恥を忍んでお話させていただきます。

私は、現在日本人の最大の欠陥は、歴史を知らない事だと思います。それは教育の問題ですが、同時に政治の問題でもあります。特に近現代史、これを教えない。興味を持たない。従って、たくさんの重要なことを知らない。よく中国との間で、「歴史認識」が問題になります。歴史認識というのは、ある歴史を知っていて、その歴史をどう認識するか、という問題です。多くの日本人の場合はそれ以前の問題です。特に若い世代、歴史を知らない者が、どうして認識できるのか。ですから、中国と日本の特に若い人の間では、話が噛み合わないのです。

でもある意味、中国の若者にも同じことが言えます。私は母校の北京大学で、たまに若い方を相手にお話をしています。学生たちは日中戦争のことは知っています。徹底的に教

育されていますから。ところが、1949年の中華人民共和国の成立から1972年の国交正常化まで、この23年間の日中関係については、ほとんど知りません。これは不幸です。この23年間、日中関係は最悪でした。国家関係は敵対関係にありました。ところがその時代に、民間の交流は花盛りだったのです。両国の多くの心ある人たちが、それこそ命がけで、日中関係を築き、守ってきたのです。そのために、殺された人もいます。1960年10月、当時社会党の委員長だった浅沼稲次郎は、日中の友好は大事だと、日比谷公会堂で演説していました。その時、右翼の青年が突然壇上に駆け上がり、浅沼委員長を刺殺したのです。そのようなことを、中国の若者はまったく知りません。

この時代の民間交流を、いろいろな人たちが命がけで取り組んできました。その歴史を、中国の若者・大学生がもし知っていたなら、あの様な反日運動は起こらないと私は思います。10数年前に、反日学生運動がありました。私は、個人的に彼らの気持は解ります。しかし、日本は全て悪い、憎いと、日本製のクルマをひっくり返し、日本関係の商店を襲撃して……。もし23年間の歴史を知っていたら、あの様なことは起こらないでしょう。あの時代、日本の多くの人たちが、命がけで日中関係を守ってきたという歴史を知っていたら、日本は全て悪いという考えにはなりません。歴史を我々が学ぶのは、成功の歴史を自慢したり、失敗の歴史を悲観したり、憎しみを募らせたりすることが目的ではない。我々が歴史を学ぶのは、そこから現在と将来にどう生かしていくのかを学ぶためです。これが、歴史を学ぶ意味、目的だと思います。

日中関係の歴史を俯瞰する

その様な意味で少し長いレンジで、日中関係の歴史を振り返り、現在の日中関係を考え、将来の日中関係を展望する必要があると思います。あの戦争の歴史だけではなくて、どうしてあの戦争に至ったのか、ということも含めて考える必要があると私は思っています。

18世紀の末から19世紀の初めにかけて、世界は大きな変化に見舞われます。新しい生産と社会の仕組みが生まれました。それは資本主義というものです。何千年という封建主義の壁を打ち破って、主に西ヨーロッパにおいて新しい制度ができました。これは2つの革命を経て樹立されたのです。産業革命と政治革命です。この二つの革命で、封建主義は崩壊し資本主義が勃興しました。当時はまだ民主主義の芽ですね。そして、高度に発展した科学技術によって、いくつかの国は強大になってゆきます。ここまでは、社会発展学的に見ても素晴らしいことです。

しかし、その結果、どういうことが起きたか、です。科学技術が振興し経済が大きく発展すれば当然軍事的にも強くなります。その結果、列強というものが形成されます。幾つかの国は、国力が大きくなって国内だけでは収まりきれなくなり、外へ出る。何をしたかと言うと、植民地の争奪戦です。領土と資源の争奪です。この中には人的資源、つまり奴隷の争奪さえも行われました。列強というのは主に西ヨーロッパで起こった現象ですが、米国、ロシアも加わります。当時、世界で最も立ち遅れていたのは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカです。そしてそこには多くの土地、資源がありました。列強はそこに向かって行きました。アジアを見てみると、まず英国が東進し、インドを征服します。さらに東進すると中国です。当時の中国は清朝です。閉鎖的で腐敗し立ち遅れた国でした。それでも当時の清朝は、世界のGDPの半分近くを占めていたのです。中国は、四大文明の一つ

を発祥した国で、「地大物博（領土が広く、物産が豊富）」の国でした。その中国に英国は1840年にアヘン戦争を仕掛け、腐敗してなす術もなかった清朝を打ち負かします。それを機に、米、仏、ロなどが中国に進出し、事実上中国はその後100年間、列強の植民地、半植民地となる屈辱的な歴史が始まります。

日本にも同じようなことが起きました。嘉永6年（1853年）日本に「黒船」がやってきます。日本の対応が間違っていたら、日本も征服され植民地になったでしょう。ところが、中国の対応と日本の対応は違ったのです。中国は、なす術もなく蹂躙され植民地になってしまいました。当時の日本は江戸末期、薩長連合と徳川幕府の矛盾が激化、新選組、坂本龍馬が活躍した時代です。黒船を前にして、日本は大混乱に陥ります。その結果日本は、自己変革運動をやります。明治維新です。幕府を倒して、封建的色彩を色濃く残したままなのですが、議会制民主主義を基盤とする近代国家に生まれ変わってゆきます。そういう意味では、明治維新は素晴らしいことだったと、私は思います。アジアで初めて、封建制度を倒して近代国家が生まれたのです。

植民地、半植民地に転落した中国の民衆には大きな３つの山がのしかかっていました。帝国主義、封建主義、買弁資本主義（外国列強と結託した独占資本）です。そういった中国の現状を変えたい、という若者がたくさんいました。彼らはさまざまな形で３つの山を崩そうとしました。しかし結局、挫折しました。その心ある、志ある若者たちが日本を見た時に、日本は模範的な国だったわけです。アジアで初めて近代国家になった、日本に学ぼう、日本に学んで、中国の変革をやろう。そういう人たちが、明治維新以降、たくさん日本にやって来ました。その中の一人が周恩来です。皆さんご存知のように、若干19歳の周恩来青年です。

明治維新を達成した日本は、外国からどんどん先進的なものを取り入れて、発展し強くなってゆきます。この時、日本の前には２つの道がありました。１つは、外国列強に侵略、圧迫されているアジアの国々と連携して、アジアの独立を守って行くという道。これは当時の自由民権思想のなかに表れています。これは、アジア諸国との連帯と共存共栄、平和への道です。もう１つの道は、列強の仲間入りをして、列強と競って、植民地を争奪するという道です。これは、富国強兵、軍国主義への道です。残念ながら日本は、第２の道を選びました。そこから、日本とアジア、日本と中国の関係は、最悪な状況になって、それがいまだに影を落としているのです。

こうしたことを、少し長いレンジで、日本とアジアの関係、日中関係を見る場合に、どうしても知っておかなくてはならないと思います。その後のことは、皆さんよくご存知です。日本の軍国主義が中国を侵略する、朝鮮半島を征服します。やがては、米英仏ソ連合軍を相手に、戦争を始めます。そして、ご存知のように敗れます。私は、多くの日本人の中に、戦争観について大きな誤りがあると思います。それは、多くの日本人は、日本は米国をはじめとした連合国と戦った太平洋戦争に敗れた、主に米国に負けたと思っている。半分はその通りです。しかしあとの半分は、朝鮮半島や中国の民衆のレジスタンス、抗日戦争に負けたのです。この２つの戦争は、異なるものです。

日本と米国、日本と連合国との戦争は、日本があの卑怯な真珠湾奇襲攻撃をやりましたが、日本も米国も、宣戦布告してやっているのです。言葉は適切ではありませんが、「ノーマルな戦争」です。お互いに宣戦布告した戦争ですから。

ところが、朝鮮半島や中国への侵略は、宣戦布告も何もない。一方的に攻めて行き、奪い取った侵略です。先ほどからお話に出ている満蒙開拓、「開拓」などというきれいごとではなく、奪い取ったのです。そこには中国の農民が居たのですから。中国の農民を追い出し、奪い取った。土地を奪い取るだけでなく、銃剣を突き付けて、農民を強制的に日本に連行しました。その農民たちを工場や炭鉱に押し込んで、過酷な条件の下、強制労働をさせました。そういう歴史があるのです。しかしその後のことは皆さんよくご存知です。中国では抗日戦争が広がって行き、結局、日本は敗れた。日本は米国だけに敗れたのではない。中国の皆さんにとって、1945 年は抗日戦争の勝利です。

冷戦体制に翻弄される日本

もう 1 つの問題は、日本は戦後、この軍国主義の誤りを反省、謝罪し、平和国家として生まれ変わる、そのチャンスはありました。それは敗戦時です。しかしそれは残念ながら、当時の状況、冷戦という状況に翻弄されて、できませんでした。つまり、ホットな戦争は 1945 年に終わりましたが、ホットな戦争の終わりは、クールな戦争の始まりでした。当時は、一方には米国がいて、もう一方にはソ連がいて、それぞれが多くの国を糾合し両陣営に分かれていました。そしてクールな戦争を展開するという図式でした。米ソがそれぞれの立場で、冷戦に対応しようと考えるのは当然です。

当時の米国はトルーマンドクトリンに沿って、いかに冷戦に対応するか、米国が先頭に立っていかに戦うか、という戦略が必要でした。アジアにおいては、対ソ、対社会主義陣営の防波堤を築いて、対応するというものです。

日本が敗れ、中国大陸では共産党勢力と国民党勢力の内戦が始まりました。両党は政治勢力だけではなく、軍隊も持っていたのです。米国は、この内戦では 99%、国民党軍が勝つと思っていました。そして国民党が政権をとった中国を、対ソの防波堤にしようと考えたのです。皆さんよくご存知のように、当時の国民党の軍隊は、主に米国とドイツの装備です。空軍も海軍もある世界最新鋭の、400 万人の軍隊です。一方、中国共産党の軍隊は、正規軍 100 万、小銃一丁を手に持ち（それ以上の武器は、敵から奪い取るしかありませんでした）、粟を食べながら戦うボロ軍団、ゲリラ軍隊です。最新鋭の 400 万の軍隊と、100 万のボロ軍隊が戦ったら、どちらが勝つか。そんなことはすぐに分かります。ところが奇跡が起こりました。100 万のボロ軍隊が、400 万の精鋭部隊に勝ってしまったのです。それは、「兵士の士気」、「民衆の力」というものを、計算に入れていなかった米国の戦略的誤りでした。

米国のアジア戦略は完全に狂ってしまいました。戦略の立て直しが必要になりました。米国は日本を占領しました。その時の米国の対日政策は、明確でした。それは、日本の軍国主義の根絶やしをする。再び日本の軍国主義が立ち上がれない様に、徹底的にその芽を摘みとる。これが米国の対日政策でした。そのために、米国は幾つかのことを実施しました。

一つは東京裁判です。東京裁判では主に軍人のA級戦犯を徹底的に糾弾、処刑しました。一方戦後の日本支配を考えて、政界の戦犯は残しました。余談ですが、岸信介とか賀屋興宣とか、実質的にA級戦犯が総理大臣や大臣になるなどということは、他の国では考えられません。これは日本の恥です。

もう一つは、米国は日本に米国式の民主主義を与えた。これは良いことです。結社の自由、言論の自由、デモの自由、自由選挙……。今の若い方は知らないでしょうが、それまでは女性は選挙権すらなかったのです。日本はそんな国でした。そこに、民主主義を持ち込んだ。これは、素晴らしいことです。米国に貰ったにせよ、です。そしてもう一つは、日本に徹底的な民主化教育を普及させ、軍国主義教育が排除されました。軍国主義的教員はパージされました。

そして最後に、米国は日本に憲法を与えた。現在の、平和憲法です。憲法9条の2つの条項。1つは、日本は一切の武力、戦力を有しない、戦力保有の放棄。もう1つは、日本は一切の戦争に参加しない、参戦権の放棄です。1つだけの例外は、日本が外から侵略された時、もちろん自衛権はあるという事です。そうして米国は、日本からすべての武力を奪ったのです。

しかし、それが米国の大いなるジレンマになってゆきました。中国大陸では、国民党勢力が負けて、社会主義の中華人民共和国ができました。新中国は当然東側陣営に入ってしまいました。では、アジアにおいて、どこを対社会主義の防波堤にするのか。日本しかないのです。ところが日本からすべての武力を奪ってしまった。防波堤にするためには、一定の力がなければならない、戦力がなければならないのです。これが米国最大のジレンマでした。そこで、なし崩し的に日本に再軍備をさせたのです。まず、警察に少しの武力を持たせた。警察予備隊です。それから、もう少し軍隊に近い保安隊というものを創った。そして実質的には軍隊となる、自衛隊を創ったのです。憲法上、「自衛隊」としか言えない。軍隊とは言えないのです。結局、日本には事実上軍隊とは言えない軍隊が存在し、米国の要請に基づいて、日本は冷戦における東アジアの防波堤となりました。日本はあの戦争について、反省し総括をして、本当に平和国家として生まれ変わる、その上で中国やアジアの人々と和解する、それができなくなってしまったのです。

冷戦下の日中関係

冷戦の中で、日本は米国と軍事同盟条約を結び、西側陣営の一員となりました。中国は東側陣営です。再び戦争こそしないものの、新たな対立関係になりました。再び不幸な歴史が始まったのです。一方中国では、中華人民共和国ができました。これから中国は、長年の封建主義や内戦で疲弊した国を再建しなければならなかったのです

私は1958年に、後ほど触れますが、両親に連れられて北京に移住しました。北京に着いて、そして帰国するまで、周恩来夫妻には本当にかわいがっていただきました。特に夫人の鄧穎超さん。私は鄧穎超さんを「鄧媽媽」と呼んでいました。ある時、周恩来総理の口から次のような事を聞きました。「中国が、日本と正常化をする努力をすると決めたのは、1950年代の初めだ」と。中華人民共和国ができて、間もなくです。ただその時、周恩来総理は、「それをするには2つのネック、障害があった。一つは相手のあることだから、日本が応じるかどうかだ」と言いました。冷戦の最中ですから。

内戦で敗れた国民党勢力は台湾に逃れました。中国は革命を完成させるために、台湾を平定させて全国を統一したい。これは時間の問題だと思われていました。ところが、1950年に朝鮮戦争が起こり、米国は第七艦隊で台湾を守ったのです。第七艦隊は世界最強の海軍です。これに守られたら、当時の中国では、さすがに手出しができません。日本は、台湾の国民党政権が中国の唯一合法政権だという立場をとりました。つまり、法的には中華人民共和国は存在しないということです。これは後に様々な問題となって出てきます。

皆さんにも大いに関係のある方がいらっしゃるかも知れません。日本が戦争に負けて、どこの国でもそうですが、まず国としてしなければならないことは何か。朝鮮半島や中国大陸やアジアの各地に取り残されてしまった日本人、これをいかに安全に日本に帰すかということです。中国大陸において、日本の敗戦が濃厚となってきた時に、一番初めにお偉方が逃げてしまった。次に、軍隊の親分たちが逃げた、軍隊が逃げた。最後の最後に取り残されたのが、一番弱い女性や子供、そして捕虜です。中国は1950年代に、日本と国交正常化したいという延長線上で、日本へ幾つかのシグナルを送ります。その内の一つが、中国に取り残された日本人、この人たちが帰国する希望があれば、全面的に支援しますと表明したことです。どうぞ日本はそのための交渉団を派遣して下さいと言いました。中国は希望者をすべて安全に日本に帰すことに協力しますというのです。さて、困ったのは日本の政府です。交渉するということは、相手の政府を認めるということです。しかし日本にとって、中華人民共和国は存在していないのです。存在していない政府と、どうやって交渉するのか。日本政府は動けませんでした。こうして、中国に取り残された日本人は、国によって捨てられました。しかし、それを政府に代わって行ったのは、日本赤十字会、日中友好協会、平和連絡会です。民間団体です。民間の団体が、中国政府と交渉をして、日本人を帰還させる。これは、残留邦人だけではありません、その後、中国政府はすべての捕虜は釈放し、帰国する協力をすると表明しました。その時も、日本の政府は交渉できませんでした。やはり民間団体の努力で、捕虜の帰国が実現しました。

これは、中国政府の日本政府に対するシグナルだったのです。あの戦争を乗り越えて、正常な関係を樹立しようとのメッセージでした。これは両国にとって良いことです。しかし、日本は応じませんでした。周恩来が政治協商会議の席上、自ら演説をして、日本に呼び掛けます――「正常化のための話し合いをしましょう」と。もう一つ、ジュネーブには、中国の代表部も日本の代表部もありました。ジュネーブの中国総領事が、日本の総領事に書簡を２通出しています。正式な書簡です。正常化のための話し合いをしましょうという提案です。これについて、当時国会で野党に質問された政府は、そのようなものは存在しないと答えています。これが、周恩来が懸念した一つ目のネックです。

正常化の阻害要因の一つ「中国民衆の感情」

周恩来は、もう一つのネックがあると言いました。それは、「中国の民衆の感情だ」と言いました。戦争が終わったばかりです。民衆のなかには、我々はやっと自分の国を取り戻した、我々は強くなって今度こそ日本に仕返しをしてやるぞ、そんな感情が満ち満ちていた。憎しみと復讐心です。周恩来総理は、「そういう感情が民衆の中に満ち満ちている以上、正常化はできない。この民衆の感情をなだめて、変えなくてはならない」と言いました。

周恩来総理は、たくさんの会議を開き、たくさんの人々の意見を求めた。その結果、出口は一つしかない。それは、あの戦争を画策し、命令し、実行した一部の軍国主義者と、日本の一般の国民（国民の中には軍服を着せられて戦場に送られた兵士を含む）を分ける。日本の一般の国民も、犠牲者だ。だから、日本のたくさんの人たちは、戦中戦後、大変な苦労をした。食べるものもない。そして、軍人も軍服を脱げば、一般の市民、一般の農民、一般の労働者かもしれない。こうした人たちが駆り出されて、戦争をさせられた。この人たちは敵ではない、と。周恩来は言っていました、「そんな普通の民衆たちが軍服を着て中国にやって来て、中国人を殺したとしても、それは兵士の責任ではない」

その様な考え方に基づいて、まあ今の言葉で言うと、私は軽すぎる言葉だと思いますが、「二分論」と言われています。ごく一部の軍国主義者と、国民とを分ける。そういう考え方、そういうことでしか、解決はない。周恩来総理たちが出した結論です。それから中国は何十年にわたって、そういう教育を続けた訳です。

それを考えますと、私はよく靖国問題を思います。問題はA級戦犯つまり戦争を画策し、命令し、判断した、その人たちも一般の人たちも一緒に合祀されています。そこに、日本の総理大臣や閣僚が行って参拝をし、「感謝の意を表する」と言うのです。中国が延々と何十年間にわたって二分論で取り組んできたものが、水泡に帰しますよ。

これまで、何人かの総理大臣が靖国神社を参拝しました、安倍さんも行った、小泉さんも行った、中曽根さんも行った。今も大臣がたくさん行きます。彼らの発言を聞いていると、「日本の礎を築くため、尊い命を失った人たちに、感謝の誠を捧げる」、こう言っています。

私はこれが、戦争観の表れだと思っています。もしあの戦争が、日本にとって正義の戦争だったなら、その戦争に行って傷付き亡くなった人たちには、国を挙げて感謝しなくてはならない。しかし、もしあの戦争が間違った戦争だとしたなら、その戦争に駆り出されて、傷付き、亡くなったのだとしたら、その人たちに国は謝罪をしなくてはならない筈です。感謝と謝罪、この違いは大きいです。真逆です。そういう意味で言えば、多くの政治家が感謝をするということは、言葉を変えれば「あの戦争は正しかった」ということになります。中国や韓国が怒るのは当然でしょう。私はそう思います。

そうした色々な問題があり、1950年代、冷戦が始まり、冷戦が深まり、東西の対決が厳しくなって行きました。人間もそうです、２人の人間がものすごく仲が悪い。相手に殺されるかもしれない。相手がナイフを持ったら、自分もナイフを持ちます。相手がピストルを持ったら、自分もピストルを持ちます。まったく同じです。東側陣営と西側陣営、相手が機関銃を持ったら自分も持つ、相手が核兵器を持ったら自分も持つ。こうして軍拡競争はエスカレートします。当時よく言われましたが、米ソの核兵器だけで、計算上は人類を10回殺せると。冷戦はそこまで行ってしまいました。しかし、もう一方の側面としては、非常に危なっかしい均衡ですが、大きな戦争は起こらなかった。核戦争は始めたら終わりですから、核戦争に勝者はいません。片方はソ連が子分を牛耳り、片方は米国が子分を牛耳る。親分の命令なしには何もできませんから。下手に始めたら大きな戦争に発展するかも知れないから、戦争ができない。冷戦時代というのは、奇妙な、危なっかしい均衡によ

って成立していた側面があります。

ところが、1950年代、画期的な事が起こりました。それは、1956年、鳩山一郎政権が、ソ連と国交正常化してしまったのです。これは大変なことでした、冷戦のなかで。敵の親分と正常化してしまったのです。冷戦に風穴を開ける出来事でした。

日中国交正常化の機運と挫折

その時に日本のなかで、大きな世論が巻き起こりました。その世論は、「次は中国だ」と。むしろソ連より先に中国とやるべきだったと、大いに盛り上がりました。周恩来もそれを見て、これで日中国交正常化の道が開けたと思ったでしょう。しかし、鳩山一郎は日ソ国交正常化を苦労してまとめ、疲れ果てて辞めてしまいました。ポスト鳩山を争ったのは、岸信介と石橋湛山です。石橋湛山は自民党でも非常にリベラルな人物で、東洋経済の記者だった方ですね。彼の選挙公約は「日中国交正常化早期実現」です。岸信介の公約は「台湾との関係維持」でした。まあこれは余談ですが、私は自民党というのはすごい党だと思っています。懐の深さがすごい。色々な正反対の議論があって、それが許される。日中問題にしても、岸信介もいれば佐藤栄作もいる、一方では、松村謙三もいるし、石橋湛山もいる。宇都宮徳馬もいれば古井喜実もいる。まったく正反対の意見を持つ人がいて、それが許される。それが自民党のいい所だった。今とは違いますね、一強で何も許されない。異論も言えない。今の自民党はおかしくなりました。

それはさておき、日ソ国交正常化の次は中国だと、世論は大いに盛り上がりました。中国でも、この機会を逃してはいけないと思いました。ただ、政府の関係はまったくない訳ですから、どうすれば良いのか分からない。

半分は私事で申し訳ないのですが、1958年に、周恩来総理に招かれて私の父がそのために中国へ行きました。日中国交正常化の下ごしらえをするためです。

ところが、歴史というものは面白いもので、石橋湛山と岸信介が争って、石橋湛山が勝ってしまった。日中国交正常化早期実現という公約を掲げた石橋湛山が勝った。いやこれでもう国交正常化はすぐに実現する。と思った矢先に、石橋湛山が病に倒れてしまいました。2カ月で辞任してしまいます、その後に出て来たのが岸信介。皆さんご存知かと思いますが、岸信介が総理大臣になって間もなく台湾に行きました。台湾に行って蒋介石と共同声明を出します。その中で、公然と「台湾の大陸反攻を支持する」と表明したのです。これはもう中国としては穏やかではないですよね。

同じ時期に、二つの事件が起こっています。劉連仁事件と、長崎国旗事件です。若い方はご存知ないかも知れませんが、劉連仁事件というのは、前述のように、戦時中に朝鮮半島や中国から日本への強制連行というものがあった。例えは悪いですが、「猿の惑星」という映画をご覧になりましたか？　猿の兵士が馬に乗って銃を構え、人間狩りをする。人間を連れて来て奴隷にし、働かせる。本当に同じ様なことです。銃剣を突き付けて農民狩りをして、日本に連れて来て強制労働させる。詳しい統計は分かりませんが、一説には朝鮮半島から7万人、中国大陸から4万人と言われています。これは未だに日本政府は認めていません。

余談ですけれども、北朝鮮による拉致問題というものがあります。大変なことで、現代の社会でこの様なことがあってはいけない。被害者の皆さん、被害者の家族の皆さん、大変気の毒です。しかしアジアにおいて、「拉致問題」と言うと、何か白々しいところがある。冷めたところがあります。どうしてか？　日本は何をしたか、強制連行という拉致をやっているのに、未だに認めていないじゃないかと、どこかにそういう気持ちがあるのだと思います。

1945年の終戦間際に、中国から劉連仁という方が連れて来られて、北海道の炭鉱で働かされていた。一日10何時間も。寒いときは零下20度、たくさんの人が飢えと寒さで死んでゆきました。鉄条網を張って逃げられないようにして強制労働をさせられました。彼は耐えられなくなって、仲間と一緒に脱走します。仲間は死んだり捕まったりしました。彼は山の中に逃げました。その山は真冬には零下30度になるそうです、そこで13年間、まるで獣のように生きていた。もちろん、戦争が終わった事も知りませんでした。1958年に、北海道の農民がキノコを採りに行って発見し、救い出しました。劉連仁を救うということは、人道上の問題です。それでも当時の政府は、強制連行を認めず、何もしなかったのです。劉連仁を助けて、病院に入れて、中国に帰したのは、友好団体や華僑の皆さんです。

そうした問題が幾つかあって、さすがの中国も堪忍袋の緒が切れた。一切の交流を止める。そういう事態になった訳です。そこで周恩来総理は、それまでは、何とか日本の政府との関係をつけて、正常化の交渉を進めたいといろいろ努力をしてきました。正常化の交渉は政府間でしかできないことですから、色々な試みをして来た。色々なシグナルを日本へ送った。そうして石橋内閣ができ、ようやく実現すると思ったら思わぬ事態になり、岸信介が出て来た。日中関係はまた逆戻りです。

周恩来は、政策の大転換をやります。その主旨は「急がば回れ」です。今すぐ、政府間の交渉は無理だ。非現実的だ。それならば、遠回りであっても、様々な民間交流を通じて、民間の絆を強めて、その力をもって政府に圧力をかけてゆく。いわゆる、「民間交流積み上げ方式」です。そこからの60年代の中国は、一方では冷戦の中で激しい国家間の対立がありながら、その一方で日中の民間交流は徐々に拡大してゆきます。

当時、中国に行くことは大変でした。当時のパスポートを見ると分かります。日本は一応民主的な開かれた国ですから、パスポートを持っていればどこの国にも行ける。ところが日本のパスポートには、「どこの国に行ってもいいです。しかし東ドイツと北朝鮮と中国には行けません」と書いてあった。パスポートを持っていても、中国には行けなかったのです。中国に行くためには、特別な許可が必要でした。民間交流が拡大する中で、各界各層の人たちが中国行きを求めます。外務省はなかなか許可を出さないのです。多くの人は中国行きを求めて、外務省に座り込みました。パスポートをもらうまでは動かないと、座り込み作戦、そんなことまであったのです。苦労して苦労してやっと申請しても、10人申請をして2人しか許可されなかったとか、すべて拒否する訳にもいかないですから。それでも少しずつ少しずつ交流は拡大してゆきました。

岸信介の後に総理になったのが、池田勇人です。この人は、政経分離論者でした、政治

的には中国は認めない、しかし経済的な貿易はある程度拡大しても良い、民間交流もある程度緩和されました。この時期に、未だ政府間では正常化されませんでしたが、民間の貿易や交流は、大いに発展しました。貿易に関しては、純民間貿易から「ＬＴ貿易」という半官半民の貿易形態になりました。その意味で、池田勇人には功績はあります。

大国の分裂と米中の苦悩

1960 年代は、冷戦がますます厳しくなります。米中は激しく対立し、それに伴い日中関係も悪化します。特に池田内閣の後にできた佐藤栄作内閣は、池田内閣の前の岸内閣のレベルまで、日中関係を後退させました。そしてもう一つ、冷戦構造の中で、非常に複雑な状況が生まれました。それは、東側陣営の中で、中国とソ連という大国が分裂し、対立関係になった事です。両国関係は論争を経て決裂、東北の珍宝島（ダマンスキー島）では小規模ながら武力衝突が起きました。中ソの決裂は冷戦構造をさらに複雑にしました。

そして 60 年代の終わり頃、厳しい冷戦の最中、水面下で大きな動きが進行していました。それは、「毛沢東の溜め息とニクソンの苦悩」から始まりました。日本では佐藤政権の反中国姿勢がより明確になっていました、1967 年に佐藤が米国に行って、当時はジョンソン大統領ですが、日米首脳会談を行い、共同声明を発表しました。中国封じ込めをさらに強化するという姿勢です。1969 年、米国大統領はニクソンに替わっていました、日本はまだ佐藤栄作政権です。佐藤が米国に行き、佐藤・ニクソン会談を行い、共同声明を出しますが、これも対中強硬の声明です。

しかし、ニクソンは佐藤との間で対中強硬声明を出しながら、もう一方で、全く相反する事を考えていました。ニクソンは苦悩していました。原因はジョンソンが始めたベトナム戦争です。ベトナム戦争の始まりは、南ベトナムに反政府ゲリラが生まれ、これが南ベトナム解放戦線に発展した事です。南ベトナム軍が掃討しようとしたがなかなかできない。米国は軍事援助をして、武器を与えました。それでも事実上北ベトナムに支援されたゲリラは増えるばかりで、このままでは南ベトナムが危ういと思った米国は参戦します。米国は最大時には 50 万の軍隊を投入しました。核兵器以外のすべての武器を使いました。枯葉剤などの化学兵器も含めてです。それでも、ゲリラは増える一方で、米国は泥沼にはまってゆきます。とは言っても、米国は負けた訳ではありません。米国はある意味で世界的な国家です。当時、米国は世界のあらゆる地域に影響力を持っていました。

では米国にとって、世界で一番重要な地域はどこか？　米国本国です。第二に重要な地域はどこか？　それは西ヨーロッパです。西ヨーロッパというのは、一方では米国を中心とする北大西洋条約機構（NATO）があり、もう一方ではソ連を中心とするワルシャワ条約機構があり、膨大な軍事力が対峙していました。米国がベトナム戦争という泥沼にはまる前、両勢力は、幼稚園児と大学生と言われたほど、圧倒的に NATO が強かったのです。ところが、米国がベトナムで泥沼に陥り、消耗戦を強いられていたその間に、徐々にその距離が縮まって、放っておけばワルシャワ条約機構軍の方が強くなる可能性が出てきたのです。航空機と戦車の数は、既にワルシャワ条約機構軍の方が上回ってしまっていました。

米国は、第二に重要な地域である西ヨーロッパにテコ入れをしなければならない必要に

迫られました。そのためには、ベトナムから足を抜かなければなりません。つまり、南ベトナムは放棄する、ここまでは米国は決断をしました。しかし、最大のライバルであるソ連が、米国が抜けた空白に入って来るのは何とか避けなければなりません。米国は考えました。方法は一つしかありません。それは、ソ連と激しく対立する中国を利用する事です。そして、ニクソンは特別補佐官のキッシンジャーに、秘密裏に中国と接触せよ、と指示します。一方では佐藤栄作と強硬な対中国声明を出しながら、一方ではキッシンジャーに命じて中国と和解の道を探らせたのです。

中国でも大きな変化が起きていました。あの自信に満ちた傲慢とも思えるカリスマ、毛沢東が、1960 年代終わりの、ある共産党の秘密会議で、初めて弱音を漏らしました。「我々は孤立した、どうしたら良いのか」と。中国の国内では文化大革命が起き、国内は大混乱になっていました。対外的には、極左派による革命外交で、第３世界の友人を失ってゆきました。つまり中国は、世界で最も強大な国、米国とソ連と両方を敵にまわしてしまったのです。頼りの第３世界の国々も離れてゆきました。毛沢東の弱音を聞いた周恩来は動きます。まさに忖度ですよ（会場笑）。毛沢東の心境を読んだ周恩来は、文化大革命で半ば失脚していた経験豊富な元帥たちを集めて、秘密裏に会議を開きます。周恩来は元帥たちに諮問します：「今の中国の世界戦略は、正しいか間違っているか」と。元帥たちが答えを出しました。「今の中国の世界戦略は間違っています。何故かと言うと、まだまだ中国の国力は弱い。にもかかわらず、世界最大の２つの国と真っ向から対決しているなんて、馬鹿げています」と。

そこで周恩来は二つ目の諮問をします。「それでは、今の中国にとって、最大の危険は米国なのかソ連なのか？」元帥たちは答えを出しました。「最大の危険は、何千キロという国境を接しているソ連です」と。周恩来は「わかった」と言って早速毛沢東に報告し、２人で協議します。中国は米国を利用し、ソ連に対し牽制を行う事により、自国の安全を確保する道を選びます。毛沢東は周恩来に対して、秘密裏に米国と接触せよ、と指示を出します。米国も中国も同時期に、同床異夢ではありますが、同じことを考えていたのです。

周恩来とキッシンジャーの秘密外交が始まります。1971 年 7 月 12 日、米中が同時に「米国のニクソン大統領が 1972 年 5 月までに中国を訪問する」と発表し、世界をアッと言わせます。中国は、外交部のスポークスマンが発表しました。米国では、ニクソンが自らテレビに出て発表しました。アジアにおける米国の最大の同盟国である日本の佐藤栄作がこれを米国から聞いたのは、発表の 3 分前です。これが国際政治です。承認していない国を、米国の大統領が訪れるという、通常ではあり得ないことが起きるのです。その後のことは、皆さんもよくご存知だと思います。世界は大きく変わります。西側諸国は雪崩を打って中国を承認しました。中国の国連の議席も復活しました。

日本が戦争責任を総括するチャンスはあった

私は、日本が戦後、あの軍国主義の誤りを本当に反省して、被害国に謝罪をしてその上で被害国と良好な関係を築き、平和国家として生まれ変わって行くということをするチャンスは、幾つかあったと思います。しかしそれはできなかった。それはもちろん日本の問

題です。しかし中国側にも事情がありました。

一つ目のチャンスは、終戦です。あの時は先ほど話したように、すぐに冷戦に巻き込まれました。大陸では社会主義中国ができ、日本は米国によって再軍備させられ、対東側陣営の防波堤にさせられました。とても中国との正常化は無理でした。二つ目のチャンスは、国交正常化です。1972 年の日中国交正常化、その時に、日本は徹底的にあの戦争を総括するチャンスでした。もちろん、これは日本が自主的にやるべきなのですが、中国も、強硬にそれを要求しなかった。どうしてか。当時の中国にとって、最大の問題は代表権の問題でした。北京の政府が唯一の合法政権なのか、台湾の政府が唯一の合法政権なのか、これが中国にとって最大の問題でした。これを日本に認めさせることが、中国にとって最重要課題でした。結果、戦争責任の問題は置き去りにされ、日本はこの問題をすり抜けたのです。

もう一つは、日中平和友好条約締結時です。この締結の時に、戦争責任問題について徹底的にやるべきでした。しかしできなかった。日本はしなかったし、中国も求めなかった。どうしてか。日中平和友好条約における、中国側の最大の問題は「覇権条項」でした。先ほどのニクソン訪中にも関係がありますが、当時の中国にとって、一番の脅威はソ連だったのです。このソ連に対して、いかに自分たちを守ってゆくか。まだまだ弱い中国でしたから。日本との間に平和友好条約を結んで、我々は一切の覇権主義に反対すると。それは暗にソ連を指していた。交渉が始まった時は三木武夫政権です。三木はソ連との関係も悪くなかったので、ソ連のあの手この手の圧力もあってなかなか決断できませんでした。結局、三木政権は、日中平和友好条約はできませんでした。その次の福田赳夫政権でやっとできました。調印をしたのは外務大臣園田直です。腹を括ってやったのですね。中国はまず覇権条項を入れること、認めさせること、これが最大の条件だった。ですから結果として、戦争責任はなおざりになり、日本はまたすり抜けてしまった。中国の責任というよりは、中国には優先順位があったのです。

そして、現代に至っている。つまり日本は、幾つかのチャンスがあったにも拘らず、徹底した総括ができなかった。そこが、ドイツと異なるところです。
オバマが広島に行った。それは良いことです。安倍が真珠湾に行った。それも良いことです。米国の人たちにとっては、謝罪とは言わないけれど、行くことによって、日本が反省と謝罪の意味を表明したと受け取ります。それは良いことです。であるならば、どうして日本の総理はシンガポールへ行かないのか。韓国へ行かないのか。南京へ行かないのか。という問題が出てきますよね。それをしないで、真珠湾だけであれば、逆に非難されます。つまりどこかで、日本は対中国、対アジア侵略戦争について、徹底的に総括するべきです。そうしないと、戦争と関係のない若い世代に、そういう問題をまた残してしまう。かわいそうです、若い世代が。

そのなかで、近現代において、日中関係、あるいはアジアの関係、あるいは世界のなかで、私は周恩来が果たした役割というものは、日中関係に限らない。インドのネルーとの間に、平和五原則という国と国との関係における模範的な原則を打ち出しました。そして米国との和解。周恩来の果たした役割は、何も日中関係に限ったことではない。アジア、

あるいは世界の中で、果たした役割はとても大きい。それだけ、周恩来という人は大きく、寛容で、世界のことを、未来のことを考えていたと私は思います。

日中関係というものは、近現代史において戦争のことを記憶しなければならない、それは勿論そうなのですが、それだけではないと思います、もう少し前後も含めて、近現代史全体の流れの中で、日中関係、アジアとの関係を、日本人は考えなければならないと思っています。時間となりましたので、この辺で終わりたいと思います。有り難うございました。（拍手）

～ 講演後の質疑応答 ～

―質問―

毛沢東や周恩来がいた時代の政治家は、日本も含めてですが、今の政治家に比べて大物だったように思います。中でも周恩来は資料を読めば読むほど、素晴らしい人だと思います。岡崎嘉平太さんが周恩来のこと話すと涙を流される、そんな場面も見たことがあります。西園寺さんは周恩来と直接接して、その人柄にも触れていらっしゃる訳ですが、もう一方の毛沢東ですね。朝日新聞の古谷浩一さんが林彪を書いた中で、林彪が墜落死してから毛沢東がめっきり老け込んだ、と側近が証言していると書いていて非常に興味深かったです。西園寺さんの個人的な毛沢東像をお聞きしたいのですが。

西園寺

私は周恩来には何度もお目にかかり、ご自宅にも随分行きましたが、正直言って毛沢東は二回ほどしか会っていません。もちろん単独ではありません。私も当時の中国の人々もそうだったのかもしれませんが、ある種の虚像を作っていたのかもしれません。自分の中で、畏れ多くて近寄り難い、と勝手に思い込んでいた。意外に気さくな人なのかもしれませんし、よく分かりません。しかし、老け込んだというのは恐らく事実だと思います。毛沢東は林彪に期待していたのですね。当時の部下の中では若くて、切れ者ですから。

林彪事件は、先ほどの話に帰るのですが、当時の中国にとって、主な危険は米国なのかソ連なのか、という問題です。この議論をやった訳ですが、周恩来が諮問した元帥たちは文化大革命で林彪に追い落とされた人たちです、その人たちを秘密裏に呼び寄せて一番危険なのはソ連だとなった。ところが林彪は一番危険なのは米国だという考えです。周恩来は、最も危険なのはソ連で、そのためには米国と和解すべきだと考えた。林彪は、最も危険なのは米国で、そのためにはソ連と歩み寄るべきだと考えた。それを毛沢東が判断を下して、周恩来の考えを採った。

そして林彪は挫折感を感じて、いや挫折感どころかこれで切られるかもしれない。何をされるか分からないと思ったのかもしれません。林彪には二つの道しかない訳です、一つは逃げ出すか、もう一つはクーデターを起こして毛沢東を殺すか。毛沢東暗殺計画というものがあったとされています。本当かもしれませんが、正式な発表はありません。それが暴露されて、これは殺されると思って逃げた。ということが真相だと私は思っています。林彪の事件は、毛沢東との個人的な問題ももちろんあるとは思いますが、国際戦略の考え

方の違い、世界戦略の相違によって、林彪が追いつめられたことがきっかけではなかったかと。毛沢東にしてみれば、一番期待していた人が自分と違う考え方を持ったということに対して、相当エネルギーを使ったのではないかと思います。毛沢東自身も打撃を受けた。さらにソ連に向かって脱出するということになると、林彪を高くかっていた毛沢東の責任にもなる。それは自分が一番良く分かっていた。そのようなことで、歳のせいもあるのでしょうが、ものすごく憔悴したという話は事実だと思います。

―質問―

日本は敗戦後に、冷戦のなかで東アジアの防波堤になり、周恩来の国交を回復したいという思いに応えられなかった、これは非常に重いですね。それから中国大陸に残った日本人は戻って来るなと外務省が言った。満蒙開拓団は国策ですよね。行けと言われたから行った。それを戻って来るなと。戻って来る場所もなかった。福島に入植して和牛を育てていたら、今度は原発の事故。もう政府は信用できないと言っている。政府自身が非国民ではないのかと。政府はもう信用できないと、90歳の方がテレビに出て言っていました。このような風潮は何故に出て来たのでしょうか。

西園寺

私は、基本的には冷戦構造だと思います。つまり日本は、台湾の国民党政権を唯一の合法政権とした。米国の下で、ですね。そうすると北京政府は存在しない訳です。大陸に大勢の日本人が残されていたことは事実ですが、それを帰す術がない。存在しない政権との交渉はできないのです。結果として、棄民というか、見捨てるしかない。それは、冷戦構造のなかで日本が翻弄され、西側についた一つの大きなツケとしてそうした問題が残された、矛盾として。ですから、日本の政府は多くの農民を国策で開拓団と称して送り出しておきながら、その人たちを最終的に安全に戻すということはしていない、出来なかった。

―質問―

石橋湛山が倒れていなければ、変わりましたか？

西園寺

歴史に「もし」はないのですが、当然日中国交正常化はかなり早まったはずです。石橋湛山が健康であれば、国交回復までは色々と時間がかかりますから、国交回復する前に、残留邦人や捕虜の帰国に着手したでしょう。それは戦争の後始末ですから。

日中国交正常化について一言触れますが、当時の自民党には台湾派と北京派と言われる人たちがいて、圧倒的に台湾派が強かったのです。もし田中角栄が党内で議論をして多数の意見を尊重していたら、日中国交正常化はできなかったでしょう。ですから田中は党内ではほとんど議論せずに、決断し、北京に出かけたのです。勝手にやってしまったのです（会場笑）。そういう人だった。後に田中が言っていますが、「まったく勝算はなかった」と。

日中国交正常化について、日中間で大きな問題が三つありました。一つは賠償問題。もう一つは台湾問題、つまり代表権の問題。そしてもう一つは、日米安保条約の問題です。

先ほどから出ていますが、つまり米国は日本を対ソ、対中の防波堤にした訳ですから、日米安保の対外的な機能は、当然、対ソ、対中封じ込めのためのものです。中国にしてみれば、国交正常化するのだからそれはもうやめろ。という訳です。しかし、田中が行った時に、周恩来は言わなかった。議題にしなかった。何故かというと、ニクソン訪中時に事実上解決済みだったのです。中国側は米国に対して、日米安保はやめろと迫った。これから我々と米国も、我々と日本も仲良くしてゆくのだから、対外的機能として中国封じ込めをしている日米安保はやめろと。

その時に、キッシンジャーとニクソンはどう答えたか。そこで有名な言葉が出てきます。皆さんご存知の様に、『瓶のフタ論』です。米国はこう言ったのです。瓶があります、瓶のフタがあります。この瓶は米国です。瓶のなかに日本がいます。もし、瓶のフタを外したら、日本は飛び出して来ますよ。日本は一人歩きしますよ、核兵器を持つかもしれませんよ。それでいいのですか？――米国はそう言って、中国は黙った。それから中国が日米安保を公然と批判したことはありません。

ですから、米国と中国には共通の考えがあるのです。それは日本を一人歩きさせてはならない、独自の核兵器を持たせない。あり得ないですがもし仮に、日本が核兵器を持ちそうになったとしたら、米国と中国は連携してこれを潰します。ということは、米国は本当には日本を信頼していないということです。国交正常化の背景には、この様なこともありました。

―質問―

周恩来の日中関係に果たした役割は、裏側の話も含めて良く理解できました。私は、その後に出て来た鄧小平も、日中関係に果たした役割は大きいと思うのですが、どのようにお考えでしょうか？

西園寺

日本人は周恩来のことは大好きですが、毛沢東や鄧小平となると、恐らく好き嫌いがあるのではないでしょうか。それはまた別としまして、政治家というものは時代が生むものだと思います。毛沢東の時代と鄧小平の時代は違いますね。鄧小平の時代は、中国が改革開放して、経済的に急発展を遂げる時期。ですから、周恩来が当時考えていたことと、鄧小平が考えたこととは、まったく異なります。鄧小平が考えたことは、いかに中国の経済を発展させるか、国民を豊かにするか。政治家はそれぞれ自国の国民のことを考えます。当時の鄧小平にとっては、中国の国民を豊かにするために、日本と仲良くすることが必要だと考えた。これが主な原因です。

そしてもう一つは、改革開放の中国にとって、一番重要なことは周辺地域の安定なのです。中国の周辺地域には、インドがありベトナムがあり、日本があり韓国がありソ連がある。ですから、鄧小平が対外的にしたことは、まず始めに、ソ連との修復、インドとの対話、ベトナムとは争いがありましたがなんとか収めた。北朝鮮との間にも国境問題がありました。それを含めて、周辺の安定を図った。先ほど話に出ましたダマンスキー島＝珍宝島で武力衝突が起きた領有問題も、鄧小平の時代に解決しました。北朝鮮との間の長白山も半分ずつ分けました。すべての周辺を穏やかにして、中国は安心して経済発展にまい進

する、そういう環境を作った。日本に対しては、低姿勢でした。中国はまだまだ立ち遅れている。日本に頭を下げてでも、日本から技術やノウハウが欲しい。そういう時代が鄧小平の時代です。ですから、それぞれの指導者の、国を思う、その表現が異なります。そう私は思います。

―質問―

冒頭のお話にありました、現状の日中関係への危惧、若者が歴史を知らないという問題。ネット右翼やヘイトスピーチという問題もありますが、政府間が揉めているなか、なんとか市民レベルの交流で克服して行けないものだろうか。ネット社会における若者たちに、教育もありますが、もう少しどう取り組めば良いとお考えでしょうか？

西園寺

とても難しいですね。私はいくつかの大学に関係していまして、ものすごく不思議に思ったのですが、今はグローバル化してこれだけインターネットも発展し、日本という国は資源もなく海外との関係、貿易立国で生きていかなければならない。にもかかわらず今の大学生は本当に海外に興味がない。これは驚くべきことです。それはどういうことなのか、私も良く分かりませんが、ひとつは日本、特に東京は便利すぎる、良すぎるのですね、居心地が（会場笑）。

ある日本の大手の企業の若い社員が、これからは中国が大事だから語学留学して来いと言われて、2年間北京大学に留学した。2年間学んで帰って来た。そして2、3年して北京支社への異動を告げられたら、拒否したのです。私が驚いたのは２つです。１つは語学留学までしたのに行きたくないと。もう１つは、我々の時代ならクビですよ。今はクビにできない。本人が同意しないと異動させられないそうです。海外出張も駐在も。命令ではなく、本人が同意しないとやれない。まあ民主主義と言えばそうなのですが。つまり、何故行きたくないのかというと、不便だから。とにかく居心地のいいところにいたい。

我々の時代はもうずっと昔ですが、サラリーマンとなったからには、出世して重役になり社長になりたいと思うのが普通でした。今は重役や社長には絶対になりたくないと言う人が多い。そんな苦労はしたくない、給料は上がらなくても楽をしてたくさん休めた方がいい。これは、ある人は成熟と言いますが、ある面から言えば退歩ですよね。意欲とか情熱とか、そういうものがなくなって来た。

ですから、皆さん信じられますか、日本の男子大学生の70%は彼女がいないそうです。私も聞いてみますが、彼女はいらないと言う（会場笑）。下ネタではありませんが、ある大学の50代の教授が、息子さんが一人いて、夏休みに女の子から旅行に誘われたと、息子さんがですね。その教授、親父はですね、お前ラッキーじゃないかと、楽しんで来いと。お母さんは、ちゃんと避妊するのよ、コンドームを持って行きなさいよと言ったそうです。ところが本人は、「オレ行きたくない」「ＳＥＸなんて面倒くさい」と言ったそうです。生物ですから、その頃は一番異性に興味を持つ年代ですよね。ところが、ない（会場笑）。本当なのですよ、これ。日本は大変ですよ、これから。良く言われていますが、大学の現場にいると信じられない事がたくさんあります。もちろん皆が皆そうだという訳ではありませんが、本当に彼女がいない、必要ないと思っている男子学生の多いこと。

これはもう政治的に中国とどうの、海外とどうのと言う以前の問題で、嘆かわしいです。つまり、ネットが悪いのかもしれません。ネットで疑似恋愛体験とか、女性の裸とか、そうした画像がいくらでも見られる訳ですから。それでもう満足してしまって、生身は面倒だからいらないとなる――のかも知れません（会場笑）。私は若者の立場になれないから分からないけれど。

ネットの害毒、デマがすぐに蔓延する。2チャンネルとかネット右翼とかありますね。先日も10日ほど前ですが、中国からチャットが入って来ました。「天安門で爆発が起きた」、テロだと。天安門周辺が炎上していると。映像まで出てきます。そこで北京の別の友人に聞いてみたら、そんなことはないと言う。天安門まで映してくれて、まったく平穏だと。デマです、合成写真なのです。信じて私が拡散したら、一挙に蔓延して行く。そういう社会ですよね。ですから、本当に怖いです、ネット社会は。デマが問題になっていますが、情報が氾濫すればするほど、何が本当で何が嘘なのかという判断が難しい。それが今の社会です。その判断能力も徐々に薄れて来ていますし、それをとことん自分で突き詰めて調べて判断しようという意欲もない人が多い。そのような、すごく変な時代になって来たような気がします。

ただ、一方ではですね、やはり一番大切なことは「百聞は一見に如かず」、実際に接触することです。今、日本も中国も世論調査を見ると、相手のことが好きではないという人が多いです。でも中国では最近、緩和されて来たのです。何故かと言うと、500万人の観光客です。これの口コミというのはすごい影響力です。やっぱり日本は素晴らしいじゃないかと、そういう口コミが広がって行き、じゃあ自分も行ってみるかとなる。それまでは、日本人は全員が反中国ではないかと思っている。留学させている親は大変です。いじめられてはいないか、石を投げられてはいないか、と心配している。しかし子供たちは、学校に入り大学に入り、そのようなことはない。親切にされて、日本の学生と仲良くしていることが多いですから。

ですから、実際に見る、実際に交流する、これが一番大切なのです。私は民間交流で一番大切なことは、接触することだと思います。民間交流の中でも、私が知り得る限り一番効力があるのは、ホームステイです。私が関連しているところでも、毎年夏に中国の高校生50人くらいを受け入れ、ホームステイさせます。言葉はまったく通じません。でも手真似足真似でやって、一緒にスーパーへ買い物に行き、一緒に料理したものを食べます。言葉も通じないのに2日もいたら、帰る時は全員涙ですよ。人間なんてそんなものです、情がありますから。生活を共にして接触すれば、意見が異なっていても、情が移る。そうした実際に接触する草の根の民間交流は、とても大事です。自分の目で見て、自分の心で感じてくれば、お互い見方が変わると思います。

それから、皆さんは問題ないと思いますが、中国からの留学生を、ぜひ親切にしてあげてください。周恩来が19歳で日本に来て、ものすごくいじめられました、特高に。それでも周恩来は、日本が好きなのです。どうして好きなのか、聞きました。そうしたら、下宿のおばさんがすごくいい人だったと。お金がない時は、ご飯に呼んでもらって美味しい豆腐を食べさせてくれた。そのおばさんの親切が、身に沁みていると言っていました。もしそのおばさんが意地悪で悪い人だったら、周恩来も人間ですから、あの人は日本を嫌いになっていたでしょう。そんなものです。ですから、皆さん、いろいろな留学生がいますけ

れど、ぜひ親切にしてあげてください。そうすれば彼は彼女は、絶対に日本が好きになります（拍手）。

≪会場からの発言≫

私は日中友好協会所沢支部の者です。私の支部の事務局長から、方正の会の冊子をいただいて、今日の講演会に伺いました。今、民間交流とのお話がありましたが、私は2005年から中国山西省の運城に7年間日本語教師として行って参りました。先月も、山西省まで妻と一緒に、学生の結婚式に行きました。また、運城学院の子供が、南海大学を経て北海道大学に来ています。その学生と8月に都内で同窓会を開こうと、そのような交流を企画しています。子供と接することの大切さを、私は身に沁みて感じています。私自身も、言葉も分からずに行った運城で、教職の寮のおばちゃんに親切にしてもらいました。情に依拠しての交流を、私は日中友好協会所沢支部の人間として、考えています（拍手）。

≪会場からの発言≫

今の若者についてですが、私もいくつかの大学で学生と接しています。NHKで「春からの絆」という実話を基にしたドラマが昔あり、その初回を毎年300人ほどの学生に見せています。70年も80年も前の戦争のことは今の学生には無理です。しかし残留孤児の人が今も帰国しているという事実は、割と素直に見てくれますし、伝えられます。ですからぜひ、そのような機会を作ってください（拍手）。

≪会場からの発言≫

国交回復の前年に、中国からの招待で4週間訪中しました。北京では人民大会堂で周恩来総理と直接話をする機会もありました。一人一人が入場するときに話ができました。最近では2005年に、中国のハルピンの農場に木を植える活動で行き、毎年交流しています。年配者が多くなりいつまでできるか分かりませんが、もう少し続けたいと考えています（拍手）。

―完―

日中の歴史は何のために学び、何に活かすのか

―西園寺一晃先生の講演を聴いて―

田村　美佳

Ⅰ、最悪な幕開け　今どきの若者が見ていたもの

2017 年 6 月 11 日、方正友好交流の会が主催する西園寺一晃先生の講演を聴きに中央大学駿河台記念館に足を運んだ。会場に入り周りを見渡すと、年配の方々が楽しそうに歓談されている。満蒙に関心を持つ方々の集まりだろう。ある種、会場は同窓会化していて、満蒙とは一切のルーツを介さない自分がこの場に居合わすのはいささか場違いであるような気がした。さらに最悪なのは、時おり飛び交う北京語を聴いては「上手だな」などと彼らのルーツも考えずに自分の北京語が上達しないのを嘆き、不謹慎な発想すら抱いていたことだ。

しかし、西園寺先生が壇上されると会場の雰囲気は一変し、来場者は熱心に先生のお話に耳を傾けておられた。私はリアルタイムで日中の戦争を体験していない、いわゆる「今どきの若者」である。

私は『大地の子』に心を打たれ、『ワイルド・スワン』で中国の歴史や風習に疑問を持ち、『小さな留学生』で中国の若者に親近感を持った、どこにでもいる日本人である。少し違うのは、大学で中国をやろうと決めたのが幸いして、1 年間だけ交換留学の機会に恵まれたことだ。

「中国とはどんな国なのか、どんな人が住んでいるのか、私は中国で受け入れられるのか、中国の友人を作ることはできるのか、よいも悪いも含めて等身大の中国をこの目で見てやろう」。これが私が自分の意思ではじめて中国に興味関心を持ったできごとである。そして、西園寺先生の講演に聴き入りながら、留学先の杭州で遭遇した「歴史認識をめぐる呼び出し事件」の真相を考えていた。

Ⅱ、戦争責任は私の問題か？

2002 年、中国・杭州。2 月末から始めた留学生活に少し慣れてきたころ、寮に一本の電話が入った。電話の相手は留学先の大学の学生である。夜 10 時を回っていたこともあり、少し嫌な予感はしていたが、体のいい断り方も分からず、内容も理解できないまま「好＜分かりました＞」としぶしぶ承諾し、受話器を置いた。

指定場所に赴くと、中国の学生が 3 名待ち構えていた。こちらは日本人留学生が 2 名。対面するやいなや、せきを切ったように個別の事情聴取が行われた。私が回答を求められたのは、「日中の歴史問題についてどう思うか。日本の中国に対する戦争責任についてどう思うか。それはなぜか」という類のものだったと記憶している。

当時の私は北京語がほとんど聞き取れないレベルで、彼らが何を詰問しているのかは正

確には分からなかったが、「日本＜日本＞」「中国＜中国＞」「历史＜歴史＞」「战争＜戦争＞」「负责＜責任＞」などの単語はかろうじて聞き取ることができたので、おそらく日本の中国に対する戦争責任について自分が回答を求められているのだと何となく分かった。

そのとき私は彼らに何と答えたのかははっきりと覚えていないが、同時期に北京で遭遇した「『日本鬼子』罵倒事件」やそのときの記録(注参照)を振り返ると、このように記されている。「……彼らに何かしらのコメントを求められると、何と答えるべきなのか言葉に詰まります。これは、(実際には言語力は大いに関係あるのでしょうが)言語力がどうのこうのという問題ではなく、一人の『日本人』として意見を求められているようで、ただただ『そうですね…』とうなずくだけの私でした。……『自分が出生する前にすでに起こっていたできごとについて、どう解釈したらよいのか対応に苦しむ』というのが正直なところです。……過去から学ぶことは計り知れず、過去の過ちは今を、そして未来を助けますが、いつまでも過ちに執着していても何の解決にもならないのではないでしょうか」[i]。

これは 20 歳の私が当時感じた少しほろ苦い思いだ。当時は若さも手伝って、この聴取事件を意見交換の一つと受け止めきれず、「自分の立ち振る舞いが歴史問題のようなグレー(gray)な質問を自分に向かわせているのではないか」と一人悩んだ。

Ⅲ、私が葛藤の先に見たもの

「歴史を知らないのは罪だ」「真実を知ろうとしないのはより罪深い」と最近は自分を責めることもあるが、これは私が少し年齢を重ねて、「ものごとの良し悪しを判断する前に、事実を正しく知らねばならない」との思いを強くしたからである。

客観的視点で問題に当たり、その上で自分はどう考えるのか、どう行動すべきかを考えることが重要で、日中の問題でいえば、日本の戦争責任についても同じことである。一時のものではなく継続的に見続け、今を生きる自分がこれらの問題にどう向き合うべきなのかを模索し続けることが重要なのではないかと考えるようになった。

私は、「歴史を知らない」といわれる日本の若者としてこれらの問題を観察し、自分なりの回答を出し続けることが使命であるように思う。そして、一個人の意見と感覚が両国の平和と発展にプラスに働くならば、それは本望だ。

私が杭州で受けた事情聴取は、私の心に「歴史の過ち」という闇を落とした。歴史(=日本政府の犯した過ち)が 1980 年代生まれの自分には重くて、なぜ戦後生まれの自分がこのような目に遭わねばならないのかと不運に思うこともあった。

結局その 3 名の中国の学生の真意は聴き出せなかったが、もしかしたら彼らは私を日本人の代表として個別に詰問したかった訳ではなかったのかもしれない。私が歴史の問題を心苦しく思うのは、「自分(=自国)に非がある」との認識を持ち続けているので、罰が悪いように感じるのだろう。

Ⅳ、揺れる思い　尷尬＜気まずさ＞のなかに見た許し

さて、そんな切ない回想時に、西園寺先生の言葉が胸に刺さる。「日本とドイツの違いは何か。当時日本は中国に対して戦争責任を徹底的に反省し、総括してこなかった。このことが日本の犯した最大の問題」だとされた上でこう続けられた。「日本政府が戦争の問題について総括せず、なおざりにしてきたから、今の日本の若者は(本来ならば)負わなくてもよい戦争責任を負わなくてはならないのだ」。

私はこの言葉を聴いて感涙した。感動というよりは、安堵の涙である。西園寺先生のこの言葉は、まさしく今、私が考えていたことへの答えであるかのように思われた。そして私は、「日本政府が犯した罪に、自分がこれ以上十字架を背負わなくてもよい」との許しを受けたような不思議な気持ちでいっぱいになり、声を殺して泣いた。

しかし、だからといって私たち日本の若者が日中の歴史をめぐる一連の問題に目を背けてもよいという訳ではない。私たちは戦争の歴史を実体験で知らない者として、中立な立場で歴史を学ばねばならない。

私たちが歴史を学び直す目的はただ一点である。日中のこれからと平和のためである。絆があれば日中の友好的な関係性(=信頼関係)は築けるはずだ。私が自国の触れたくない歴史を直視しようとするのは、留学で滞在した中国が、私に多くの中国の友人や杭州の父母を与え、私を育て励ましてくれたからである。すべてはこの恩情に尽きる。

何かにつまずき自信を失いかけたとき、「大丈夫。また一からやればよい。自分はできる」と私が思えるのは、あの杭州留学の経験が根底にあるからだ。実際に現地の学生とつき合ってみて不愉快な思いもしたが、友人もできた。10 数年経った今でも私たちの友情は固い。

そして、自分を日中国交正常化に奔走された若き日の周恩来に重ねるのは甚だおこがましいが、19 歳の周少年が日本で寮母さんの温かみに触れ、親日家になられたとのエピソードは私の胸を熱くした。この話を聴けて心底幸せだと感じた。そのころには講演前に感じた居心地の悪さはすでに吹き飛んでおり、私は自分の狭隘な見方を反省した。

V、「歴史を学ぶ」とはどういうことか？

ところで、最近私が皮肉で使っている北京語の一つに「新常态(=新常態 ; new normal)」[ii]という言葉がある。今回の講演でいえば、「今の日本の若者は歴史を知らない」との西園寺先生の指摘がまさにこれに当たる。

しかし、問わねばならないのは、西園寺先生の指摘された「(日本の若者が歴史を知らないのは)学校できちんと歴史を教えない」現実にある。西園寺先生によると、中国の若者も1949～72 年の自国の歴史をまったく知らないという。「1949～72 年は日中の政府間交流は最悪だったが、日中の民間交流が一番よかったとき」だそうだ。この歴史を両国の若者が知らないのは悲しい。

列強の植民地侵略が進むなか、日本はなぜアジアの星として、アジアとの協調路線を守り通せなかったのか。清朝の二の舞になることを恐れたからなのか。日本はいつから舵取りを間違え、犯した過ちを見て見ぬふりをするようになったのか。私にはその理由が分か

らない。

西園寺先生は日本の最大の誤りを次のように語られた。「列強がアジアを植民しようとしたとき、日本がアジアとの協調ではなく富国強兵の道を選択したことが、日本とアジアの関係性をダメにした元凶である。さらに日本が軍国主義に走り、戦争に乗り出した結果、アメリカと中国に敗れたが、日本の最大の誤りは、対米敗戦だけを注視して、対中敗戦を軽視していることである。抗日戦争の歴史も含めて、対中敗戦をきちんと見ない限り、日中の関係性は改善し得ない」。このような内容のお話だったと思う。

Ⅵ、日本がアジア外交で失敗し続けているのはなぜか？

私はその指摘に静かにうなずいた。西園寺先生の指摘にあるように、注目すべきは、日中国交正常化に尽力されてきたのは、日本政府ではなく、赤十字や日中友好協会などの日本の民間団体だということだ。中国で戦争孤児となった方の肉親捜しや彼らの日本への帰国が実現したのは、日本の民間団体が中国政府に働きかけ、中国政府の支援を得ることができたからである。日本政府はまだ戦争孤児をなき者とするのか。日本に連行し、強制労働を強いた中国や韓国の人々もなき者とするのか。そのようなことは決して許されない。アジア外交で日本が失敗し続けているのは、過去を捻じ曲げて自国の都合のよいように筋書を書き直しているからである。だから歴史認識の問題や従軍慰安婦の問題は、日本が中国や韓国に賠償金を払っていても、戦後 70 数年経った現在でも未だ根本解決には至っていないのだ。人の心はお金では買えない。上辺だけの対応に反省や善処は見られない。これが人の本質だろう。憎しみは世代を超えて負の連鎖を呼ぶ。だからこそ、友情や友好という考えが必要なのだ。「悪いことをしたら、素直にそれを認めて謝る。時間がかかろうとも自分の過ちを見つめ、相手に謝罪をする」。これは幼いころに私が母から教わった、人として生きる上での基本である。複雑なものを単純に、悪いことには謝罪を、嬉しいことには感謝の気持ちを。日本の戦争責任についても、その果てに中国や韓国の許しや両国との信頼回復が待っていると信じたい。

その意味でも今回の方正友好交流の会が企画された西園寺先生の講演は非常に意味があり、私は学ぶべきところが多かった。そして、歴史を一方面だけで見てはならないことに改めて気がついた。歴史への直視と過去の清算が日本政府に今、一番求められていることではないだろうか。

Ⅶ、「歴史を記録する」とはどういうことか？

講演の最後に西園寺先生が総括されたポイントを振り返りたい。「『歴史を記録する』とは単に日中戦争の歴史を記すことではない。重要なのは、アジアにおける日中間の関係性を時の世界状況を踏まえながら記録し、そこから我われがいろいろな気づきを発見することである」。このような趣旨のコメントをされたように思う。そしてこのまとめは、冒頭で西園寺先生が語られた「歴史を学ぶ目的と必要性は、現在と将来に活かすためである」と

の指摘に結びつくのだ。

私は西園寺先生のこの指摘にまったく同感する。私は戦争を体験として知らない“80 后＜1980 年世代＞”である。日中間の戦争について目を背けたいときもある。しかし当事者でないからといって、日中の戦争の歴史を知らないことにはできない。私たち若者世代が戦争の歴史を知らないことは、日中の平和やアジアの平和と発展を考える上で、大きな阻害要因となるからだ。そして歴史を軽視することは、結果的に若者の心に影を落とすことになる。私は日中とアジアの平和を望む上で、これが一番のボトルネック(障壁)になると考える。

Ⅷ、民間交流から見えてきたもの

では日中間の文化面や経済面での交流はどうか。政治は冷え切っていても民間交流は昔も今もずっと続いているのではないか。漫画やアニメ、コスプレなどのサブカルチャーは日本のものが中国で流行り、中国の若者を魅了してきたのも事実だ。私が杭州に留学したころは、『一休さん＜聡明的一休＞』と『ドラえもん＜多啦 A 梦＞』を知らない中国の友人はいなかった。最近は中国の若者の間では『ワンピース＜航海王＞』や『スラムダンク＜灌篮高手＞』の人気が高いようだ。時代は変わっても、そのときどきの中国の若者が日本の文化を受け入れ、それをよいと支持してくれる。私はこの感覚と日中友好の芽を摘んではならないと強く感じる。

経済面では、日系のスーパーマーケットや百貨店が中国に進出して久しい。日中の政治がぎくしゃくすれば、中国では日本資本の店舗が襲われ、日本製製品の不買運動が起こるとの報道も記憶に新しい。しかし近年、日本は訪日中国人観光客でにぎわい、電化製品や薬、粉ミルク、紙おむつなどの日本製製品への人気はうなぎのぼりだ。そこに日中の政治の問題は表立って見えない。今や、中国の若者も日本の若者と同じようにスマートフォンを片手にネット通販を楽しみ、多少値は高くついても目当ての商品が日本から送られてくることにプレミア感を感じるという。よい悪いではない。これが今の若者の実態である。アメリカ発のスターバックスコーヒーやタリーズコーヒーに憧れた中国の若者が、“MADE IN JAPAN(日本製)”の製品やサービスを求めているのである。インバウンド現象の背景の一つには、モノからコトへの人々の関心の移行があるといわれているが、一度日本を訪れた中国の方がリピーターとなって“通”な旅を楽しんだり、彼らの口を通じて、日本のよさが中国の方に広められていくのは嬉しい一面だ。

私の杭州時代の中国の友人は、京都大阪を一緒にめぐった際、日本製の化粧品や薬類を爆買いしながらこう話してくれた。「日本製製品の質のよさは信頼できる。日本の化粧品や薬類も安全性に優れている。日本の着物や浴衣も素晴らしい。日本の祭は最高の文化だ」。

「戦争」という苦い過去を持つ一方で、ここに私たちは脈々と受け継がれる民間交流の姿を垣間見ることができる。頭で考えるのではなく、心で感じる。その意味で、体験や経験に勝るものはないといえよう。コト消費が空前の日本ブームを生んでいるのは、このようなところに理由があるのかもしれない。

Ⅸ、若者に希望を見た日　あの日の自分を重ねて

人の交流はどうか。一昨年、私はある訪中団に参加したが、そこで出逢った日本の若者のなかにはその後、大学の制度などを利用して中国の大学に留学された方も数名いる。最近、北京に留学中の女性が私に帰国の連絡をくれたのだが、その方の留学は 1 年(実際には 10 ヵ月程度)と短い期間だったが、「北京での留学生活が楽しすぎて、日本に帰りたくない」と何度も繰り返されていたことが印象深い。10 も歳の違う後輩が実際に中国に渡り、現地の生活を体験して、中国の友人を作り、ともに旅に出かけ、中国の友人はよい友だと肌で感じる。そして、帰国間際には中国の友人に向けて感謝の言葉をつづる。実に微笑ましい光景である。

私のときもそうだった。杭州到着後まもなくは生活環境や習慣の違いに戸惑い、日本の生活に慣れきっていた私は中国の生活に不便さを感じた。言葉の問題もあった。しかし、人の温もりに触れた。「友だちだから」と言って、何食わぬ顔で他人の PC を立ち上げ、パスワードを入力する中国の友人たち。彼らは起動させた“他人の”PC でよく動画や VCD(Video-CD)を見せてくれたが、私はセキュリティやプライバシーの問題はどう管理されているのかと最初は驚きを隠せなかった。しかし、この光景に数回遭遇するうちに、中国の友人たちの距離感を次第に心地よく感じるようになっていった。生活や勉強で困った際に、中国の友人に「帮一下忙可以吗？＜ちょっと手伝ってくれる？＞」と尋ねると大概の答えはこうだった。「当然可以。怎么不可以啊！我们都是朋友不是吗？＜もちろん OK だよ。どうしてダメなんて言えるのさ。友だちでしょ？＞」。嬉しかった。中国の若者の優しさは、一瞬で私を無類の中国好きにした。

Ⅹ、結びに代えて　今、私が思うこと

眉間にしわを寄せてことを難しく考えるのはやめよう。それよりも、若者である自分たちだからこそできることを考え、行動してみることのほうがよほど建設的で意味がある。日中の交流は、今も若者世代の間で確実に行われている。若者の無知さを嘆く前に、最低限の教育の機会を保証し、大人たちがやらねばならないことをしっかりと全うしてほしい。日中の歴史問題もそうだが、日本が置き去りにしてきた戦争責任の問題をうやむやにせず、未来を切り拓くために、私たち若者のために尽力してほしいと強く望む。おりしも今年は日中国交正常化 45 周年の記念すべき年だ。ここから再出発を。今こそ、私たちは思いを新たに日中共栄のための舵取りが必要なのではないだろうか。

そして、アジアでともに生きる民族として日中が手を携え、協力していくべきではなかろうか。中国に興味関心を持つ日本の若者と日本に興味関心を持つ中国の若者を育てることの重要性を喫緊の課題として私は説きたい。未来は過去を直視してこそ、反省と教訓の上に成り立っていることを忘れてはならない。

私は今回の講演を通じて、自分と中国との関わりを整理し直すことができた点で非常によかったと思う。また、西園寺先生の講演を聴いて、10 数年間胸につかえていた「(日本人

としての)罪悪感」が影を潜めたことは何よりの収穫だった。そして、私は杭州留学を機に中国の友人に助けられ、それが未だに強い絆となっていることや、そのことへの感謝を改めて感じられたこともプラスの効果である。暗澹たる時代だが、確かに感じる自分への使命と湧き出る勇気。今回の講演で私は、「日本の若者よ、頑張れ！」と励ましを受け、喝を入れて頂いた心持ちがする。

結びに代えて、このような前向きな気持ちにさせてくれた西園寺先生や来場された皆様に深く感謝し、この交流会を企画運営してくださった方正友好交流の会の皆様に感謝申し上げたい。ありがとうございました。またの再会を期待して筆をおくことにする。

以上

(たむら・みか。1982 年、福井県生まれ。20 歳のとき、1 年間の杭州留学を経験。以来、壁にぶち当たったときは、留学経験を思い出し奮起する。私の“加油＜頑張る源泉＞”は杭州の友にあり)

---

[i] 高岸美佳「私の留学体験記～浙江財経学院に派遣されて」『FPU NEWS』2002 年 Autumn 号、5 頁より抜粋。「FPU NEWS」とは福井県立大学の学内広報誌のこと。

[ii] 「新常態」とは中国経済が高度成長期を終えて中高度成長期という新たな段階に入っていることを示す経済用語。「ニューノーマル」とも訳される。

日中関係の近現代史を知っておこう

―西園寺一晃講演に触発されて―

永野 俊

いま日本と中国では共に相手国に対する反感は強く、その割合は両国とも 70～90%に達するといわれる。日本の中国への反感は若年層、中年層が両国関係の近現代史を十分に理解していないことが大きな要因であるといわれる。年配の方々はこの歴史をよくご存知と思うが若い世代の方々はご存知でない方も多いと思うので概略を説明しておこう。

１９世紀頃から西洋の列強はアジア地域を侵略し始め、中国ではアヘン戦争による清国侵略などが起こった。日本にも黒船が来航し開国を迫った。このような状況で日本は西欧文明を取り入れて経済、軍事両面で力をつけてゆくことが重要と考えこれを推進した。その力の使い方には 2 つの選択肢があった。一つはアジア諸国と連携し西欧の圧力に抗して自立・共生を目指す道、もう一つは、西欧列強と競合してアジアの国々の支配を目指す道である。日本は後者を選び、その結果日清戦争を経て朝鮮半島や満州への侵攻が始まる。一方で中国は日本と対峙しながら国民党と共産党の主導権争いが同時に進行していたが、日本の圧力が高まる中で国民党と共産党は内戦状態を解消し、協力して日本に対抗する。

先の大戦は日本がアメリカと戦って負けた戦争であると考える方も多いと思うが、それは一側面であり、中国との戦いに日本が敗れたことがもう一つの大きな部分である。大戦終了後中国では再び国民党と共産党との内戦が起こり、共産党が勝利して中国本土を支配し、国民党は台湾に追いやられ、アメリカの支援を得てかろうじて生き残った。大戦後の日本と中国の国交の正常化については国民党政府と共産党政府のどちらを中国の正統な政府とみるかが大きな問題であった。共産主義に反対するアメリカに負けた日本としては国民党政府を正当な政府として扱わざるを得なかった。しかし 1956 年に総理大臣になった石橋湛山は戦前から日本の帝国主義化に反対し、アジア諸国と共存する小日本主義を提唱していたリベラルな考え方の持ち主であり、巨大な本土を支配する共産党政府と国交を回復するべきであると考えていた。だが、彼は病のため総理の座をわずか 65 日で降り、アメリカ追従の岸信介が首相となったので国交は回復しなかった。それでも中国側は周恩来首相が国内の反日感情を和らげて国交への道を開こうと努力していた。彼は中国侵略は日本の軍部の独走であり、一般国民には侵略の意図はなくむしろ軍部に抑圧された被害者である、と言う考えを広め反日感情を和らげる努力をしていたという。日本政府は 1972 年にようやく田中角栄により国交回復の道を開いた。この時に日本は大戦の総括をして中国に謝罪し、戦争犠牲者を弔うべきであった。また朝鮮や東南アジア諸国にも足を運んで戦争犠牲者の霊前に跪くべきであった。大戦の総括をあいまいにしたことが今日の両国関係を未だに歪ませているのである。そのことが周恩来亡きあと江沢民の反日教育などによる反日感情の高まりにつながったともいえる。このような経緯を総合的にみれば日本は侵略の非を国としてきちんと認めて言葉だけの謝罪ではなく首相の慰霊行脚などの具体的な対応することが必要であったと思われる。戦後 70 年以上たった今でも侵略戦争ではないとの見解を持つ政府関係者が多いが、これでは真の友好関係は築けないであろう。

（ながの・たかし：1939 年生まれ。工学博士。通産省電子技術研究所、法政大学工学部教授、玉川大学特別研究員を経て、現在フリーライター）

「泰阜村」と「方正県」友好提携から２０周年

～長野県「泰阜村」と黒竜江省ハルビン市「方正県」友好提携２０年の歩み～

飯田日中友好協会理事長　小林 勝人

１．友好提携の経過

方正県といえば「方正日本人公墓」のある日本人として忘れる事の出来ない、いや忘れてはならない加害と、被害の重い歴史を認識する大事な場所である。一方、泰阜村といえば、ＮＨＫの「忘れられた女たち」の放送を思い出す人が多いと思われるが、長野県の山村で、かつて多くの満蒙開拓団を送り出した村として思い出される山村である。

この二つの地区を結びつけたのが、戦前中国東北部に分村移民として多くの開拓団員を送り出した「満洲泰阜分村開拓団」であった。この満洲泰阜分村開拓団の入植地は、現在の黒竜江省佳木斯市華南県大八浪郷である。ここに昭和１４年２月１１日入植式を行い、１５年から家族招致を行った。最終的には1,１４４名（泰阜村以外の村を含む）が入植し、敗戦時を含め死亡者６２７人、不明４４人を出した。（『長野県満州開拓史』より）

特に、昭和２０年８月９日のソ連侵攻により、閻家駅に終結するも列車に乗れず、徒歩による「いわゆる」死の逃避行を行い、２０日余りかかって方正県に辿り着いた。しかしこの逃避行において多くの命を失いやっと辿り着いた収容所で、寒さと飢えで、又多くの命を失った。その結果、多くの残留孤児、残留婦人が発生し、方正県の方々に引き取られ、養父母に育てられたという。分村開拓団を送り出した「満洲泰阜分村開拓団」は敗戦時、過酷な逃避行を強いられたなか、逃げ延びた先の方正県で飢えや寒さから助けられた歴史的背景があった。

特に国交回復の遅れた事情のなかで、祖国から見放された残留婦人、残留孤児を実の子と同じように、いやそれ以上に育ててくれた養父母の温かい「慈愛」に、感謝の気持ちが強く残っている。このため、助けてくれた方正地区の人々を友だちとして、更に自分達の第二の祖国、故郷としてお互いが尊重し、大切にしていくことが、あの時受けた恩を活かしてゆけるのではないかと考えたのである。こうした中、多くの村民の賛同を得て２０年前の、１９９７年９月２７日に方正県と友好交流の覚書が締結された。（左の写真は方正県で行われた調印式の様子）

この時の訪中団一行は、松島貞治村長を団長として、林昌樹議長を副団長に議会から４名、大八浪会３名、泰阜南小学校清水重美校長、同校生徒牧野なおみさん、県日中桜井敬司交流部長、秘書長に村づくり主任の１２名が、９月２６日～３０日の日程で訪中し、9月２７日方正県の方正賓館において調印式が行われた。（別紙１：泰阜村と方正県との友好交流に関する覚書のとおり）

２．友好提携２０年の歩み

泰阜村と方正県との友好交流は、「友好交流の覚書」を締結する以前から、中国帰国者との交流会や、中国残留日本人等の情報交換などで方正県人民政府から来村訪問が行われていた。こうした実績を踏まえて１９９７年の締結へと繋がったのであった。

これら、友好提携２０年の歩みの主なものを挙げれば次のとおりである。

（提携以前）

1988.09 泰阜村→方正県	第１次訪中団（団長宮下明男村長ほか訪中）／ 帰国希望者の調査と手続説明会等。
1994.03 方正県→泰阜村	方正県王県長はじめ政府関係者５名泰阜村来村 帰国者交流会、帰国者体験発表会等。
1994.10 方正県→泰阜村	ハルビン市長、方正県長ら５名泰阜村来村 帰国者交流会参加等
1995.01 方正県→泰阜村	ハルビン市長、方正県長ら4名泰阜村来村 帰国者交流会参加等
1996.10 方正県→泰阜村	方正県除県長及び政府関係者４名泰阜村来村 友好提携検討協議

（提携以降）

1997.09泰阜村→方正県	**松島村長ほか１２名訪中／27日に友好提携締結調印式。**
1998.09 泰阜村→方正県	泰阜村大八浪会池田純団長以下33名／訪中 方正県政府訪問、中国洪水被害見舞金贈呈。
1999.01 方正県→泰阜村	方正県 王県長及び人民政府関係者５名泰阜村来村／村民と 友好交流 保育園小中学校訪問 村内企業視察 南信州観光。
2000.09 泰阜村→方正県	泰阜村大八浪会池田純団長以下41名訪中／方正県政府訪問、 日本人公墓墓参、大八浪開拓団跡地訪問。
2010.08泰阜村→方正県	泰阜村訪中団木下長門団長以下20名／一般、帰国者、中学生、 方正県政府訪問、日本人公墓墓参、第三中生徒と交流等訪中。
1999.07 泰阜村→方正県	第1回泰阜村中学生研修旅行23名／方正県第三中学校生徒、 人民政府表敬訪問、日本人公墓墓参 以下延べ86名が訪問。
2000.07 泰阜村→方正県	第2回泰阜村中学生研修旅行19名／
2001.07 泰阜村→方正県	第3回泰阜村中学生研修旅行18名／
2002.07泰阜村→方正県	第4回泰阜村中学生研修旅行15名／
2004.07 泰阜村→方正県	第5回泰阜村中学生研修旅行11名／
2001.10 方正県→泰阜村	第1回方正県第三中学生徒4名訪問交流／以下延べ13名訪問。
2002.10 方正県→泰阜村	第2回方正県第三中学校生徒2名訪問交流／
2004.10 方正県→泰阜村	第3回方正県第三中学校生徒3名訪問交流／
2010.10 方正県→泰阜村	第4回方正県第三中学校生徒4名訪問交流／
2005.12泰阜村→方正県	泰阜村教育委会＋グリーウッド3名方正県訪問／
2008.03 方正県→泰阜村	方正県王宣伝部長と方正テレビ局番組制作訪問／
2015.07 方正県→泰阜村	方正県劉農業局長他関係者4名及び農業研修生3名来村／ 泰阜村農業視察と交流。

※1）泰阜村中学校生徒が方正県第三中学校生徒と延べ５回／86 名が訪中して交流。

2）方正県第三中学校生徒が泰阜村中学校生徒と延べ４回／13 名が来日して交流。

３．２０周年記念式典と祝賀のつどい

泰阜村と方正県との友好交流２０周年を祝う式典ならびに祝賀のつどいは、２０１７年１１月１６日、泰阜村の「あさぎり館」で松島貞治村長をはじめ、多数のご来賓、関係者の出席を得て盛大に開催された。式典は、「泰阜太鼓」の打ち鳴らす友好提携２０周年の式典に相応しい響きのなかで開幕し、続いて「２０年の歩みスライド」が上映され、帰国者をはじめ、参加者全員がこの２０年を振り返った。

これに続き、主催者の松島貞治村長から、帰国した開拓団員から「方正で助けられた」という話をたびたび聞いて参りました。これが友好提携の原点です。と２０年前を振り返り、隣国と戦うような愚かなことをしない決意を改めて確認。今後の友好交流の進め方について、地域同志が仲良く出来る方策を考えてきたが、なかなか上手くいかない。じゃあ何が出来るのか、皆さんから具体的に「泰阜と方正との友好交流」の提案を頂き、新たな気持ちで人と人との草の根の交流を地道に進めて行きたい、と提案を含めた挨拶があった。これに続いて出席のご来賓の挨拶があり、その中で、宮下一郎代議士からはメッセージを尾関秘書から伝えられ、高橋岑俊地元県議から、無欲の心の交流を。また、大月良則長野県国際担当部長から、長野県は中国と１０か所に亘る都市や地域と活発な友好交流活動をしている。と現状報告。過去の満蒙開拓の歴史に向き合う平和記念館の語り継ぎ活動を通して、今後の友好交流をしっかり進めてください。と挨拶。方正友好交流の会の大類善啓事務局長から、方正の「日本人公墓」に触れ、侵略加害の側である日本人の墓を建ててくれたことに驚いた。と前置きして、周恩来の国際主義的精神に敬意を表したい。その後、羽田澄子監督制作の映画「嗚呼満蒙開拓団」にも触れ、昨年の天皇、皇后両陛下の満蒙開拓平和記念館訪問実現など、今日の方正県との友好交流に繋がっている。と激励の挨拶をいただいた。また、長野県日中友好協会の布施正幸事務局長から、泰阜村が進めて来た方正県との友好交流こそ、一番深い因縁のある大事な交流である。と話され、国レベルの友好交流は難しい面もあるが、人と人の交流では中国から年間６４０万人が、個人の意志で来日している。この人たちは日本は良いところだ。と感激して帰っている。このことからも、自信を持って「人と人の交流」を進めてください。と挨拶があった。又、方正県長からのメッセージを披露（別紙１）。続いて「方正県への想い（別紙３新聞記事）」を中国から帰国された「池田純」さん、残留婦人の２世で長く中国で生活して帰国された「川島波子」さん、また第１回（1999 年 7 月）の方正県第三中学校との交流事業に参加した「吉岡利貴」さんから、一般人同士の草の根交流を若い感覚で促進したいと。話されるなど、三人のそれぞれの立場、体験からの話に感銘を受けたとの声を多く聞かれた。このあと、賑やかな出し物もあって、有意義な中に会は終了した。

以上

（こばやし・かつと：1940 年生まれ。長野県飯田日中友好協会理事長。）

（別紙１）方正県からのメッセージ

泰阜村長
松島　貞治　殿

方正縣と泰阜村の間に友好都市締結20周年の際に、私は方正縣の人民政府と縣民の代表をさせて頂き、村長様と泰阜村の皆様に最大なあいさつを申します。

方正縣と泰阜村は相互の友好と協力を願うことを宣言し、友好都市の契りを結んでから、はや満20年を迎えることとなりました。この20年間に、お互いの友好関係が深まり、着実に実を結んでまいりました。「人と人の友情を高める、世界の平和を守る、お互いの発展を促す」を基盤として、お互いの発展と繁栄、より一層、友好関係が深まっていくことを念願してやみません。
終わりに臨み、泰阜村の繁栄と村民の皆様の幸福をお祈り、またお互いの永遠の友情と平和に貢献することをご祈念いたしまして、あいさつとします。

方正県長　張　建华
2017年9月30日

（別紙２）泰阜村と方正県友好交流に関する覚書

日本国長野県泰阜村と中華人民共和国哈爾濱市方正県との友好交流に関する覚書

中国哈爾濱市方正県人民政府の招請により、松島貞治村長を団長とする日本国長野県泰阜村代表団は1997年９月27日から28日まで方正県を訪問した。滞在期間中、代表団は方正県人民政府を表敬し、双方代表及び関係者は率直で友好的な雰囲気の中で有意義な会談を行った。双方は友好往来を強化し、それぞれの分野の交流と協力を発展、促進させるなどのことに関し、十分な検討を行い、次の通り合意した。

一、　両村県は、相互理解と平等互恵の上で、経済、文化、農業、科学技術、教育、体育などの分野で交流と協力を積極的に推進し、双方の繁栄を促進し、子々孫々の友好関係を発展させることに共同努力すること。
二、　双方間の友情と友好関係のさらなる発展を促進させるため、双方は、公式代表団を相互派遣させ、また、対等交流の形式で５人、10日間を原則として、国際交通費は自費負担とし、入国後の費用は相手負担とする。代表団の訪問期間、訪問コース、考察訪問の内容等の具体的なことについて、事情により双方の協議の上定めること。
三、　両村県の民間交流は原則として自費負担とすること。
四、　両村県は、この覚書に定める交流事項の実現に鋭意努力すること。
五、　以上の各事項を実施していくため、泰阜村村づくり研究室と方正県外事弁公室を双方の連絡窓口とすること。
六、　以上の各事項については、今後双方は、具体的に実施させる前に一層協議し、またこの覚書にない事項については、両村県は、事情により協議を行うこととする。

本覚書は中国哈爾濱市方正県にて調印し、日中両国語で一式二部ずつ作成し、同等の効力を生ずる。

一九九七年九月二十七日

日本国
長野県泰阜村
村長
松島貞治

中華人民共和国
哈爾濱市方正県
県長
別井尚

（別紙３）2017.11.18 付南信州新聞（転載）

養父母、交流に感謝

泰阜村と中国方正県　友好20周年で帰国者語る

泰阜村と中国黒龍江省ハルビン市方正県が友好提携を結んで20周年を迎え、16日に同村田本のあさぎり館で開かれた記念式典で、残留孤児だった村民や20年間方正県で暮らした2世らが体験を語る機会が設けられた。

「満州泰阜分村」の歴史がある同村は、1939年から1100人以上の村民が中国三江省の大八浪（パラン）へ開拓に赴き、敗戦後は苛酷な逃避行を強いられた。一方、逃げ延びた先の方正県で飢えや寒さから助けられた歴史的背景があり、同村は97年、その恩恵に感謝して友好提携を締結している。

式典の席上、「帰国者の話」として3人が体験や思いを語った。

40（昭和15）年に開拓団に参加し、53年に帰国した同村左京の池田純さん（86）は、仕事を懸命に行う中で、わが子のように育ててくれた体力の限界から母親と一緒に養父の世話になった経験を振り返り「助けてもらえなかったら、いまの私はない」と強調。生きていくために畑養父に感謝した。

母親が残留孤児として養父母の元で育てられ、自身は20歳まで方正県で暮らし、91年に帰国、現在は泰阜村温田に暮らす川島波子さん（46）は「養父の写真は今でも肌身離さず持っている。日本に来ることに多少の不安はあったが、方正県と風景が似ていてすぐに慣れることができた」と中国語で語った。

9歳の娘が中国や方正県に興味を示していることから「将来は泰阜村と方正県の架け橋になってくれたらうれしい」と願った。

中学2年生のときに交流研修旅行で方正県に訪れた、村役場職員の吉岡利貴さん（31）は「互いの言葉が通じない中、ジェスチャーで意思疎通を図った。思いを伝えることはできる」とし、「一般人同士の草の根交流を若い感覚で促進していきたい」と述べた。

方正県での体験や思いを語る帰国者ら

2017年8月14日付　日本経済新聞

大日向開拓地 両陛下が訪問

旧満州引き揚げ者入植 長野県軽井沢町で静養

開拓地の野菜畑を散策する天皇、皇后両陛下（23日、長野県軽井沢町）＝代表撮影

中の天皇、皇后両陛下は23日、同町の大日向開拓地を訪問された。同開拓地は旧満州（中国東北部）に渡った人たちが戦後に入植した地区。両陛下は昭和天皇が1947年の戦後全国巡幸で同地区を訪れたことを詠んだ歌碑に立ち寄った後、レタス畑を散策された。

両陛下は皇太子夫妻時代から軽井沢町で静養中に何度も同地区を訪れ、引き揚げ者や家族らと交流を深めてきた。

満州には国策として約27万人の日本人が「満蒙開拓団」として移住。1945年8月9日のソ連侵攻による混乱の中、約8万人が命を落とした。

現在の佐久穂町にあった大日向村は37年に全国初の分村移民を計画、約690人が満州へ渡った。しかし、敗戦後に故国に戻ることができたのは約310人にすぎなかった。

満州と元の大日向村の両方で土地を失った人たちは、47年から軽井沢町の土地を開墾、新たな「大日向」を作った。

2017年11月17日付　信濃毎日新聞

満蒙開拓の縁 中国・方正県と友好20周年

泰阜で式典 草の根交流今後も

泰阜村と方正県の友好提携20周年を記念して開いた祝賀式典＝16日

下伊那郡泰阜村は16日、旧満州（中国東北部）に分村移民で開拓団員を送り出した経緯がある中国黒竜江省方正県との友好提携20周年を祝う式典を村内で開いた。帰国者を含む関係者約80人が出席。松島貞治村長はあいさつで「平和の尊さは草の根の交流から学んでいく必要がある」と述べ、民間交流の重要性を訴えた。

式典では、元開拓団員や残留孤児2世ら3人が登壇し、体験を語った。母親が残留孤児だった川島波子さん（46）＝泰阜村温田＝は両親と共に20歳で村に移住した。「母を育てた方正県の養父母は、私にとって優しい祖父母だった」と中国語で話した。次女（9）が中国語に関心を持っているといい、「将来、方正県との懸け橋になってくれたらうれしい」と期待した。

式典には、村が方正県や在日中国大使館を招待したが、中国側関係者は欠席。村は7月ごろから方正県の担当者と日程調整などを進めていたが、同県側から「黒竜江省からの渡航許可が取れない」と連絡があったという。市民団体「方正友好交流の会」（事務局・東京）の大類善啓事務局長（72）は「10月に（5年に1度の）中国共産党大会があり、その前後は行政職員の海外出張に制約があると聞く」としている。

吉林省水曲柳・大日向両村旧開拓地を訪問して

満蒙開拓平和記念館　寺沢秀文

去る５月２７日より３１日の５日間、旧満州の吉林省「水曲柳」並びに「大日向村」の旧開拓地等を「水曲柳等友好訪中団」（団長は澤柳忠司水曲柳会会長。団員２７名）が訪問した。今回訪ねた「水曲柳開拓団」は私事ながら当方の両親がかつて住んだ開拓の村でもあり、当方自身も今回で７回目の訪問となった。この水曲柳開拓団からの引揚者やその関係者等で組織する戦後親睦組織「水曲柳会」では日中国交回復後、今回で１１回目となる現地訪問団を送っている。今回の訪中は、これまでの水曲柳会会員のみを中心とした水曲柳訪問とは異なり、現地で隣村の開拓団であった「大日向村開拓団」の元開拓団員の皆さん等３人や一般市民の皆さん等をも含めての、久々の２７名という大所帯での訪中となった。当方が初めて水曲柳の地を訪れたのは１９９６年（平成８年）のことであり、前回の２０１０年訪問からは７年ぶりの訪問となったが、２０年前、そして前回と比べても水曲柳等の農村もかなり変化してきていることを実感したところである。

今回の訪中団の特色は、前記通り、かつて旧満州で隣村同士であった２つの開拓団、「自由移民開拓団」としては全国の中でも最大規模であった「水曲柳開拓団」と、全国で初の旧満州への「分村開拓団」となった「大日向村開拓団」との２つの開拓団の元団員等が初めて一緒の団を組み訪中したことである。今回の訪中団は主催が水曲柳会であるも、大日向村開拓団の戦後組織である「大日向進興会」（坂本幸平会長）、飯田日中友好協会（清水可晴会長）、そして我が満蒙開拓平和記念館とが共催した連合訪中団でもあった。また、今回の訪中の特筆すべきこととして、毎回そうであるも、水曲柳への訪中団の特色は現地政府や地元の皆さん等の温かい迎え入れにより、かつて開拓団が暮らした集落の奥深くまで入らせて頂けるということである。これも戦後の１０回以上に渡る現地訪問と、その都度、当時お世話になったお礼等も込めて、現地の恵まれない子供達の学費援助等を継続してきた水曲柳会の諸先輩方の積み重ねによってこそである。

今回の訪中成果は沢山あり、特に驚いたのは、旧大日向村開拓団の跡地を訪ねたところ、思いがけずに当時の大日向村開拓団の日本人小学校の校舎建物がほぼそのまま残っていたことである。これには今回参加の元大日向村開拓団の関係者の皆さんも大変感激していた。また、旅の後半は水曲柳に残って集落巡りをする班と、長春（かつての新京）に向かい、終戦後の越冬時、避難民収容所があり多くの犠牲者等も葬られた「緑園」跡地などの足跡を辿る班とに分かれて行動し、それぞれに意義深い旅となったところであった。

今回の訪中の詳細については、帰国後に飯田・下伊那地方の地元紙の日刊「南信州」紙上にて連載されたところから、これを転載することでご報告と替えさせて頂くことをお許し願いたい。

毎年、何らかの形で旧満州の開拓現地等に訪中団を派遣している我が満蒙開拓平和記念館としても、今後も様々な形で訪中団を派遣し、他では体験出来ない特色有る開拓地訪問の旅を続けていきたいものと考えているところである。

（日刊「南信州」にて平成２９年６月２５日より全８回にて連載）

2017年（平成29年）6月25日　日曜日

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 1

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

1、始めに

去る5月27日より31日の5日間、水曲柳会（後述）を中心とした「水曲柳等友好訪中団」（団長・澤柳忠司水曲柳会会長、団員27名）は水曲柳など旧満州の旧開拓地等を訪中し、多くの成果を上げて帰国した。今回の訪中は、最近では極めて少なくなった旧満州の開拓地を訪ねる旅であると共に、この飯田・下伊那地域を代表する満蒙開拓団の一つである「水曲柳開拓団」と、旧満州への最初の分村開拓団となった「大日向村開拓団」の元開拓団員等が共に旧開拓地等を訪ねたという極めて意義ある訪中でもあった。私事ながら、亡き両親が水曲柳開拓団員であったこと等から、水曲柳開拓団の戦後組織である「水曲柳会」の事務局長を務める当方が今回の訪中団の事務局長も務めさせて頂いたので、この意義ある訪中について改めてその概要を報告させて頂きたいと思う。

2、水曲柳開拓団と水曲柳会

全国で最も多くの満蒙開拓を送出したこの飯田・下伊那地区であるも、その中でこの地域から送出された4つの「松島自由開拓団」の中でも最大規模であった水曲柳開拓団は在籍団員1095名（『長野県満州開拓史・名簿編』より）と大規模な開拓団であり、終戦の年の冬の越冬時等に多くの犠牲者を出したものの、そのうちの約60％に当たる658人が日本に帰国、生還している。帰国後、関係者らは「水曲柳会」を組織して親睦、互助に努めると共に、飯田市下久堅祐野沢に「慰霊碑」を建立し犠牲者の慰霊等も行ってきている。そして、慰霊の思いの強い水曲柳会では、昭和55年の第1回訪問を最初として、以降、定期的に水曲柳現地を訪問する訪中団を派遣し続け、今回の訪問は実に11回目を数える。単独の開拓団の戦後組織で、これだけの回数を、しかも現在まで現地訪問し続けている開拓団組織は県内でも稀有であるし、全国的にも極めて珍しいケースである。特に水曲柳会では当時お世話になったこと等を背景として、水曲柳現地の就学困難児童の就学支援のため定期的に児童支援金を現地訪問の都度寄付してくる等の交流、支援活動を続けてきたことも特異な例であると言えよう。

とは言え、全国各地の開拓団組織と同様、水曲柳会も高齢化等からその組織の維持が困難になりつつある。これは県内は元より全国的に見ても同様であり、ほとんどの開拓団組織が解散、自然消滅等してしまっているのが実際である。全国で最も多くの開拓団を送出したこの飯田・下伊那地方ですら、組織を維持し、定期的に総会を開催したり、慰霊祭等を実施しているのはこの水曲柳会以外には泰阜村分村開拓団の戦後組織「大八浪会」などごく僅かなものとなってしまっている。

3、今回の訪中団派遣までの経緯

この水曲柳会による今回の現地訪問は実に7年ぶりのことである。会員の高齢化、会員数の減少等もあったし、また同会の事務局長として近年の水曲柳訪問の言い出しっぺともなってきた当方自身がこの間、満蒙開拓平和記念館（以下、「満蒙記念館」と略）の建設、開館等に忙殺され、なかなか訪中団派遣を言い出せなかったという事情もあった。しかし、流石に7年も間が空くと、「水曲柳にまた行きたい」という声も会員の中などから高まり、記念館も少し落ち着いたこと等もあって、「では久しぶりに行くか」と年が明けた辺りから計画に入った次第であった。

今回の水曲柳訪中の企画を始めるに当たって、考えていたことが2つあった。一つは水曲柳会会員だけでなく、一般市民の皆さんにも広く参加を呼び掛けようということ。満蒙記念館の開館以降、満蒙開拓に関心を持っていただける市民の皆さんも増えつつある中で、この地域からの開拓団としては代表的な水曲柳開拓団の現地を是非見てもらえたらと思ったことが一つ。そしてもう一つは、以前から現地に行ったら一度はやりたいと思っていたこと、それは水曲柳開拓団の隣村の開拓団でもあった「大日向村開拓団」の旧開拓地等にも足を踏み入れてみたいということであった。今まで水曲柳に行った時もそのすぐ側を通っていながら、日程的余裕も無いこと等もあって、旧大日向地区の中には足を踏み入れたことは無かったからである。早速、満蒙記念館の開館等を契機として親交のあった「大日向村開拓団」の皆さんの戦後組織「大日向進興会」の会長でもある軽井沢大日向の坂本幸平さんに連絡を取ろうとした矢先、今回の訪中計画を知った坂本さんの方から当方の所に電話が入り、「我々も是非一緒に同行させてくれ」とのこと、これは願ってもないことと大日向の皆さんも一緒になっての合同訪中団とするべく計画を進めていった次第であった。（つづく）

旧満鉄拉浜線水曲柳駅前

【満蒙開拓平和記念館副館長】

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 2

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

4、軽井沢「大日向」への事前研修視察

かくして水曲柳と大日向との合同訪中団となったことを受けて、団員募集を進めると共に、この機会に訪中の事前研修を兼ねて、またフィールドワークの一環として、戦後の入植地でもある軽井沢の大日向地区等を日帰り視察しようということとなった。これは今回の訪中団の枠を超えて、満蒙記念館が主催者となり、訪中予定者は元より、記念館のボランティアグループ「ピーススラボ」の木村多喜子代表ら記念館関係者等も多数参加するところとなった。この大日向訪問は4月25日に参加24人で実施され、旧満州への最初の分村開拓団であった大日向開拓団員の引揚者の多くが再入植した軽井沢は浅間山麓の大日向地区（第三の大日向）への訪問と共に、その送出母村であった「第一の大日向」、現在は南佐久郡佐久穂町の一部となっている旧大日向村をも帰路に訪ねるという意義深いものであった。軽井沢の大日向では今回の訪中に参加された坂本幸平・レエ子さん夫妻、そして開拓二世である堀川正登さんらの心のこもった迎え入れをして頂いた。

言うまでもなく、この軽井沢の大日向地区は、昨年11月に満蒙記念館にご来館頂いた天皇・皇后両陛下も軽井沢への静養の度に訪問されている場所であり、その意味でも大日向は満蒙記念館とも縁の深い間柄でもある。

また、坂本さんが会長を務める戦後組織の「大日向興進会」は満蒙記念館が開館した翌年の平成26年2月にバス1台で来館して頂いており、この際に、現地で隣村であった水曲柳開拓団の戦後組織の「水曲柳会」とが記念館内で交流会を持つ等の交流があったところである。このような伏線があっての今回の2つの開拓団の合同訪中団実現へと結びついたところであり、これも満蒙記念館という拠点を作ったことの成果の一つであると言える。かくして、2つの大日向の事前視察等を経て、旧満州現地の「第2の大日向」の訪問等に向けての思いを高めつつ、水曲柳、大日向両開拓団の関係者を含む団員27名は旧満州へと旅立った。

5、ハルピンから舒蘭へ

5月27日、「水曲柳等友好訪中団」一行27名は中部国際空港から発ち、哈爾浜（ハルビン）に降り立った。今回の訪中団は前記通り2つの開拓団関係者と共に一般市民の皆さん、それも県外等からの参加者も含むという特色ある団構成となった。27名の中には水曲柳と大日向等の開拓現地で暮らした元開拓団員9名、その2・3世等関係者7名、満蒙記念館関係者や一般市民の皆さん等11名という多様さで、しかも県外からも4名が参加という広域的なものでもあった。また、年齢構成も平成生まれの27歳から最高齢の87歳までと幅広く、親子、夫婦での参加者もあった。

ハルピンまでは約4時間のフライト。この名古屋からハルピンへの直行便が飛ぶようになったのは最近のことで、それまでは遥々と新潟空港まで行ってハルピンへと飛んだことを思えば、いくらかは楽になったと言える。ハルピン到着後、一行はその日のうちに今回の活動の拠点となる吉林省舒蘭（じょらん）市へと向かった。

都市化の進む吉林省舒蘭市

この時期の旧満州は初夏に当り、道には柳の綿（柳絮）がフワフワと舞い、また広い大地に延々と畝（うね）の続く広大な畑にはトウモロコシの芽が出だしたばかりであり、また吉林省に入ると水田では田植えの真っ最中であった。今回は訪問期間中、快晴続きで、秋とはまた全く違う眺めを車窓から眺めつつ、舒蘭に着いたのは夕方5時頃であった。今回もハルピンから所要約4時間であった。

水曲柳を訪問する度に活動の拠点となる吉林省舒蘭市は現在の人口約67万人の地方市で、かつては舒蘭県と言い、現在は市に昇格している（中国では市の方が県よりも上位）。我々が訪問する水曲柳は「舒蘭市水曲柳鎮」（水曲柳開拓団の北側一部は現在の舒蘭市平安鎮に属する）と同市の一部であり、また旧大日向村開拓団も同市の一部である。この舒蘭（当時は県）には戦前14団もの全国各地からの開拓団が入植、約6200人（『満洲開拓史』より）もの開拓団員が在籍しており、その中でも最大規模であったのが水曲柳開拓団であった。7年ぶりに再訪した舒蘭市は、7年の間に高層建物等も増え都市化が著しく進捗していることにビックリした次第であった。

（つづく）

【満蒙開拓平和記念館副館長】

旧満州に2つの開拓団 現地を訪ねて 3

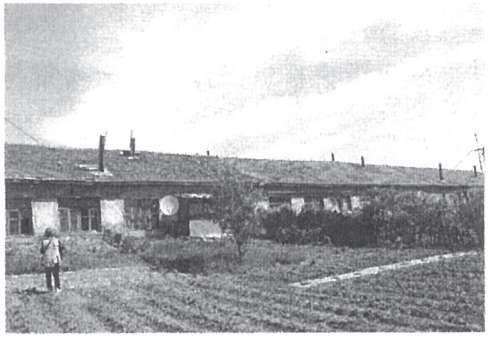
～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

6、今も残る旧「大日向村小学校」の建物に感動

明けて2日目の5月28日、一行はまず「大日向村開拓団」のあった付近へ。この日は前日にも我々の出迎えに出てくれていた舒蘭市人民政府の外事弁公室（国際部）の張課長（女性）ら市政府関係者らと、旧知の現地知人の王景和氏が我々を先導してくれての現地入りであった。水曲柳鎮人民政府の元職員でもある王氏はかつて北海道に農業研修生として半年間暮らした方であり、我々が水曲柳訪問の度に事前準備等から現地案内までいつもお世話になっている方である。こういった地元政府や現地関係者等の協力、ご案内等が無ければ、かつての開拓地の集落巡りなどとても出来はしない。これも水曲柳会が過去の10次にも渡る現地訪問、交流を積み重ねてきた成果でもある。

かつて大日向村開拓団のあった辺りを目指してホテルを出発して20分もしないうちにバスが停まった。現地の案内者は「この辺りがそうだ」という。思った以上に舒蘭の市街地に近く、市街地化してしまっている余りの変わり様に大日向村開拓団員であった坂本さんも「え？ ここが？」と困惑の色を隠せない。王さんらが近くの住民に尋ねてくれると、昔の日本人の学校の建物が少し離れた場所に残っているとのこと。その場所に再び向かう。着いた村の今の名前は「永昌村」。舒蘭市外事弁公室の方が携帯電話で連絡するとこの村の村長さんに相当する方（多分は村共産党委員会の書記か）が直ぐにバイクで駆け付けてくれた。そして案内してくれた古い建物、それこそかつての大日向村小学校の建物そのものであった。大日向村開拓団員の血を引く堀川正登さんが当時の古写真に残る小学校の写真を見て「間違いない」と言う。坂本さん、堀川さんらもかつての大日向村小学校の建物が今も残っていたということに驚き、感動されていた。団員全員でこの場で黙祷を捧げる。この建物のあった辺りがかつての大日向村開拓団の中心部付近に位置する付近であり、近くには大日向神社があり「神社山」と呼んでいた小高い丘も確認することが出来た。感動と興奮の中、幸先の良い現地訪問のスタートとなった。



現地に残されていた旧大日向小学校の建物

7、いよいよ水曲柳へ

続いていよいよ水曲柳へ。水曲柳へと至る道に沿って高速道路が建設中であった。来年10月には開通し、ハルビンからの時間はかなり短縮される見込みと言う。旧満鉄拉浜線の踏切を越えていよいよ水曲柳の中心部へと入り、最初にかつて日本人犠牲者を埋葬した合同墓地のあった跡地へと向かう。集落を抜け、丘の上に登り、バスを降りる。少し歩くと、もう何回も来ているこの墓地跡地であるも、どうも周りの景色が違う。丘の上の林の中にあった墓地跡地であるのに、一面のトウモロコシ畑に変わっている。しかし、やはり同じ場所であった。数年前にこの辺りは個人所有のトウモロコシ畑に変わったのだと言う。事前に許可を頂いてあったので、その墓地跡地で花を供え、線香を焚き、全員で黙祷を捧げる。ここには終戦前後、そしてこの地での越冬の間に亡くなった開拓団員らの遺骨を納めて共同墓地としたと言う。今回の団員の中にもこの水曲柳で家族を亡くした方も複数おられ、72年ぶりに訪れたこの場所で関係者らの冥福を祈ることが出来たと安堵の顔を見せる方もおられた。

続いて一行は「水曲柳」駅へ。この駅周辺の景色は当方が初めて水曲柳を訪問した20年前の頃の景色とほとんど変わっていない。しかし、今回初めて知ったことであるが、この水曲柳駅、しばらく前に駅は廃止されてしまっており、駅舎の建物だけが残されているのだと言う。駅舎のすぐ近くに背の高い円柱型の給水塔が残る。これだけが戦前当時から残る遺構であり、この水曲柳の移り変わりを見続けてきた給水塔である。今回の参加団員の仲田武司さんらは小学校の寄宿舎暮らしで、週末にはこの水曲柳駅から列車に乗り、一駅北の「平安」駅まで乗って自宅に帰り農作業等を手伝っていたのだと言う。また、当方の父らも終戦直前に「根こそぎ動員」と言われる召集を受け、慌ただしくこの水曲柳駅から見送る人も無く出征していったと言う。父の召集は敗戦の僅か2週間前、そのまま終戦、シベリア捕虜抑留へと翻弄されるも、どうにか生き延びて日本に引き揚げ、現在の松川町増野の開拓地に一足先に入植して夫の引き揚げを待っていた妻と再会出来たのはこれから3年もの先のことであった。

（つづく）

【満蒙開拓平和記念館副館長】

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 4

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

8、水曲柳と大日向の開拓集落の違い

この日の午後にはいよいよ水曲柳の中の集落回りへ。今回も関係する参加団員の暮らしていた集落等には全て回る手筈となっている。当方が水曲柳会の事務局を受けてから受け継いでいる当時の開拓地集落の配置図や集落別の名簿等に拠れば、当時、この水曲柳には日本人が住んでいた集落が27ケ所（他に北海道実験農場2ケ所）あったとなっている。南北約16キロ、東西約10キロにも及ぶ広大な当時の水曲柳であり、その中に多くの集落が点々としている状況は今も同じである。かつての旧満州への開拓団の入植形態では、それまでもあった現地の集落の中に日本人開拓団員らが入っていったものと、現地で日本人だけの集落を新たに作ったものとに大別される。水曲柳は前者であり、大日向は後者であった。最初の分村開拓団であった大日向村では第一から第五までの開拓団集落があり、それらは全て新しく日本人が作った集落であったと言う。その当初の入植形態がその後の開拓団の末路等にも関わってくることとなる。水曲柳もそうであるも、現地にあったそれまでの集落に入るということは、そこにかつて住んでいた現地の人々の家や農地をかなり安い値段で満拓（満州拓殖公社）等が買い取り、その住宅等に日本人開拓団員らが入っていったという形態が大半である。

そして、その多くは自分の意思とは遠いところで我が家や農地を手放さざるを得なかった現地の人々は、山間部に入って彼ら自身が開墾したり、あるいは村に残った人々は日本人の小作人となって共に暮らすこととなった。当方の両親の所でもそうであったも、水曲柳の開拓団員らの家にもほぼ1軒ずつ小作人の現地住民が共に暮らしていたと言う。彼らが住んでいた家を奪うことにはならなかったという点では新たに集落を作った大日向の方が現地の人々の恨みを買うことは少なかったのかも知れない。その一方で、結果として共に暮らすことなった水曲柳の場合には現地住民との連帯感が一部には醸成されたのに対し、日本人だけの集落を形成していた大日向村等の場合には支配者層としての日本人への反感を高めることになった可能性もある。ただ、どちらにしても、ソ連軍侵攻時には水曲柳も大日向も中国人らからの襲撃を受けている。襲撃してきたのはどこでもそうであるも、近くの集落に住む人々ではなく、その他の地域から襲ってきた中国人たちであり、その際には日本人たちを庇ってくれた現地の人々も少なくなかったと言う。水曲柳にしても大日向にしても、現地の人々との友好関係がある程度は築けていた人々とそうではなかった人達とでは敗戦時の末路等にも影響していたところである。

9、水曲柳での集落巡り

この日の午後には水曲柳の中の「李大房子」、「哈嗎塘」、「朱家屯」の3つの集落を駆け足で回る。そのいずれもの場所で村人たちが集まってきてくれ、当時を知る古老等を連れてきてくれた。これらも全て現地の皆さんの手配等のお陰である。中には当時を知る老人と出会い抱き合って喜ぶ姿なども見られた。「李大房子」はかつて下伊那農学校の校長を務めた後、自ら渡満し、この水曲柳で最期を遂げた早川完吾元校長らご家族も暮らした場所でもある。また水曲柳の中心部にも比較的近い「哈嗎塘」には日本人子供らの住む寄宿舎があったと言う。今回の団員の岩崎千秋さんは昭和17年にこの哈嗎塘で生まれている。75年ぶりに生まれた地に立った岩崎さんは感慨深く今の哈嗎塘の村の姿をいつまでも眺めておられた。最後に訪ねた「朱家屯」の集落の外れには樹齢200年以上とも言われる「楡」の大木があり、今も威容を誇るこの大木のことは元開拓団員の方の記憶にも残るものであった。親子で参加された団員の北島里さんもここで子供時代を過ごし、また団員の木下志保里さんの祖父はこの村の日本人側の村長であったと言う。

水曲柳現地で犠牲者の冥福を祈り黙祷

この日の最後には水曲柳の隣町の平安の町に立ち寄り、ここにある「平安」駅に立ち寄った。ここは敗戦後、逃避行のために水曲柳の北寄りの集落の開拓団員たちが集まってきた場所でもある。当方の母も生後半年余りの我が子を抱き、身の回りのものだけを持ってここへと逃れてきたと言う。平安の駅前でやはりこの駅にと逃れてきたと言う仲田武司さんの体験談をお聞きする。その人の輪を少し離れてカメラに納めながら、今は静かで平和なこの平安駅前の広場の姿に平和であることの有り難さをしみじみと思った。

（つづく）

【満蒙開拓平和記念館副館長】

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 5

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

10、水曲柳での表敬訪問と小学校訪問

3日目の5月29日、一行はまず水曲柳の南の端に位置する集落「頭道河子」付近へ。終戦後、敗戦国民となった水曲柳開拓団員らはハルピンから新京（現在の長春）へと逃れて避難民収容所で越冬したグループと、現地の水曲柳に残って越冬したグループとに分かれている。団員の原千代さんら水曲柳現地で越冬した開拓団員らが集まっていたのがこの「頭道河子」であった。ここでは一冬を越す間に多くの犠牲者を出したと言う。ここでも全員で黙祷を行った。その後、一行は水曲柳鎮人民政府、いわば村役場への表敬訪問へ。ここでは楊副鎮長（女性）ら村幹部の皆さんが出迎えてくれ、澤柳忠司団長等から挨拶が延べられた。鎮政府の幹部の皆さんもほとんどが7年前とは変わっており、団員の紹介の中で「この中にはこの水曲柳で生まれた者、ここで少年時代を過ごした者たちが何人もいる」ことを紹介すると好意的などよめきもあるなど温かく迎えて頂いたところである。

水曲柳鎮中心小学校での交流風景

鎮政府の玄関前で鎮幹部の皆さんと合同写真を撮った後、ここからはこの現地に残る我々A班と、清水可晴飯田日中友好協会会長が班長を務めるB班一行は長春に向かうために別行動となった。現地に残ったA班はまず水曲柳鎮中心小学校へ。当初予定では月曜日の訪問であるところから、教室での授業参観等もさせて頂く予定であったが、中国ではこの時期、ちょうど「端午節」の連休中であって休校日。児童達の姿は見られなかったものの、孫校長先生ら多くの教職員の皆さんが我々を出迎えてくれ校内の参観等をさせて頂いた。また、校内の応接室で行われた交流会では、水曲柳会からと今回の参加団員全員からの募金による児童支援金が澤柳忠司団長より贈呈された。今は生活水準の向上した当地であるも、以前には貧困のために学校に通えないという就学困難児童の支援を水曲柳会では訪中の度に行ってきたところである。

この水曲柳鎮中心小学校はその名の通り、水曲柳鎮には3校ある小学校のうちの本校であり、教育設備の充実等にも重点的に国からの助成等が行われているとのことであった。かつて最初にここを訪問した頃には昔懐かしい木製の机、椅子が並んだ如何にも農村然とした学校であったものが、今はコンピュータ機器等まで導入された最先端設備の小学校に変貌している。そして、ここは戦前当時、開拓団員の子弟らが通った小学校があった場所でもあり、70年間の時間の移ろいを痛感しながら元開拓団員の皆さんらも同校を後にした。

11、再び集落巡りへ

学校訪問を終えたA班一行は午後には再び集落巡りへ。この日には主に水曲柳開拓団がいた集落の北寄りの地域、現在は行政区画上では平安鎮となっている地区を訪問した。そして、澤柳忠司団長が住んでいた「董家街」、北原武司団員が住んでいた「房身岡」、仲田武司団員が住んでいた「東房身岡」、そして当方の両親らが住んでいた「東王家屯」と順次回った。このうちの「東房身岡」では、ここで12歳まで暮らした団員の仲田武司さんと子供の頃に遊んだ覚えがあるという現地の老人2人や、この村の屯長さんら村人が温かく出迎えてくれた。仲田さんら一家はソ連軍侵攻後、もうこれまでと集団自決を決意して近くの「呼蘭河」へと向かったものの、「早まるな」と後を追って引き留めに来てくれたこの屯（村）の現地長老の一声により一家は生き延びることが出来たと言う。

最後に訪問した「東王家屯」は当方の両親らがかつて暮らし、長兄が生まれた村でもある。ここには以前にも亡き父、当方の長男と親子三代で訪問したことがあり、その時にも、かつて小作人として共に暮らしていた金さんという朝鮮族の方がまだご存命であったが、その方ももう亡くなられ、一家も村を出ていってしまっていると言う。しかし、かつてを知る老人やこの村の屯長さんらがここでも温かく迎えてくれ、当時のお礼を申し上げることが出来た。どの村も建物だけは建て替えられているものの、道の配置等はほぼ当時のままであり、集落の周りには今は一面の水田が広がる。当時を知る参加団員らは一様に「当時はもっと畑が多かったが、今はみんな水田に変わってしまっている」と驚いていた。「満州へ行けば20町歩」と良く言われるが、実際には「最初から20町歩の経営などは無理と、入植当時は10町歩であった」と父らからは聞かされている。その10町歩は畑と田が半々で、畑は日本人自ら耕作し、田はこの水曲柳にも多かった朝鮮族の人々は水田耕作に長けていたところから、この人達に小作に出していたと言う。

（つづく）

【満蒙開拓平和記念館副館長】

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 6

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

12、水曲柳での終戦前後のこと

今回参加した元水曲柳開拓団員の人達の話を聞いても、当時、開拓団員らと現地の人々との人間関係は良好であったと言う。前述の話のように終戦前後の逃避行時には現地の人達から助けられたという人も少なくない。今回もそうであるも、こうして我々を友好的に受け入れて頂けるのも当時の開拓団員たちの多くが現地の人々と良好な人間関係を築いていたことも大きいと思われる。しかし、この水曲柳にても、また大日向村でも終戦前後には現地での襲撃、略奪等が行われ、水曲柳でも集団自決等も行われている。

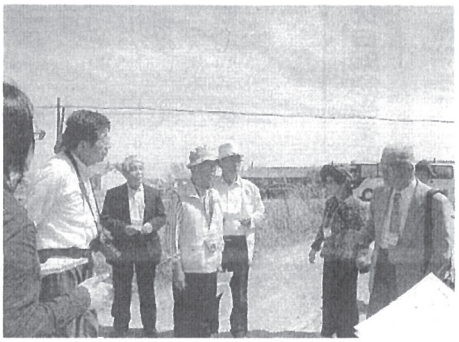
終戦後しばらくしてから水曲柳会では『ああ水曲柳』（昭和27年4月刊）という克明な開拓団記録を発行している。今ではプライバシー等もあってとても書けないだろうという終戦前後の生々しい話が溢れている。それを読んでみても明らかであるも、この水曲柳の中でも日頃から現地の人々に高圧的に接していた一部の開拓団員らは最初に現地の人々から襲撃を受けて殺されている。また、ソ連軍侵攻後には多くの集落で中国人等に襲われているし、中には山の中に逃げ込み、水曲柳でも数ケ所で集団自決が起きている。勿論、前述のように日頃から親しくしていた現地の人達から救いの手があったことも少なからずあった。しかし、それは全体からすれば一部のことであり、多くの現地の中国の人々にとっては、自分たちの家や農地を結果として奪った日本人開拓団員たちは招かざる存在であり、その延長として開拓団員らへの襲撃、略奪が繰り返されている。これは水曲柳、大日向のみならず、各地の多くの開拓団でほぼ同様の状況を呈している。前述のような当時の現地の人達との良好な人間関係もあったということ等も大切に語り継ぐべきではあるも、それだけを拡大解釈したりする等して、その全体像を見誤まるようなことはしてはならないと思われるところである。

13、長春（旧新京）でのB班の活動

一方、3日目の昼からは長春へと向かったB班一行は、その日の午後にはかつての旧満州国の首都「新京」、現在の長春市内に入った。そして、かつての避難民収容所のあった辺りを探索したり、翌日午前にはかつての満州国皇帝・愛新覚羅溥儀が暮らした皇居をそのまま残した「偽満皇居博物館」を見学等している。B班の班員の中にもこの長春（新京）で避難民生活を送った方もおられる。また当方の亡き母もこの新京の避難民収容所で越冬し、ここで幼い長男を僅か1歳で失っている。母は亡くなるまでこの頃のことはほとんど話してはくれなかった。それだけ辛く悲しい、思い出したくない記憶であったのだと思う。B班の皆さんもかつては「緑園」と呼ばれていた避難民収容所があった場所などを訪ね、全員で黙祷をして頂いている。当時、ここでの犠牲者はそのまま埋められたというこの場所は今は「長春公園」という立派な都市公園に変貌している。B班の皆さんの中には坂本幸平・レエ子さん夫妻や北島里さんなど、終戦の年の冬をこの長春の避難民収容所で生活された体験者の方もおられ、今回もその収容所のあった付近などを探索されたが、当時の建物、遺構等は勿論もう残っているはずもなく、「この辺りらしい」と思われる付近まで行くのがやっとであった模様である。

私事ながら当方の長兄も僅か1歳の命をこの地で落とし、当時の「緑園」、今の長春公園付近で葬られている。当方もこの長春公園には以前に何度か訪問しており、やはり公園の片隅で黙祷を捧げてきた。当時はまだ元気であった亡き父が同行した時もあり、この時85歳になっていた父は我が子の眠る地にうずくまり「可哀想なことをした。申し訳ないことをした」と大粒の涙をポロポロと落としていたことが今も忘れられない。長兄がこの地で亡くなったのは終戦の年の11月のこと。その頃、終戦直前の「根こそぎ動員」からそのままソ連軍の捕虜となりシベリアの捕虜収容所で強制労働させられていた父は我が子の死も知らず、それどころか妻子の消息すら判らず、酷寒の地で生死を彷徨っていた。父と同じように開拓団にいた18歳から45歳の壮青年男性たちは「根こそぎ動員」された時、「いざという時には関東軍（日本軍）が開拓団を守ってくれる」と信じて出征していったと言う。しかし、その頼りとした関東軍は「戦略上の理由」からと開拓団には告げることなく密かに朝鮮半島寄りの「作戦地域」へと南下し、開拓団の多くが点在する地域の大半は「放棄地域」として放棄し、ソ連軍が侵攻して来た時、関東軍は一部の国境守備隊等を除きそこにはもういなかった。開拓団の人々が、そしてシベリア抑留からどうにか生き延びて引き揚げてきた父ら抑留者が、引き揚げ後にその事実を知り、「関東軍は開拓団を見捨てて見殺しにした」と受け止めても仕方のないところであろう。ましてや、ソ連軍侵攻の時、関東軍の家族等がいち早く列車等にて南に逃れたこと等は、後に関東軍の元将校等の一部の中からも「関東軍の犯した大きな恥」等として自省する向きもあったことも無理からぬことではある。

（つづく）



水曲柳で集落を訪ねて歩く

【満蒙開拓平和記念館副館長】

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 7

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

14、水曲柳の人々の長春（旧新京）での避難民生活

『満洲開拓史』に拠れば、終戦の年の冬、各地から流入してきた3万人余りの開拓団員たちが避難民として長春市内で越冬し、そのうちの約6千人が亡くなっていると言う。市内各所にあった関東軍の元官舎等に押し込められての避難民収容所生活の中で栄養失調や流行病等で多くの犠牲者を出している。水曲柳開拓団からの逃避行者の多くも新京市内の緑園区にあった避難民収容所のうちの「南大房身」という地区で越冬している。『満洲開拓史』に拠ればこの南大房身だけでも約3000人が収容され、ここで実に2000人が亡くなっていると言う。水曲柳開拓団員のここでの越冬者数は650名とされ、ここでの死亡者は150名であったと記録されている。

当方の長兄ら幼き者、老人、病人等の弱き者の多くはここで命を落としているものの、しかし、水曲柳の人々はここで懸命に生き延びる策を講じつつ厳寒に耐え、比較的高い生存率で翌年初夏からの引き揚げを迎えている。特筆すべきは水曲柳開拓団員らは、年齢的に徴兵を逃れた老年層の団幹部を中心として結束し、まず個々が保有していた現金を全員から集め、それを共同管理し、これを原資として大豆等の原料を買い、味噌等を加工して作り、これを女性、子供等が長春市内で売り歩く等して生き抜いている。この話はこの味噌などを売り歩いたと言う母からも聞かされているし、また今回参加の仲田武司さんも自ら市内に味噌を売りに行ったという体験談を話されている。買ってくれたのは市内に住む日本人家庭等だったそうである。当時、開拓団員以外の多くの日本人たちも日本に引き揚げることが出来ないまま、旧満州には約170万人という多くの日本人たちが残されていたと言う。

越冬の中、多くの犠牲者を出す中で、開拓団員らを含む邦人たちがようやく日本へと引き揚げられるようになったのは終戦の翌年、昭和21年の5月になってからのことである。この引き揚げ実現の陰には、命をかけて旧満州から日本内地に潜入し上京、ここで自らGHQ（占領軍）のマッカーサー司令官に直訴した丸山邦雄氏（飯山市出身）らの活躍があった。この戦後秘話は満蒙記念館での展示の中でも取り上げているところであるも、この秘話もなんらかの形でもっと多くの人に知ってもらう術を考えているところでもある。

15、ハルビンでの中国養父母連絡会の皆さん等との交流

5月30日に舒蘭市からハルビンへと戻った我々A班一行は、ハルビン市内にて中国養父母連絡会の皆さん等との昼食を兼ねた交流会に臨んだ。同連絡会は、終戦後、現地に残された日本人残留孤児を引き取り育ててくれた中国養父母の皆さんを支援する中国側の市民ボランティア団体である。同連絡会とは当記念館の開館当時以来、密接な交流を図っている。今回も同会の胡暁慧会長（赤十字会の女医）始め、一昨年には記念館にも来日してくれている養母の李淑蘭さん（92歳）らも元気な姿を見せてくれていた。同会は育て上げた日本人残留孤児が日本へと永住帰国してしまい、生活に困窮し老齢化していく中国養父母らの生活を支援するためにと活動してきている市民団体である。

同会はその中国養父母らのことをもっと多くの人に知ってもらおうと「中国養父母展」を企画し、その常設展をあの「731部隊陳列館」の旧館の中で常設展示している。今回も見せて頂いたこの養父母展の当初の企画、実施時には、反日感情の高まり等も背景として、このような企画展を常設等してくれるような場所がなかなか見つからず、最後に「ならばここでやったら」と場所を提供してくれたのが「731部隊陳列館」であったのだそうである。もう3年前になるも、この養父母展を現地で見た当方は、この展示こそ日本国内で実施すべきと1年以上をかけて同連絡会と共に準備を重ね、一昨年の秋にその日本国内展を東京都内と満蒙記念館とで開催している。その際の展示パネルは同連絡会より記念館に寄託され、現在は長野県日中友好協会に再寄託し、長野県内での巡回展等が行われているところである。但し、まだその活用度は低いので是非その活用を願うところである。

前述の養母・李淑蘭さんは終戦直後に痩せ衰えた日本人残留孤児の幼女を引き取ろうとした時、周囲の人々から「お前は侵略者である日本人の子供を育てるのか」と責められたそうである。しかし、李さんは「私がこの子を引き取らなかったら、誰がこの子の命を救うのか」と引き取り、立派に育て上げてくれ、日本へと返してくれた。そういった多くの中国養父母の存在、その恩義を私たち日本人はもっと知るべきであるとつくづくと思う。

同時に、この日もお一人が同席されていたが、まだ中国には「私は日本人残留孤児だ」と訴えながらも、立証手段等が不足していること等から孤児としての認定を受けられない、いわゆる「未認定残留孤児」の方が少なからずおられる。厚生労働省から「未判明中国残留孤児肉親調査員」として委嘱されている当方も、前述の養父母連絡会で相談に乗っているその未認定孤児13人の日本国内での調査等の依頼を受け調査を続けている。しかし、あくまで残留孤児として判明した方の肉親探しの権限しか持たされていないことから、これら未認定孤児に関する調査は全て手弁当でのことであり、また戦後70年という時間の壁は厚く、なかなか調査の成果が上げられないのは辛いところでもある。改めて旧満州の戦後はまだ終わっていないということを実感する今回の訪中でもあった。

（つづく）

【満蒙開拓平和記念館副館長】

ハルビンにて。中国養父母連絡会の皆さんと共に

旧満州に2つの開拓団現地を訪ねて 8

～「水曲柳」と「大日向」～

寺沢秀文

16、今回の訪中を終えて（改めて思う現地訪問の意義）

かくして多くの成果を上げて無事に帰国した今回の水曲柳、大日向への訪問では、開拓団員の2・3世、また満蒙記念館の関係者等、それもお若い皆さんを含む一般参加の方にも多く参加して頂いた。記念館の開館以来、記念館関係者を中心とした若い皆さん等を誘っての旧満州への現地訪問の旅の実施に努め、開館の翌年以降、毎年、何らかの形で訪中団が現地を訪れている。今、満蒙記念館の開館を契機として、満蒙開拓には直接関係の無い若い皆さん等の中からも多くの方がこの満蒙開拓に関心を持ち始めてくれている。この皆さんは、高齢化が進み、減りつつある「語り部」の皆さんから直接その体験や思い等をお聞きし、そして次の世代の新たな「語り部」として、当方らと共に満蒙開拓体験を語り継ぐ立場を担っていってくれる皆さんでもある。

当方としても、その皆さんにはなるべく旧満州の地に足を運ぶように参加を呼び掛けてきた。公的支給での旅行ではなく自費での参加であり、お誘いすることに躊躇はあるも、毎回多くの皆さんがこの訪中に参加してくれている。中には、「満蒙開拓なんて70年以上も昔のことだし、今さらもう開拓団員が住んでいる訳でもない場所に行ったところで意味があるの？」と疑問視する向きも中にはある。しかし、それは大きな間違いであると私は思っている。例え70年以上の時間を過ぎていても、70年の時空を超えて、開拓団員の人々が立った大地を眺め、その空気を吸い、ここまでの距離の遠さを実感することは、満蒙開拓を語り継いでいく上では極めて大切なことであると思う。中には満蒙開拓の研究者を名乗りながら、旧満州の現地には一度も行ったことの無い者すらいる中で、今、こうして戦後生まれの若い人達などが70年の時空を超えて旧開拓地に立つ意義は極めて大きい。開拓団員たちが当時そこで感じた思いは、やはり同じその場所に立たなくては判らない。そして、それは満蒙開拓を語り継いでいく上でも極めて大切なことと信じている。

中国・黒龍江省の一面の大地

17、（最後に）満蒙開拓を語り継ぐということ

今回の訪中の間、元開拓団員の皆さんの体験談等を身近で、しかもその現地でお聞きすることが出来た。この体験は極めて意義深い。全国で一番多くの満蒙開拓団を送出したこの地域であるだけに、以前からその体験談の聞き取り等は比較的早くから行われてきた。当方自身にしても、飯田日中友好協会の中に青年委員会を立ち上げた時から元開拓団員の皆さんの聞き取り等に取り組み始め、以降、多分は数百人を超える元開拓団員の皆さん等に会い、そのお話をお聞きしてきたところである。それだけに、その聞き取り結果を形として残していくことの重要さ、そしてその作業の大変さは誰よりも理解しているところである。しかしながら、傲慢を承知で敢えて言わせて頂くならば、元開拓団員等も多いこの地域柄故に、その体験談を聞き取り、冊子化等するところまでならば比較的容易に出来る。しかし、より大切なことはその聞き取った成果をどのように活かしていくかということである。聞き取って「ああ、良かった」と終わりにするだけでなくて、それをどのように未来に向けて活かしていくのか、そのことが出来なくては、多くの人々の辛い体験に踏み込んでそれをお聞きすることを意義あるものとは出来ない。敢えてその辛い体験等をお聞きする以上、このテーマに最後まで向き合う「覚悟」と「信念」がなくては、せっかく重い口を開いてくれる皆さんに対しても極めて失礼なことになる。満蒙記念館もそのテーマに最後まで向き合う「覚悟」と「信念」の下に立ち上げ、運営されている。昨年11月に天皇・皇后両陛下に満蒙記念館にご来館頂いたも、開館して僅か3年半の、しかも民間運営のこんな小さな記念館にご来館頂けたのも、この記念館のその取り組み姿勢を宮内庁等から高く評価して頂いたからこそであり、両陛下の「満蒙開拓について国民にももっと知って欲しい」という願いからの実現でもあったと当方は思っている。

多くの犠牲者を生んだ「満蒙開拓」。それは「決して忘れてはならない歴史」であると共に「二度と繰り返してはならない歴史」でもある。この満蒙開拓の史実を語り継いでいく上で、今回のように旧開拓地の現地に立つことはやはり大切なことであると改めて思う。満蒙開拓の語り継ぎに携わろうとする皆さんには、勿論、それぞれの事情等はあろうも、事情の許す限り、旧満州の現地に立って欲しいものと願う。それを知っているといないとでは、元開拓団員の皆さんのお話をお聞きしていても、受け止め方、理解度に雲泥の差があると私は思っている。そんなことを思い、そしてこれからも旧満州の開拓地のあった場所を訪ね続けなくてはならないとの思いを更に深めつつ、また参加した団員の皆さん、ご支援頂いた多くの皆さんへの感謝をしつつ、今回の意義ある水曲柳、大日向への訪中を終えたところである。

（おわり）

【満蒙開拓平和記念館副館長】

「満蒙開拓平和通信」を発刊して

末広 一郎

はじめに

「星火方正」に原稿を書くに当たり、御礼のご挨拶を申し上げます。

私、末広一郎は元満洲開拓青年義勇隊、嫩江（のんこう）大訓練所第三次渡辺中隊にかつて所属しており、「嫩訓八洲会（のんくんやしまかい）だより」を 40 数年間に亘り、編集発刊と発送を、12 号から 54 号まで継続して行ってきました。今年４月８日をもちまして嫩訓八洲会は終焉、解散となりました。

そこで、新たに「満蒙開拓平和通信」を発刊しようと思い立ち、つい最近、第一号を発刊いたしました。（58 頁に表紙を紹介）

嫩訓八洲会（のんくんやしまかい）とは

満鉄のチチハル駅から嫩江駅までに伊拉哈（いらは）駅があります。この駅に向かって 12 ㎞の所に現地人の靠山屯（こくざんとん）部落があります。関東軍はこの辺に義勇隊訓練所を建設することを内定していて、物資運搬が大変な苦労があったとのことです。それ故か、伊拉哈駅から一つ手前の現地人の馬家舗屯（まぁじゃんぽとん）に変更になりました。この部落は伊拉哈駅から６㎞もあるので、もう一つ駅を伊拉哈駅の次に設ければ、大訓練所建設地から３㎞となり、変更となりました。昔の文献にこの通りが記載されてあります。

その駅の名前を彌栄開拓団長、嫩訓の所長山﨑芳夫先生が日本の国は８つの島からなる大和の国を八洲の国と勉強されていて、八洲駅となりました。八洲駅は嫩江大訓練所を建設するのに、物資の運搬にトロッコもでき、建設に大きな役割を果たしました。戦後の集いを嫩訓八洲会として、大会と慰霊を実施してまいりました。

戦後の集いを 1968 年（昭和 43）に名古屋市の「かるが荘」で第一回目の八洲会が幹部、諸先生方、ご婦人、寮母、看護師、研究生たちによって開催の始まりとなりました。（58 頁表紙の写真参照）

八洲会が隊員達によって運営されている今日は、嫩訓を美化するものではありません。事実をお伝えするだけで、二度とあってはいけないことであります。

方正日本人公墓に参拝

義勇隊元嫩江大訓練所が現在は、「九三農場」となっています。嫩訓大訓練所 20 ヶ中隊と周辺の開拓団を、９月３日に解放したので、「九三局」と呼ばれるようになりました。

1988（昭和 63）年頃から訪中を毎年のように参加していました。方正にある「日本人公墓」にはその頃から参拝していました。

哈同高速道路が完成していない時で、ハルピンから方正まで、中型バスで６時間以上かかっていました。方正市に１泊で参加したのであります。今は、２時間で行かれます。ハ

ルピンからだと１日で往復できることになりました。

訪中の度に尋ねて来る残留婦人、孤児たちとも面会もよくありました。

納河（のんほう）市に在住の伊藤孝さん、田村久江さんは、毎回のように尋ねて来て下さいました。

方正公墓に残留婦人が盆に参拝

彼女たちの話の中に、方正に日本人公墓がある、一度見学がてらに参拝されますようにと奨められました。「この墓が出来てから毎年のように残留婦人は８月 13 日、日本の盆に当たる日を選んで全満から申し合わせたように、集まっていました」と言われました。日本にいつ帰国できるか、お互い励まし合って集っておられたそうです。

我々は観光旅程を変更して、方正に６時間かけて参拝もし、残留婦人も同行して頂きました。彼女たちにはその後を通訳として訪中の度には同行して頂きました。

和平友好の碑

方正日本人公墓の後方に立てられた、方正で亡くなった人たちを記した石碑に赤ペンキをかけられた事件が起こってから、直ぐ訪問しました。

公墓がある友好園林の中にも入れたし、写真も撮ることができました。それからでも、２回訪れました。我々「ふれあい友好訪中団」は長野県の人たちが中心であるためか、「和平友好」の碑は長野県が献立したものだからか、日本人公墓参拝については、方正県政府は私たちを友好的に歓迎してくれたものと思います。

「和平友好」の碑の除幕式があった直後にも訪中しました。その除幕式があった直後には、看板、花束や幕などが散在していました。大きな式典であった模様を知ることができました。

おわりに

掲載して頂くので、感謝の気持ちを申し上げるべきが、どんどん横道に流れていき、申し訳ありません。ご寛容下さい。

方正友好交流の会に 2014 年に一度参加しました。藤野文晤氏の「日中関係の現状と未来を考える」という講演を聞いて感動したのが昨日のように浮かんで来ます。夕方の懇親会まで参加して、若者のみなさんが、「関東軍は満洲を作ったのに反省しないのが問題だ」と言っておられましたのが、強く印象に残っています。この会に度々参加したい欲望が体力に勝てずとなりました。

会員が増えること、方正の日本人公墓に参拝者が年々増えることを切望し、皆さまが活躍されますように。これからもよろしくお願い申し上げます。

（すえひろ・いちろう：1925 年生まれ。40 年、嫩江訓練所に入所。43 年、八家子（はっかし）開拓団へ入る。日本の敗戦後シベリアに抑留さる。49 年、舞鶴に引揚げ。49 年から 53 年まで国立療養所に入院。55 年、みなみ工房設立。60 年、とき印刷設立。定年で退職し現在に至る）

満蒙開拓平和通信

1号
2017年7月発行

特集　故 五味信一・向井茂登を偲んで

“星火方正”より 抜粋
満蒙開拓平和記念館館長専務理事寺沢秀文氏の論文２点掲載

出版物　７点　注目し必読

満蒙開拓を風化させてはならない希いを込めて

『満州・奇跡の脱出』がついにテレビドラマ化！

満蒙開拓平和記念館　寺沢秀文

１．葫蘆島からの帰国実現に隠された秘話

冒頭から私事にて恐縮ながら、１９４４年（昭和１９年）、「大陸の花嫁」として満蒙開拓団員となり旧満州へと渡満した私の亡き母は、敗戦の翌年の１９４６年（昭和２１年）７月、ようやく日本へと引き揚げてこられた。終戦の年、新京（現長春）の避難民収容所での越冬生活の中でまだ生後１０ヶ月の長男を失い、夫も終戦直前の「根こそぎ動員」による召集、出征でその生死すらも判らず、実はシベリアに捕虜抑留されていることも知らない中での失意での帰国であった。その引き揚げ時の旧満州からの出港地は「葫蘆島（ころとう）」という港であった。

終戦の翌年５月から邦人約１１５万人が引き揚げてきたというこの「葫蘆島」（現在の遼寧省葫蘆島市）の名前は、引揚者であるならば誰でも知る懐かしい地名である。しかし、私の母を含めて、なぜこの葫蘆島から引き揚げることになったのか、それ以前にどうして旧満州から日本へと引き揚げてこられるようになったのか、その経過等についてはほとんどの旧満州からの引揚者は知らずにいた。私がその引き揚げ実現の経過、背景等を詳しく知ることが出来たのは、実はある方との出会いによることからであった。ポール邦昭丸山氏、今年７５歳になられ、アメリカ・コロラドに住まわれる日系三世の男性の方である。

このポール丸山氏、前述の旧満州に取り残された邦人らの日本引き揚げを実現させた３人の「在満邦人救済代表団」のリーダーであった丸山邦雄氏（１９０３～１９８２。現在の長野県飯山市富倉出身）の三男であり、後に『満州・奇跡の脱出』を書かれた方である。このポール丸山氏に私が巡り会ったのも実は満蒙開拓平和記念館のお陰であり、また「方正友好交流の会」、更には羽田澄子監督作品の映画『嗚呼、満蒙開拓団』のお陰でもあった。確か２００９年（平成２１年）６月のこと、この『嗚呼、満蒙開拓団』が最初に東京・神田の「岩波ホール」で上映されることを知り、まだ建設計画準備中で建設資金の寄付集め等に奔走していた段階の満蒙開拓平和記念館建設運動のチラシを、同映画館の会場入口に置いて頂くことが出来た。そして、会場でこのチラシを手に取って読まれた方の中に丸山マリアン真理子さんという日系三世の女性の方がおられた。このマリアンさんは支援のお手紙を建設準備記念館にお送り頂き、その中に「私の父親は丸山邦雄と言い、かつて満州にいました」とあった。早速、当方から御礼のお手紙を差し上げたところ、マリアンさんはこの手紙をアメリカ在住の兄のポール邦昭丸山氏に転送、これを読まれたポール丸山氏から当方の所にメールが届いたのはそれからしばらくしてのことであった。

そして、メールでのやり取りが続く中で、私はポール丸山氏の父親である丸山邦雄氏という方の存在を知り、そしてその方をリーダーとする３人の「在満邦人救済代表団」の活躍のことを初めて知った。丸山邦雄氏らは終戦の年の越冬の中で多くの犠牲者を出していた在満邦人の早期引き揚げを実現させるべく、１９４６年（昭和２１年）２月、旧満州を命からがらに脱出、日本に潜入し、東京のＧＨＱ（占領軍。正式には連合国軍最高司令官

総司令部）本部へと向かった。そしてそこで会ったのはかのダグラス・マッカーサー司令官本人であった。かつてアメリカ留学経験のあった丸山邦雄氏は自らの英語で直接にマッカーサーに直訴、それにより米軍の協力により在満邦人の引き揚げが実現、「葫蘆島」からの１１５万人の在満邦人の日本帰国が実現した次第であった。そして、引揚港としてこの葫蘆島を提案したのも丸山邦雄氏であった。当時、中国は国共内線の真っ只中で、旧満州沿岸部等も中国共産党によりほとんどが抑えられ、アメリカが支援していた蒋介石率いる国民党の支配下にあった港湾は旧満州ではもうこの「葫蘆島」だけであったことから、丸山氏はこの葫蘆島からの引き揚げを提案した次第であった。かくして、多くの邦人引き揚げが実現し、私の母も引き揚げてくることが出来た。

２．「満州・奇跡の脱出」のドラマ化等に向けて

私とポール丸山氏とのやり取りが始まった頃、ポール氏は自らこの父親の丸山邦雄氏らの活動を克明に描いた『Escape from Manchuria（満州からの脱出）』という本を執筆中であった。この著書は２０１０年春に発刊され、その英語本が私のところにも届いた。そして、ポール丸山氏が来日され、ご本人に直接お会いすることが出来たのは、東日本大震災からまだ日の浅い２０１１年（平成２３年）５月のことであった。この時、当方の案内により、丸山邦雄氏の郷里である現在の飯山市富倉を訪問、その後、ようやく建設計画が具体化していた阿智村にも訪問して頂いた。まだ建設の始まっていない更地の建設予定地を見て頂き、またこの時には阿智村公民館にて講演もして頂いている。

そして、ポール丸山氏の書かれた英文の前著を手にしつつ、何とかこれを日本語版として邦訳版を出版できないものかと願った。やがてそれも実現し、邦訳版『満州・奇跡の脱出』（柏艪舎刊）が日本国内で出版されたのは２０１１年（平和２３年）１２月のことであった。この中で詳しく紹介されている丸山邦雄氏らの活動のことは、その２年後に開館した我が満蒙開拓平和記念館の展示の中でも取り上げさせて頂いたことは言うまでもない。丸山邦雄氏らの活躍を取り上げた記念館等は当館が国内でも最初であった。そして、次には、何とかこのストーリーを映画、あるいはテレビドラマ化等することにより、丸山邦雄氏らの活躍を多くの人々に知ってもらわなくてはならないと願った。ポール丸山氏も、また当方も、機会ある度にテレビ局関係者、映画関係者等にこの話を映像化出来ないものかと働きかけてきたものの、なかなかそれは実現に至らなかった。

しかし、嬉しいことに、この度それが実現することとなった。どういう経過でこの話を知ったのかはポール丸山氏もまた当方も知らないものの、ＮＨＫがこのポール丸山氏著の『満州・奇跡の脱出』を原作としてドラマ化されることになったことを知ったのは今年の夏のことである。ポール丸山氏を通じてこのドラマ化の話しを知ったものの、しばらくの間はオフレコでとのことであり、それがＮＨＫから正式に製作発表されたのは今年９月初めのことであった。詳細は末尾掲載の通りであるも、来年の３月、２週に分けて放送される『どこにもない国』というドラマである。主役の丸山邦雄氏を演ずるのはあの名優の内野聖陽さん、その妻の万里子さんを木村佳乃さんが演じ、その他のキャストも有名俳優陣が揃っている。そして、この主役の内野聖陽さん、今だから明らかに出来るものの、今年の７月､お忍びで担当ディレクターの方と共に我が満蒙開拓平和記念館を訪問されている。

当方がご案内等させて頂いたが、内野さん、本当に熱心に満蒙開拓の歴史を見学され、その真摯な姿勢に「これは間違いなく良いドラマになる」と確信した次第であった。そのドラマ『どこにもない国』、現在、順調に撮影が進行中とのことである。

３．ドラマ『どこにもない国』は来年３月に放送

原作を書かれたポール丸山氏、この１１月の上旬にも再来日され、妻のラレーさん、弟の丸山ザビエル邦照氏ご夫妻、妹のマリアン万里子さんと共に満蒙開拓平和記念館にもご訪問頂いた。ポール丸山氏の記念館への来館は確かこれでもう５回目となる。丸山さんご夫婦は今回の来日直前に上海を訪問し、ここの映画撮影所でドラマ『どこにもない国』を撮影中の内野聖陽さんらと面会、激励してこられたとのことであった。

以前にもこの「星火方正」で書かせて頂いたことがあるも、在満邦人らの帰国実現を果たした丸山邦雄氏らの活躍により、我が母も日本へ引き揚げることが出来、そして私も生まれることが出来た。いわば丸山邦雄氏は母にとっても、私にとっても命の恩人であるとも言える。その引揚者の子供である当方と、丸山邦雄氏の子息であるポール丸山氏らとが交流させて頂けることになったのも、これも満蒙開拓平和記念館が結びつけてくれたご縁でもある。そのポール丸山氏は、前回の東京オリンピック（１９６４年）の柔道・軽量級のアメリカ代表選手でもあった方である。残念ながら優勝した日本人選手に準々決勝で敗れメダル獲得は叶わなかったとのことである。

ドラマ『どこにもない国』の放送予定は来年３月２４日と３１日の二夜。どうか多くの皆さんにご覧頂きたいところである。また、その原作となったポール丸山氏著の『満州・奇跡の脱出』も是非お読み頂きたい。なお、３人の「在満邦人救済代表団」のお一人で、数年前にお亡くなりになった武蔵正道さん（ドラマでは満島真之介さんが演じる）の書かれた著書『アジアの曙・死線を越えて』（自由社）という本もある。いずれも当記念館でも販売しているので、一緒にお読み頂いたら、更にドラマへの興味が深まるものと思う次第である。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（以下はＮＨＫのホームページより）

ドラマ『どこにもない国』

終戦後、旧満州に取り残された１５０万を超える日本人の帰国を実現に導くためにわが身を捨てて奔走した男たちがいた。国家から見捨てられた同胞を故郷へ帰すための男たちの命がけの戦い―そしてそれを支えた妻たちの愛。複雑怪奇な冷戦下の国際情勢に翻弄されながら、奇跡とも言われた引き揚げは、どのようにして実現に至ったのか―
歴史の陰に埋もれてきた戦後秘話を中国ロケも交え、壮大なスケールでドラマ化する！

【放送予定】
前編：2018年3月24日（土）　総合　よる9時
後編：2018年3月31日（土）　総合　よる9時

【あらすじ】
ソ連占領下の旧満州。全財産を失い、略奪暴行にさらされ、日本との通信連絡も途絶し人々は暗闇に取り残された。一日平均2400人が命を落とす極限状況を打開するために立ちあがったのは無名の民間人だった。丸山邦雄（内野聖陽）は自らが使者となって日本へと脱出し、窮状を訴え、日本を、そしてアメリカを動かすしかないと決意する。英語が堪能な丸山。資金力に富む実業家、新甫八朗（原田泰造）。中国語に堪能で快活な若者、武蔵正道（満島真之介）。チームを組んだ三人は、妻や家族を満州に残し、幾多の絶体絶命のピンチを乗り越え、遂に脱出に成功。吉田茂（萩原健一）、マッカーサーに早期の引き揚げを直言、さらにラジオで引き揚げの緊急性を訴え世論を大いに喚起していく。遂に、１００万を超える在留邦人の満州からの引き揚げは実現した。その中には丸山の妻・万里子（木村佳乃）、新甫の妻・マツ（蓮佛美沙子）の姿もあった。だが、彼らを救うために闘った３人の男がいたことを殆どの在留邦人は知る由もなかった。

【おもな登場人物】
丸山邦雄・・・内野聖陽
政治学を学ぶため大学卒業後、米国に留学。政治学の研究者を志すが、軍国主義下の言論統制に嫌気がさし、満州に新天地を求める。終戦時には鞍山にある満洲製鉄に勤務。名著「ユートピア」に感銘を受けて、理想の実現のためにたゆまず努力することを信条とする。終戦後、同胞の窮状を見かねて、満州脱出を計画する。

丸山万里子・・・木村佳乃
留学中の丸山と結婚した日系二世。米国名はメアリー・タケダ。終戦時、４人の幼い男子の母でありながら、不安を訴えることもなく丸山を送り出し、大連に子を連れて避難。丸山脱出後、１０か月もの間、強い意志と愛情で子たちを守り抜く。

新甫八朗・・・原田泰造
度胸の良さと独特の商才で、満州１７都市に支社を持つ建設会社・新甫組の社長となる。終戦直前の７月、「根こそぎ動員」で召集されるが、敗戦を知ると部隊を脱走し家族の待つ鞍山に帰還する。丸山から誘われ同志となり、行動力と資金力で脱出行を支える。

新甫マツ・・・蓮佛美沙子
八朗の妻。二人の男の子の母。夫の脱出行が失敗したのではと一時は絶望的になるが、万

里子に励まされ、母として気丈に生きていく。大連で身を隠している際に、素性が見破られそうになり、現地のカトリック教会でかくまわれる。

武蔵正道・・・満島真之介
新甫組の社員。中国語に堪能で、新甫に心酔している。わけへだてない気さくさで現地の人からはウーザン（武蔵の現地読み）と慕われる。得意の中国語で脱出への糸口を作る。のちに危険を顧みず満洲に戻り、スパイ容疑で拷問を受け死地をさまよう。

岸本綾夫・・・片岡鶴太郎
満洲製鉄理事長。元陸軍大将にして東京市長を歴任。終戦後、鞍山の製鉄所と社員・家族の生命を守るため奔走するがソ連軍に身柄を拘束され、やがて中国共産党軍によって逮捕される。丸山から脱出の計画を告げられ、協力者として新甫を推薦する。

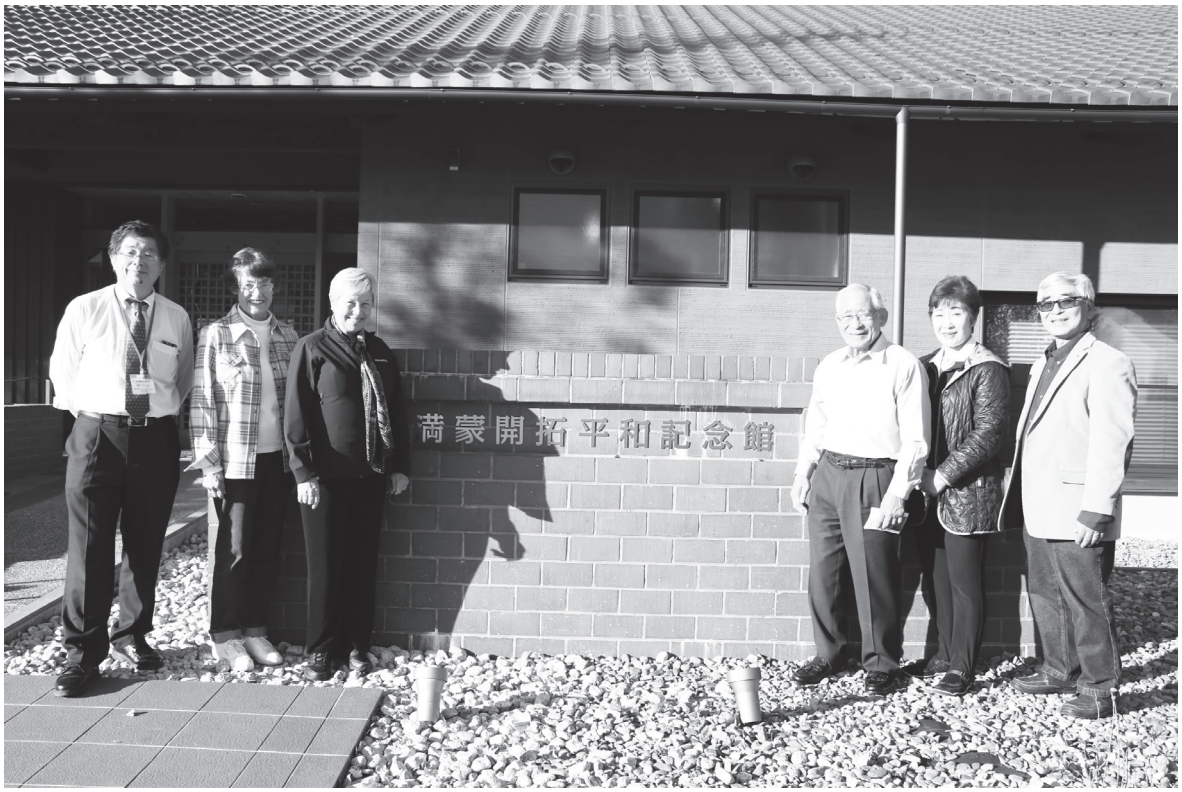
吉田茂・・・萩原健一
元外務次官・駐英大使。終戦時は無役だったが、前任者が更迭されたため外務大臣に就任。翌年には総理大臣となる。戦前、駐英大使時代に欧州旅行中の丸山と知り合う。引き揚げを直訴する丸山に、占領下の日本には外交が存在しないため草の根で世論を盛り上げるようアドバイス。側面から支援する。

【内野聖陽さんのコメント】

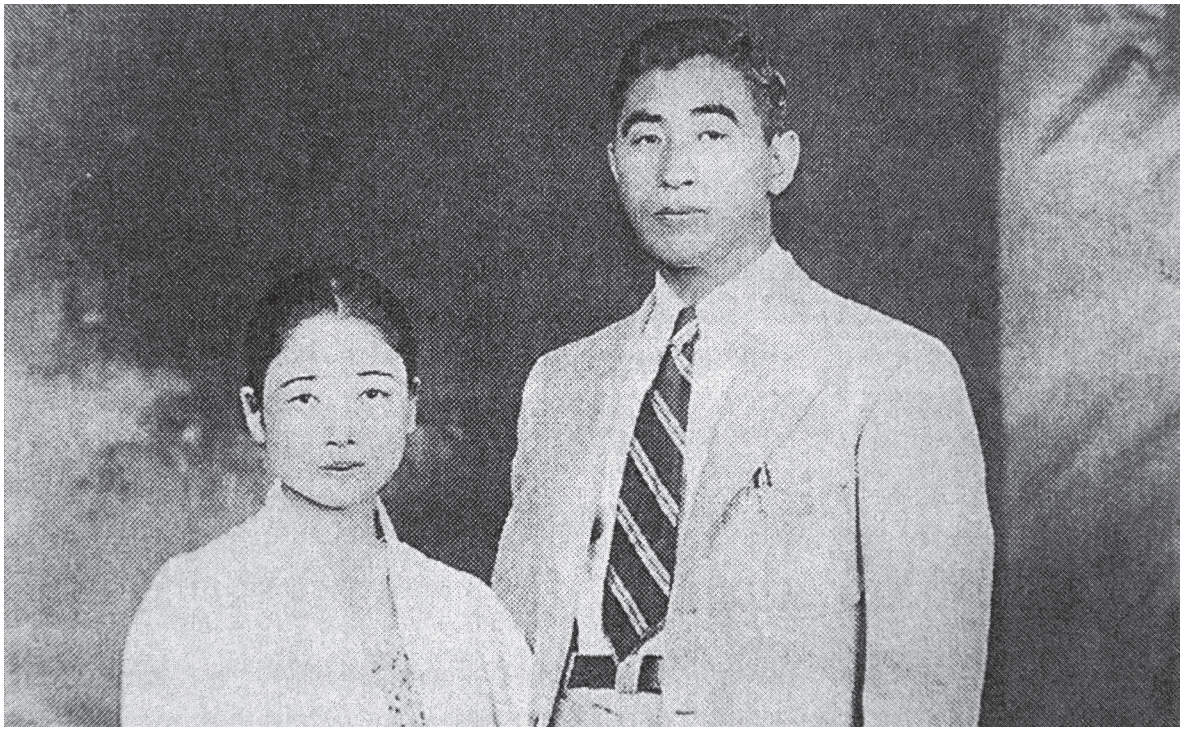
日本が敗戦した頃、満州でこんなにも悲惨な状況が起きていたことを私は知らなかった。そしてその惨状を救うべく立ち上がった男たちがいたことも。大きな歴史のうねりや大国の前で、個人の力は小さいかもしれないが、行動に出た丸山という男の正義感や意志力、そして、夢や理想に、とても元気をもらえる作品だと思います。ことさら勇者でもない、なんでもない市井の人間が織りなす一大冒険物語になるように、リアルに生々しく、深い思いを持って演じ切りたいと思っております。
どうぞこの2夜連続の大作にご期待ください。

【作】大森寿美男（大河ドラマ「風林火山」大河ファンタジー「精霊の守り人」シリーズ）

【原案】ポール・邦昭・丸山 著「満州　奇跡の脱出」より



去る１１月６日、満蒙開拓平和記念館に来館した
ポール丸山さん（右から３人目）ら一行



アメリカ留学時代の丸山邦雄さんと妻の万里子さん

2017年11月24日付、信濃毎日新聞

戦の終りし後の難き日々を面おだやかに開拓者語る

語り部思いやる 陛下の歌碑除幕

歌碑の前で思いを語る久保田さん＝23日、阿智村の満蒙開拓平和記念館

阿智の満蒙開拓平和記念館

下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館は23日、天皇陛下の和歌を刻んだ歌碑の除幕式を開いた。天皇、皇后両陛下は昨年11月に同館を訪問し、満蒙開拓団員や青少年義勇軍だった「語り部」3人と懇談された。旧満州（中国東北部）での逃避行の体験などを聞き、その際の思いを和歌に詠んでいた。同館は「何らかの形で記憶に残したい」と敷地に歌碑を建立した。

和歌は「戦の終りし後の難き日々を面おだやかに開拓者語る」。今年の年頭に宮内庁を通じて発表したものだ。同庁によると、過酷な体験を懇談の場で話す元開拓団員らに思いを寄せたという。

歌碑は黒御影石製（高さ1・85メートル、横80センチ、厚さ15センチ）で、記念館の河原進館長（71）がしたためた文字を彫った。村などによると、天皇陛下が詠んだ和歌を碑を建てて残している他地域の事例を県から紹介され、村と同館が協議。飯田日中友好協会も加えた3団体で120万円を支出し、建立した。

式には、天皇陛下と懇談した語り部3人が出席。元河野村開拓団員で、敗戦後に集団自決の末に生還した経験を持つ久保田諫さん（87）＝下伊那郡豊丘村＝が、語り部を代表してあいさつした。懇談の際、天皇陛下から語り部を長く続けるよう励まされ、元気をもらった―といい、「御製（和歌）にしていただけて感激でいっぱいだった。一日でも長く語れるように頑張りたい」と話した。

1　昭和20年12月21日第3種郵便物認可

天皇陛下の歌碑を建立

満蒙開拓平和記念館　昨秋の来館を記念し

阿智村駒場の満蒙開拓平和記念館で23日、天皇皇后両陛下の来訪を記念した碑の除幕式が開かれた。碑には天皇陛下が来訪時の思いを詠まれた「戦の終りし後の難き日々を面おだやかに開拓者語る」との歌が刻まれた。

両陛下は同館で展示を見学後、元水曲柳開拓団員の桜井こうさん(93)＝飯田市上郷＝、河野村開拓団の集団自決で生き残った久保田諫さん(87)＝豊丘村＝、青少年義勇軍で満州に渡り戦後中国人に助けられて帰国した湯澤政一さん(87)＝飯田市座光寺＝の3人の語り部と懇談した。

碑は同館と阿智村、飯田日中友好協会の3者共同で建立。黒御影石製（縦1・5メートル、横80センチ、厚さ15センチ）で台座を含めると高さは1・85メートル。天皇皇后両陛下の来訪を解説した副碑も設けた。

除幕式で河原進館長は「両陛下の来訪を久しく記念すべく建立した。戦争を憂い平和を願う陛下のお気持ち、満州移民の悲劇に心を寄せていただいたことをしっかり全国、後世に発信したい」と語った。

来賓として訪れた阿部守一知事は「今日の平和が多くの方の苦難の上に成り立っていることを認識しなければいけない。この記念館を県も後援し、力を合わせて平和の尊さ戦争の悲惨さを伝えていきたい」と祝辞を述べた。

語り部の久保田さんは「お会いした時に『年は日ごとに増していくが1日でも長く語って下さい』と励まされ、元気をもらった。御製（天皇陛下の歌）をいただいて感激でいっぱい」と語った。

桜井さんは「私たちの気持ちを詠んでいただいて感謝している。体が元気な限りは体験を語り続けたい」と話し、湯澤さんは「義勇軍は侵略者で加害者だったが中国人が暖かい部屋と食事を与えてくれた。短い時間だったが3人が伝えたことを全て理解してくれた。それが歌の中に表れている」と話した。

来訪記念の御製碑を除幕（満蒙開拓平和記念館で）

2017年12月4日付、東京新聞

負の歴史にも向き合い

象徴天皇と平成 2

満蒙開拓平和記念館副館長 寺沢秀文さん

寺沢秀文さん

満蒙開拓平和記念館で寺沢秀文さん(右)から展示物の説明を受ける天皇、皇后両陛下＝長野県阿智村で、2016年11月17日

「自決するため仲間と石で殴り合ったが、自分だけ生き残った」。厳しい表情で壮絶な体験を話す満蒙開拓団の元団員たちに、天皇陛下は言葉をかけられた。「こういう歴史があったことを経験のない人にしっかり語り継いでいくことは、とても大切だと思います」

満蒙開拓団　旧満州と内モンゴルに入植した日本人移民団。疲弊した農村の人口を減らし、北方警備の盾とする意味合いもあった。1932年から終戦までに約27万人が入植。45年8月9日の旧ソ連参戦で、避難する際に命を落とした開拓団員も。親と死別・離別した多数の子どもは残留孤児となった。

二〇一六年十一月十七日。天皇、皇后両陛下は、長野県阿智村の「満蒙開拓平和記念館」で三人の元団員と懇談した。いずれも戦前、旧満州(現中国東北部)に入植した。二人は引き揚げ体験を語る活動をしていた。両陛下は真剣に耳を傾け、「ご苦労されましたね」とねぎらった。

案内役を務め、懇談に同席した記念館副館長の寺沢秀文さん(六三)は胸が熱くなった。「開拓団は、国に見捨てられた『棄民』だった。両陛下にお越しいただいたことで、これまでの活動が報われた」

長野県は開拓団に都道府県で最多の約三万三千人を送り出した。このうち約一万五千人が旧ソ連参戦後、逃避行での集団自決や、収容所内での飢えや疫病、寒さで死亡した。記念館はその悲劇を後世に伝えようと、一三年に開館した。

両陛下はこれまでも、引き揚げ者が戦後に開拓した土地へ足を運び、住民と交流している。関係者によると、満蒙開拓団を扱ったドキュメンタリー映画のDVDも御所で見ており、記念館の開設を知ると、訪問を希望した。宮内庁幹部は「外地で苦労した人びとの話に耳を傾け、平和の尊さをあらためて感じたいとお考えになったようだ」と話す。

寺沢さんは戦後生まれだが、両親は元開拓団員で、引き揚げ中に一歳だった兄が亡くなった。両親からは、つらい体験と合わせ、「中国人に申し訳ないことをした」と聞かされて育った。入植地は中国人の土地を強制的に安価で買い上げたものだったが、両親はそのことを後で知ったのだという。

引き揚げ者と懇談 伝承「背中押された」

記念館の開設に携わる中で、引き揚げ者からは、侵略の歴史や大きな犠牲を生んだ過去に触れられたくないという声も聞いていた。「昨年夏に両陛下の訪問が決まった時は、負の側面にも向き合っていただけるのだという感謝と、驚きの気持ちが同時にわいた」と率直な心情を明かす。

語り部の高齢化が進み、現在は十人と、四年前の開館時から半分に減った。最高齢は九十五歳。入植当時、子どもだった人でも八十歳を超える。来館者の数は減少傾向だった。だが、両陛下の訪問が報道されたことで六割ほど増え、修学旅行生の姿も目立つ。若い世代が語り部を引き継ぐ試みも始まった。

寺沢さんも本業の不動産鑑定士のかたわら、講演や来館者へのガイドなど、これまで以上に精力的に動いている。「これからもこの歴史をしっかりと伝えてください」。来館時の陛下の言葉に「背中を押された」と強く感じているからだ。

(小松田健一)

回想

～チチハルから日本へ引き揚げてきた私～

土橋　貞夫

玉音放送はチチハルの官舎の庭で聞いたように思う。国民学校３年生だった私は夏休み中だったが、この日を境に「満州」での学校生活は終わった。8 月 15 日から程なく内地送還の通達があった。「手荷物を持って駅に集合せよ」「集合は延期」「しばらく駅で待機せよ」・・・。結局、引き揚げは一年後となった。

上海事変後、兵役を退いてチチハルの陸軍補給部隊（983 部隊）に文官として勤務していた父は、部隊長の指名により邦人 800 名の世話係として引き揚げ業務に携わることになり、当時成人男子の多くがシベリア行きとなる中、幸いにも家族と一緒に引き揚げてくることになった。世話係は 10 人程だったようだが、要人との折衝や停留の先々で現地の当事者との交渉に当たり、食料の確保をはじめ不慣れな業務に苦難の連続だったと思う。

ほぼ１ヶ年の収容所（宮前小学校？）生活の後、1946 年の夏、箱詰めの貨車でチチハルを発って一路南下、コロ島を目指すことになった。ハルピン、新京（長春）、奉天（瀋陽）など、所どころで停留を繰り返しながら無我夢中で過ごした二ヶ月の大陸流浪の旅だった。

列車の運行は気まぐれで荒野の真っ只中に何時間も止まっていたかと思いきや、突如動き出したり、夜間“無蓋車”でふるえながら満天の星空を見たこともあった。当時、各地に内戦中で爆破された鉄橋を目の当たりにし、渡し舟による雨中の行進を余儀なくされたこともあった。こうしたどさくさの中で「満州」の夏は駆け足で過ぎていった。

コロ島から乗船した船は興安丸？だったと思う。外洋の東シナ海に出るまでの渤海は薄く濁った黄土色だった。

上陸地は長崎県佐世保だった。ここから父の故郷に辿り着くまでの収容所生活、日数、交通手段などはあまり思い出せない。ただ、食事は大方“すいとん”だったし、山々の頂きに雲がかかっている光景がとても珍しかった。見渡す限り地平線で、山が見えない大陸では雲は遠い存在だったので・・・。

1946 年 10 月 14 日、諏訪郡永明村(現茅野市)に着いた。駅から祖父母が待つ家までの道すがら、収穫前の田圃は一面に黄金色の稲穂が揺れトンボが乱舞していた。

板の間に鉄瓶が掛かったいろりがあり、古いかまどもあった。暮しは決して楽ではなかったが、留守を守っていた祖父母と叔母が温かく迎えてくれた。

（つちはし・さだお：1937 年 1 月、旧満洲のチチハルで生まれ育つ。46 年 10 月、長野県茅野市に引き揚げる。東京中央郵便局での勤務後、長野県の県立高校の教員生活を送る傍ら日中友好活動に携わる。信州葫蘆島友の会会員。現在、長野県茅野市在住）

土橋さんが描かれたスケッチ

引き揚げ60周年記念での土橋さん（2006年6月コロ島で）

中高生たちに歴史を伝えなければいけない

―「満蒙開拓平和記念館」見学で思う―

田井 光枝

東京・深川から電気のない村へ疎開

私は昭和 10 年４月に生まれた。戦前生まれということだ。東京は深川生まれだが太平洋戦争の戦況が厳しくなり、学童が地方に疎開させられるようになると茨城県水戸市近在の、電気も通じてない小さな村の母の実家に妹と弟と共に預けられた。国民学校３年生の２学期から５年生修了までの２年半をそこで過ごした。

茨城県の戦禍についてあまり聞くことはないようだが、それは他の地域があまりに凄まじかったせいであろう。日本が国防力さえ失った戦争末期の 1945 年、軍需産業にかかわっていた日立市・勝田町(現在、那珂湊市と合併してひたちなか市)は、米英連合軍による艦砲射撃や米軍の空爆を度重ねて受けた。子どもを抱えて押し入れに逃げ込み、布団を被った親子がそのまま艦砲射撃による銃弾で死亡したというような話が登下校の際の子どもたちの話題にさえなった。

水戸市は日本が降伏直前の８月初めに B29、160 機による空襲を受け１万戸を超える家屋が焼失した。水戸市の資料によれば、それは全市戸数の約 90%であり、罹災人員は全市人口の約 80%に当たったそうだ。真っ赤に燃え上がる空の中を焼夷弾がキラキラと輝きながら降るように落ちてゆくのを家族で呆然として眺めた。水戸市も日立市も壊滅的な被害を受けたのだ。

水戸市と疎開先の村の間には陸軍の駐屯地があり、霞ヶ浦には「予科練」と呼ばれる海軍飛行予科練習生養成の基地があったので、戦争末期には霞ヶ浦から飛び立った特攻機が米機に体当たりを試みることもあり、又、畦道を歩いていた子供が米機に撃たれて死亡したり、近くの村に米機が撃ち落とされたというような情報が子供の耳にも入った。 終戦の年である昭和 20 年になると、子供の足で小一時間かかる学校に行っても空襲警報が発令されて授業を受けることなく家に戻された。

３月１０日の東京大空襲

父が出征中の３月 10 日の東京大空襲で家は焼かれ、家を守っていた母と末の弟(当時４歳)の消息が分からなくなった。祖父が毎日弁当を持って東京に通い焼跡を探し回った。10 日ほどして、母と弟は顔や腕にやけどを負いながらも近所の人に助けられて深川からはかなり距離のある渋谷の病院に収容されていることが見つかって安堵したものの、同じく深川在住だった母の叔父の家族は一家全滅であった。私の伯父は海軍で戦死、叔母の連れ合いは生まれた子供の顔も見ずに陸軍で戦死した。ぎらぎらと眩しい炎天下の街道に国民学校の全校学童が並ばされて「海ゆかば」を奏でる軍楽隊に先導された慰霊が続くのを見送ったこともあった。

深く考える子供でなかったので戦争中の自覚があまりないまま授業がないのをいいことに村の子どもたちと遊びまくっていた。が、振り返ってみると国民小学校時代の毎日に戦争があった。

戦争のむごさや非道さを理解できるようになったのは、戦争が終わり一面の焼野原の東京に戻ってからである。父が無事復員して東京に戻ったのは、3月10日の東京下町大空襲から既に1年経っていたが地平線が見えるといっても過言でないほどに焼け野原が広がり、あちこちに瓦礫の山ができていた。

家の付近に並んで建つ、小学校(当時は国民学校)と府立化学工業専門学校を囲む塀には、そこで折り重なって亡くなった人々の姿が隙間もないほどにべったりと赤茶けて生々しく焼き付いていた。公園は空襲で命を絶たれた名の判らない人たちの墓で埋め尽くされていた。中学に進んで読解力がつき始めた頃に、様々な地域の戦争を語る本が出版されるようになって次々に読んだ。中学生の未熟な思考ながら自分が知らなかった、信じられないような戦時中の事実に戦争は二度とあってはならないと強く思うようになった。

知ることが少なかった満蒙開拓団

中国大陸から引き揚げの苦労も本を通して知った。しかし、満蒙開拓団について身近に縁ある人がいなかったこともあってほとんど知らないままだった。切っ掛けは「方正友好交流の会」事務局長・大類善啓氏が「方正日本人公墓」について私どもの会・会報誌「わんりぃ」に紹介下さってからでまだ年数も浅い。羽田澄子監督の『嗚呼 満蒙開拓団』のドキュメンタリー映画も見ていないのだ。申し訳ないと思う。自分が80歳近くなっていて(現在82歳)、耳が遠くなり映画のナレーションを聞き取れないことや、心のどこかに戦争の悲惨さと新たに向き合うのはもう沢山という気持ちがあった。

満蒙開拓平和記念館に入館して

地元の杉材で作られた「満蒙開拓平和祈念館」は緑美しい阿智の風景に抱きかかえられるように建っていて、どの部屋も明るく気持ちの良い建物であった。内部の展示スペースは、1)「序章―時代を知るタイムトンネル」、2)「大陸へ―映像で見る満蒙開拓」、3)「新天地満州―希望の大地」、4)「敗戦と逃避行―絶望の逃避行」、5)「証言」、6)「引き揚げ・再出発」、7)「望郷」、8)「平和な未来へ―今私たちができること」、の8つの部屋に分けられて満蒙開拓団について順を追って理解してゆけるように展示されていた。

副館長の寺沢秀文氏が私たちのために丁寧に説明くださってよく理解でき、満蒙開拓平和記念館の建つ阿智まで訪ねた甲斐があった。氏の説明は少々早口であったがそれだけに氏の私たちに伝えたい思いの量と深さを感じた。

印象が深かったのは第1室「序章―時代を知るタイムトンネル」であった。部屋というより第2室に続く通路のようであるが、通路の両脇の壁に人々が国策にのって満州に渡っていった背景が掲示されていた。何故、人々が大陸に渡り満蒙開拓に心を燃やしたのか、これまで分からない部分があった。

第 1 室の展示を見、説明を聞き、狭い日本の国土で土地を持てないでいた農家の二男坊、三男坊にとって 20 町歩の土地の地主となる上に、当時の貨幣価値で家一軒が立つという 1000 円の補助金の魅力は大きかったに違いない。「五族協和」（漢・満・蒙・朝・日が力を合わせて国を繁栄させよう）を謳う色鮮やかな満州国の国旗、墨黒々と書かれた「行け満蒙！ 行け満洲へ！ 」の移民募集のポスターは人の冒険心をそそる。

「王道楽土」（仁徳による国づくりをして理想の国を作ろう）というスローガンは、開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍の応募した若者たちが理想郷を作り上げる事業に自分の未来を重ねて心を躍らせたに違いない。私が成人していて阿智に住んでいたら心動かされたかもしれない。強い勧誘があったとしても故郷を離れる決意が固まるまではさんざん考え、その結果、国を信じて渡満を決意した満蒙開拓団や青少年義勇軍の誰が「五族協和」「王道楽土」の欺瞞を見抜けたであろう。

しかし、実は多数の農民を開拓民として満州に送り込むことで、日露戦争で日本が得た中国東北部の鉄道の権益を守り発展させると共に、ロシアとの国境地帯を防衛するという軍事的な目的もあったという。まさか鉄砲を担がせることは考えてはいなかったと思うが、送りこんだ人が多ければそれだけで国境の守りは堅固になる。旧満州国地図に書き加えられた満州開拓団の入植地は満露の国境に近い地域に偏っており、国境防衛の意図がはっきりと見てとれる。満蒙開拓青少年義勇軍を含む約 27 万人が開拓団として大陸に渡り、8 万の人が命を失ったといわれる開拓団悲劇の種は開拓民勧誘当初に既に蒔かれていたことを知った。

信じられないことだが、開拓民を責任持って守ると入植前に誓った日本軍は、ロシアが日本との不可侵条約を破ったのを知ると満露国境に開拓団の人々を残したまま密かに退却した。ロシア軍が自分たちの退却を知って一気に満州に侵攻することを恐れたのだ。この期に及んで国防を開拓団に任せたというにはあまりにもお粗末だ。壮年の男性は徴兵され残されていたのは老人と女性と子どもたちだった。

「お上の言葉」や「国策」に弱い日本人

第 2 室では、満蒙開拓団募集で上映されたという満州開拓に従事する人々の映像を見た。日本で見ることのできないような広大な開拓地を背景に満面笑顔で明るく開拓に従事する人々の表情は希望に溢れ満蒙開拓入植の当初の頃の人々の心意気が伝わる。だが、終戦間際の 1945 年春に開拓団として、青少年開拓義勇民として満州に渡った人たちがいるのだ。もしこの映像が勧誘に一役買ったとしたら悪質な詐欺でしかない。戦況が傾いているにもかかわらず開拓団や義勇軍を 1945 年の春まで送り込んだ意図は何であったのだろうか。

満蒙開拓が始まった当初、飯田下伊那地域の町村長たちが 3 週間の満州視察旅行に参加したが、このうち、一村長が開拓団の実態から疑問を持ち、村から移民を出さないことを決めたとの報告が紹介されてあった。私たち日本人は、未だ「お上の言葉」や「国策」に弱いところはないだろうか。国策反対にしろ、推進にしろ、個人として熟考して国策の裏を読みとり行動できる意志の強い国民でありたいものだ。歳を重ねても考えの浅い自分自

身を反省し、この村長を見習いたい。

第5室の「証言ーそれぞれの記憶」には胸が痛んだ。「集団自決」を決断して、幼いわが子の首を自分の手で絞めた母親の証言もあった。子どもを殺して自分の番と覚悟して振り向くとその母親の首を絞めるはずの人間が既に命を絶たれていて生き残ってしまったという。生涯悔悟の気持ちを持ち続けて生きなければならなかったであろう母親の気持ちは察するに余りある。むごい話ばかりの中に、日本人の子どもを引き取ってくれた中国人養父母が自分たちは食べずに「日本人はコメのご飯が好きだから食べさせよう」とコメのご飯を炊いてくれたという証言もあった。

中高生たちに歴史を伝えなければいけない

満蒙開拓は、現地の中国人にとっては日本人の入植によって土地を奪われ、様々な苦難を与えた側面があったとのことだ。「方正友好交流の会」を通して、黒竜省方正県には難民化し飢えと疫病によって息絶えた満蒙開拓団の人々の骨が中国政府の手によって手厚く葬られた「方正日本人公墓」があることを知った、と書いた。

第二次大戦後開かれたサンフランシスコ対日講和会議の席で、後にスリランカの初代大統領になるセイロン国全権大使ジャヤワルダナ大蔵大臣（当時）が「 Hatred ceases not by hatred, but by love 」（憎悪は憎悪によって払拭されない）という仏陀の言葉を引用して対日賠償請求権を放棄する演説を行ったということを思い出す。戦争を起こした側の日本人としてこれらの厚意にどのように応えるべきであろうか。

毎年、8月15日が近くなるにつれて戦時中の信じがたい体験や、まさに非道そのものの記録が掘り起こされ「戦争はあってはならない」という声で埋まる。しかし、最近の世界情勢から二度と戦争が起こらないと信じられるだろうか。「戦争はあってはならない」と自分の体験をもとに説得力を持って語れる世代の人々は少なくなりつつある。 戦争の資料を整理し戦争から得るものは何もないことを次世代、次々世代に語り伝える資料館・記念館の存在の必要性は増している。国も力を注ぐべきだ。

満蒙開拓平和記念館のカレンダーを開いて見ると多くの見学者が訪れているようだ。満蒙開拓平和記念館関係者の熱意によるものと思う。更に願わくば、今日が戦前にならない為にも中高生世代の若者の参観者が増え、保存されている資料をじっくり見て戦争がなぜ起こるのか、どうしたら戦争をなくすことができるのか考えてほしい。戦争で絶たれた人々の命の重さは自分自身の命と同等の重さがあったことを感じてほしい。中・高の生徒たちが授業の一環として資料館や記念館を訪れ説明を聞いて討論するというのはどうだろうか。

最後に解説下さった寺沢氏に深く感謝すると共に記念館内のカフェ・ラタンで頂いた当地産の桃のフルーツジュースが飛び切り美味しかったことを伝えたい。

（たい・みつえ：主婦業の傍ら、雲南省の少数民族の服飾文化に出会い中国文化に関心を持ち、日中文化交流市民サークル「わんりぃ」を仲間たちと立ち上げ、毎月、交流活動誌「わんりぃ」を発刊。その活動で、2017年度日中学院倉石賞を受賞した）

イスラエル建国を連想させた“満洲国”建国

―「満蒙開拓平和記念館」見学で考えたこと―

有為楠 君代

国家とは何なのか

「満蒙開拓平和記念館」のことは、随分前に耳にしたことがあります。多分、開館を伝えるニュースだったかと思います。それ以来、ずっと一度見学したいと願ってはおりましたが、機会がなく何年も過ぎてしまいました。

ところが、今回偶然に友人たちと一緒に見学できることになり、しかも希望者が、現地集合の形で十数人になったので、副館長の寺沢秀文氏に、展示品の説明をして頂けることになりました。自分達だけで見学したのでは見過ごしてしまうような点も、丁寧にご説明頂いて、とても勉強になりました。

終戦の年、昭和 20 年の 5 月になっても、まだ満州へ送り出される人々がいたと言うお話を聴き、涙が出て来て、国民にとって、国家とは何なのかと考えてしまいました。国家は国民を守るものと、無意識のうちに考えていましたが、昭和 20 年は周囲の状況を考えれば、国策とは言え、国民の為には、開拓団の派遣を見送ると言う選択肢もあった筈ですが、それは一顧だにされず、ただ計画通りに派遣が行われていったのです。担当者の目線はどこに向けられていたのでしょうか。国民でないことだけは明らかです。

イスラエル建国を連想

今回の見学で、満蒙開拓団の知識に乏しい私は、二つのことを初めて知りました。その一は、開拓団と言いながら、実際に原野を開拓しなければならなかったのは、全体の 4 割足らずで、その他の人々は、国が、その地に住む中国の人々から強制的に買い取った農地に入って農業を行う、単なる移住にすぎなかったのだと言うことです。「買い取る」と言うと聞こえは良いのですが、実際は、殆ど只同然で土地を取り上げ、小作人としてその労働力を利用したのだそうです。その事実に対する中国の人々の不満が、満州国崩壊後、引き上げる人々により一層の過酷な逃避行を強いることになりました。

満州国建国の状況は、私にイスラエル建国を連想させました。イスラエル建国の裏にある,某大国の信義にもとる振舞いはさておくとして、その建国は、そこに住む人びとのことは無視して断行されました。イスラエルは、千年を超える歴史的な自国再建の夢を、民族が団結して持ち続け、世界各地で培った経済的な実力を背景に列強を動かして実現させた自分たちの国ですから、短期間でしっかりした基礎を築いてしまいましたが、それでも未だに地域の紛争の種になっています。結果こそ異なりますが、建国の強引さは、満州国のそれと一脈通じるところがあるように思います。

もう一つこの見学で知り得たことは、単に私が無知であったと言うだけで、周知の事実なのかもしれませんが、昭和20年5月に送り込まれた開拓団は、ソ連との国境に近い原野に入植させられたと言う事実です。この年の2月に、ソ連が、日ソ中立条約の期限延長を拒否していて、今後ソ連がどう出るのか、充分予測可能な情勢で、その上に根こそぎ動員で、青・壮年男子を取り上げて、老人と女子供だけを残す結果になったのですから、植民とは名ばかりで、殆ど棄民に等しい暴挙でした。

開拓民は人間の盾！

この時期に、この場所に送り出された開拓団の目的は何だったのでしょうか？　当事者の方々を苦しめるだけに終わってしまいましたが、国としては、この地に多数の日本人開拓者がいた、と言う既成事実を作りたかったのでしょうか。国境に防波堤を築き、人間の盾を置きたかったのかもしれません。しかし、次に打った矛盾する施策で、何の意味も持たなくなってしまいました。

ここで、侵攻して来たソ連軍の暴虐非道が人々を更に苦しめたようです。ソ連の参戦や、侵攻の開始時期など、様々な疑義があるようですが、乏しい私の知識では、あまり取り上げられる機会はなかったように感じます。日本の狂気で始まった戦争ですが、参戦して来たソ連軍にも、戦争がもたらす狂気が蔓延していたとしても不思議はありません。客観的に見れば、道義的にも、国際法上も問題が多い事例のようですが、被害者としての日本は、殆ど問題にされませんでした。戦争に負けると言うことは、こういうことなのでしょう。

この「人間の盾」と言う言葉、最近の中東紛争で良く耳にします。現在は、兵器の機能が向上し、敵の戦闘力を殲滅させるために、ピンポイントで攻撃が可能だけれども、戦闘員が一般市民の中に入り込んで、一般人を盾にして後ろに隠れるので、撃つに撃てないとの話を聞いて、随分卑怯なことをするものだと憤りを感じました。しかし、満州国でこのような政策をとったと言うことは、圧倒的なソ連軍の侵攻には何の役にも立ちませんでしたが、根にある考え方は中東紛争の「人間の盾」と同じだと気が付きました。日本人には、アラブ紛争における「人間の盾」を卑怯だと非難する資格がありませんね。

神風特攻と自爆テロ

8月は戦争終結の月ですから、各メディアが競って戦争のことを取り上げた番組を放送していましたが、その中で目に付いたのが、敵艦に体当り攻撃をする神風特攻隊が、少しでも敵艦への損傷を大きくするために、機体の外側にも爆弾を括りつけて出発する様子でした。古めかしい写真でしたが、当時の実際の写真なのか、手を加えた写真なのか、説明はありませんでした。それでも出陣を控えた緊迫感が伝わって来ました。

この映像を見て、初めて、神風特攻と自爆テロの根っこが同じであることに気が付きました。自爆テロとは、イスラムの人達がその信仰によって導かれた極端な行動であり、我々一般の人間には考えられないことだ、と単純に片づけていましたが、太平洋戦争における

日本軍の作戦を知ると、決してそうではないことがよく分かりました。敵対する、勢力の劣る方が、局面を打開するのに使う常套手段なのかもしれません。

戦争の非情さ

戦争とか紛争とかいう状況には、人間を狂気に駆り立てる何かがあるのでしょうか？初めは冷静に練った作戦でも、勝てばもっと進みたくなり、負ければ負けたで、挽回するために無理な方法を考え出し、深入りしていきます。作戦を練る人々は机の上だけを見ているので、現場の苦境は分かりません。時には、想像力があり、思い遣る能力のある人もいますが、目的遂行のためには思い遣りなど不要だと言う雰囲気になり、思っても言いだすことが出来ない状況が作られていきます。これが戦争の恐ろしい処なのでしょう。

指揮を執る人の間にこんな空気が蔓延すると、厳しい作戦、惨い命令が下され、命令を受けた人間は、人間性を捨てなければ生きていけない状況に追い込まれて行きます。通常の世の中では出来ないような酷いことをし、惨いことがやり返されて戦争が続くのです。しかし戦争が終われば、戦時中の自分の行動を思い出して、心を痛め、思い悩み、残りの人生を辛い気持ちで過ごす人々もでてくるのです。これも又、戦争の非情でしょう。

戦争は、いろいろな悲劇を生み出します。戦闘に参加して、命を失う人、負傷する人、大切な人を失う人、物を失う人、機会を失う人、心を失う人、心を壊してしまう人、等々。連鎖的に悲劇が広がっていきます。

戦争の悲劇を回避するためには、戦争の実際、戦争の結末、戦争の後遺症などがしっかりと検証できる、この「満蒙開拓平和記念館」のような施設が、重要な役割を担っていると考えます。私たち見学者も、その感想を一人でも多くの人に語って、見学することを勧める責任があるように感じました。

（ういくす・きみよ：1939 年生まれ。定年退職後の 2000 年ごろから中国人の友人の会社を手伝い、通算５年ほど北京で暮らす）

方正日本人公墓の前で思う

―公墓訪問の経緯について―

野村 正彦

知らなかった方正のこと

我々は、東京のある大学で中国を中心に日本・アジアの歴史を勉強したゼミナールの有志が集まって 10 年前から、勉強会や手作りの中国歴史探訪旅行をしているグループであります。今年で勉強会 32 回、旅行は毎年 10 名前後で９回目となりました。中国旅行は、西域を除くほぼ主要地域を巡りました。今回の旅行は８年前に訪れた中国東北地方を再度訪問しようとのことで、企画したわけであります。

前回は大連・旅順・瀋陽・長春・ハルビン各市内だけでしたので、ハルビン市を基点としてさらに遠方まで足を延ばして訪問することにし、７月 23 日から 31 日までの８泊９日の旅行でした。

旅行企画幹事の話では、まず内モンゴル自治区のハイラル・ノモンハン・満州里を訪れ、ハルビンに戻ってから、方正県・ジャムス・阿城市・７３１部隊跡・安重根義士記念館などを訪れることとなっていました。参加者のほとんどは「方正」はどのような歴史があるかは知らなかったようで、事前説明を受けて「方正」訪問の意味がやっと理解できたようです。幹事の話では前回中国東北三省を訪問した時の企画立案時に『観光コースでない「満州」』（小林慶二著　高文研出版）という本を読んで初めてここ方正で敗戦直後何が起こったかを知ったそうです。しかしその時の旅行は駆け足旅行だったので、スケジュールには入れられず次回訪問を期していた、とのことでした。

公墓の前で思うこと

我々は朝８時にハルビンをマイクロバスにて出発、一直線に走る高速道路をひた走りに走り方正県を目指しました。事前説明では、日本人公墓には入ることは出来ないとのことでしたが、到着してみると係員が待っておりまして、入園することが出来ました。旅行ガイドがあらかじめ特別許可をとってくれたのだそうです。但し、中での写真撮影は禁止とのことでした。入り口には「中日友好園林」と書かれた石碑があり、公墓建設に協力した人々の名前が列記されておりました。公墓は丸いお墓が２つあり、石碑も立っておりました。さらに残留孤児の養父母のお墓と名前の書かれた看板、陳列館などがあり、敗戦後心ある日本人が訪れ、地元中国人と一緒にここで亡くなった数千人の英霊を供養し、園林の維持・管理に協力し続けていることがわかり、将来に亘ってこの歴史事実を伝えていこうとする労力に頭が下がる思いでありました.

この公墓は 1963 年、方正県に残留した日本婦人の願いを受けた県政府が、どうしたも

のかと省政府にお伺いを立て、それが省政府から北京の中央政府へ行き、周恩来総理が許可して建立されたそうです。

長谷川テルの墓も参拝

方正日本人公墓を後にした我々は、さらに東にあるジャムス（佳木斯）へ向い、そこで一泊し、翌日はジャムスにある「長谷川テル」夫妻のお墓に詣でました。長谷川テルは国際反戦活動家として、中国人の夫と共に中国で日本の軍人に反戦平和のラジオ放送をして、日本では「国賊」と罵られた人であり、エスペランティストでもあり、我々は勉強会でもテーマとして取り上げたことがあります。ハルビンに戻った我々は、最後の日にはハルビン近郊の「阿城市」を訪問、満州国阿城県副県長（実質は県長）として当地で阿城県に善政と改革を施し、日中両国の人々から慕われましたが、敗戦直後中国八路軍に捕らわれ死刑となった「岸要五郎」最期の場所に詣でました。「王道楽土」という偽りのお上からのかけ声ではなく、庶民の立場に立った本物の「王道楽土」を満洲の地で創り上げようと献身的に努力した人でありました。

最後に、我々は若い時代に歴史を学んだお蔭で、すでに 70 歳を超えてはいるものの、恩師から受けた薫陶を忘れず、いまだに勉強を続けている仲間であります。とかく毎日の生活の中で、比較的大きな歴史の中に埋没されがちな歴史をも忘れることなく、心にしっかりと刻みながら大切にしていきたいものだと思っております。

改めて方正県日本人公墓に無念の涙で眠っている多くの日本人の方々に心よりのご冥福をお祈りいたしまして、つたない小文を擱筆いたします。

（のむら：まさひこ：1941 年、山口県山口市生まれ。大学では中国近代史を専攻。現在、仲間と中国探訪旅行を楽しむ）

方正で過ごした 3 日間

伊藤 洋平

私は、2012 年 9 月から 2013 年 7 月まで公益社団法人日中友好協会の公費留学生として北京に留学していました。中国語を学ぶために中国に行ったことから、旅行に行くときには必ず中国人の友人がいるところにすることに決めていました。そんな折、日本にいるときに知り合った友人が中国に帰っていると知り、その友人を訪ねたところ、その友人はなんと方正県の人だったのです。今回は、少し前の話になりますが、2013 年 5 月にハルビン経由で方正県に行った時のことをお伝えしたいと思います。

中国人の友人との出会い

まずは、中国人の友人との出会いについてお話ししたいと思います。話は 9 年前の 2008 年になります。私は大学の第二外国語で中国語を専攻し、中国語を話せるようになりたいと思っていました。中国語検定 3 級を取得していましたが、周りに中国人の友人はおらず、知り合いをつくりたいと思っていました。そんな中、アルバイトの休憩時間に昼食を食べに行ったお店にいたのが彼女でした。ネームプレートと言葉の様子から中国人ではないかと思い、手紙を渡して連絡先を交換したのが始まりです。その後は、お互いつたない中国語と日本語でスカイプを通して何回か会話や文字でのやりとりをしました。しかし、私が就職してからは疎遠になってしまい、連絡は長いこと取っていませんでした。再び連絡を取ったのは、留学をして少し経って中国語が話せるようになってからです。中国に留学していることを伝えると、彼女はすでに中国に戻ってきていて、方正に住んでいるということでした。当時、恥ずかしながら方正のことは全く知りませんでしたが、せっかくの機会なので、会いに行こうと思い、高速鉄道に乗って行きました。私は、その 3 か月前に氷のイルミネーションを見にハルビンには行っていたのですが、その頃彼女とは連絡を取っておらず、2 度目のハルビン訪問になりました。

ハルビン駅での数年ぶりの再会

彼女とはハルビン駅で待ち合わせました。数年ぶりでしたが、会うことができました。ハルビンを少し観光してから、方正にバスで移動しました。寝ていたらいつの間にか着いていたので、それほど長い時間ではなかったと思います。着くと車で男性が迎えに来てくれていました。彼女は中国に戻ってから日本語をほとんど忘れてしまったということで、私たちは中国語でコミュニケーションを取っていました。彼女からその男性を紹介されたときに言われたのは、「他是我的老公。」です。その時は、その意味が分からず、ホテルに着いてから調べてみると「夫」という意味でした。彼女はすでに結婚していたのです。そして、子どももいるということでした。美容師の免許を中国で取っていて、日本の美容院でも働いており、その経験を活かして方正県内で美容院を開業していました。当時、第二次安倍内閣が誕生して、アベノミクスということで急激に円高が進んでいました。そのため、日本で働いてもあまりメリットがなくなっていると言っていたのが印象的でした。せ

っかくなので、髪の毛を切ってもらい、夕食は友人たちも呼んでの食事でした。ハルビンのお酒ということで白酒のようなものをたくさん飲みました。

中日友好園林へ

翌日は飲みすぎで気持ち悪く、動けませんでした。私の友人は、親戚が結婚式ということで、そちらに行くということでした。「来る？」と聞かれたので、「スーツを持っていないから行けない。」と答えたら、普段着で大丈夫ということでした。中国の結婚式に行ったことがなかったので、行ってみたいと思い、行くことにしました。実際に行ってみると、ほとんどの人が普段着でした。私は突然参加することになりましたが、このようなちょっと知り合い程度の飛び入りも大丈夫なようで驚きました。ただ、二日酔いでほとんど食事は食べられませんでした。それを見た友人は、中国の食べ物が合わないのではと勘違いをしていたようですが、前日夜のお酒の影響でとも言えず、おなかがいっぱいだからと伝えていました。飛び入り参加でご祝儀も払うことなく、タダでご飯も食べさせてもらってしまっては悪いと思い、新郎新婦の写真をたくさん撮ることで少しでもお返しできればと写真ばかり撮っていました。

結婚式が終わった後には、中日友好園林（日本人公墓）に連れて行ってもらいました。尖閣問題があったため、友人は私が日本人だとわかっては危険だととても心配してくれましたが、そのような時だからこそ行っておきたいと思い、連れて行ってもらいました。周囲は全く何もなく、畑ばかりで、友人の話だとほとんど来ることはないということでしたが、日中友好を象徴する場所に行けて良かったです。この日もたくさんの友人たちと食事をし、その後はカラオケでした。

方正とのつながり

３日目は、帰る日でした。午後のバスに乗る予定だったのですが、午前中は近くのダムに釣りに行きました。私自身は釣りはせず、周りの風景を見ていたり、散歩したりと楽しんでいましたが、その時に一緒に行った人たちとの会話も面白かったです。一人はかつて日本で働いていたようなのですが、方正に戻ってからは、不動産ビジネスで 2,000 万元（約 3 億円）儲かったということでした。中国の不動産は値上がりがすごいと聞きますが、身近にその恩恵にあずかっている人の話を聞くことになるとは思いませんでした。外見からは全くお金持ちには見えない感じなので、人は見かけではわからないな～と思ったところです。

方正で過ごした３日間はあっという間で、とても楽しいものでした。友人とはその後も we chat を使って連絡を取り続けています。彼女は旦那さん、お子さんと一緒にちょっと前に日本に戻ってきて、東京に住んでいるということなので、今度会いに行きたいなと思っています。日本での偶然の出会いが方正との出会いにつながり、すごい縁だなと感じています。帰国後、方正友好交流の会があることを知り、方正つながりから興味を持つきっかけにもなりました。

帰国してからは中国に行く機会は少なくなりましたが、日本に帰ってからの方が中国への思いは強くなったと思います。私が滞在していた時はちょうどPM2.5が問題になった最初の年でした。北京の日本大使館でも空気に関する説明会が開かれるなど、注意喚起は行われていましたが、当時私の周りの中国人でマスクをしていた人は皆無でした。まちを歩いていて、マスクをしている人を見るとそれは外国人という感じで、郷に入っては郷に従えということで、マスクをするのは私もやめました。しかし、日本に帰ってみると、中国人が厳重なマスクをした様子をテレビで報道されていたようで、中国の空気は息をするのも苦しく、マスクをせずにはいられないというような印象を受けている人もいて、日本と現地とのギャップを感じたところです。

尖閣諸島の問題についても日本政府の見解に興味は示すものの、それと一般人は違うというスタンスで、一人の人間同士としての関係ができました。私は実際の中国を体験した人間としてある種の少数派になったのかもしれません。民主主義という多数決の社会の中で、少数派でいることはメリットもなく、周りに話を合わせている方が楽だと感じることもあります。しかし、たった一人の人間ですが、少数派の意見を周囲に伝えることで、周りの人たちが中国への認識の幅を少しでも広げてもらえると良いと思っています。

仕事で中国と関わることはほとんどありませんが、プライベートでは認定ＮＰＯ法人東京都日中友好協会の会員として日中友好に向けた活動に参加しています。中国に思いをもった人たちは日中国交正常化以前から関わりのある方が多く、最近は年配の方がほとんどになっている気がします。おそらく、私たちの世代とは少し思いが変わってきていて、以前のような無条件の中国愛や戦争に対する贖罪意識からの日中友好というものを考えている人たちは少ないのではないでしょうか。

私はどちらかというと、留学でお世話になった中国への感謝の気持ちをもとに活動をしていますが、それだけでは同じ世代を巻き込むのは難しいなと感じてきています。友好という漠然とした目標を掲げるのではなく、中国語の勉強、文化、スポーツ、音楽、経済などといったそれぞれの分野で、関わる人にメリットのあるような活動を増やして、その結果友好が達成される。そのようなパイプを増やしていくことが大切なのではないかと考えているところです。方正というのも一つの大きなパイプで、中国の中でこれほど日本と縁が深く、日本人になじみがあり、公的にも認められている場所は少ないのではないかと思います。方正という場所をきっかけとして、多くの人が集い、交流が拡大していくことが日中両国にとって良いと思います。

「方正」について私の提案

本来であれば、ここで筆を置くのが普通なのかもしれませんが、せっかくの機会なので、自分に何ができるかを考えてみました。

１．方正歴史勉強会

日中の歴史認識の違いの問題はずっと続いています。日本と中国の歴史認識を少しでも近づけることが必要ではないでしょうか。そういった点から、方正について詳しい方にお話をいただき、若い世代が聞くという会ができると良いと思いました。私は話はできませ

んが、話をする場づくりと、少ないかもしれませんが話を聞いてみたいという同世代に声をかけることはできると思います。

２．方正人交流会

日本にいる方正人との交流会の実施です。私の知っている方正人は友人とその旦那さんとお子さんの３人なので、現状では３人との交流になってしまいますが、最初は小さな交流でも始められればなと思います。

私がやってみたいこと、できそうなことをベースに２つを挙げてみました。方正の訪問記を書く機会をいただいたことから大きく脱線してしまいましたが、このような活動を通して、方正とのきずなを強め、将来にわたって継続した交流を続けることができるようになると良いなと思いました。みなさん、ぜひ一緒に交流の輪を広げませんか。

釣りをした近くのダム

結婚式の様子（みんな普段着）

（いとうようへい：1983 年生まれ。2012 年から 2013 年にかけて公益社団法人日中友好協会公費留学生として北京の中国政法大学へ留学。帰国後民間企業を経て現在、㈱みんなのまちづくり代表取締役。認定ＮＰＯ法人東京都日中友好協会会員）

「平和の時代のベチューイン」藤原長作と「旅日僑郷」方正県を訪ねて

拓殖大学国際学部教授　岡田　実

■はじめに

今年の夏頃、北京大学に留学されている山口直樹さんが 2008 年に立ち上げられた「北京日本人学術交流会」が、2017 年 10 月でいよいよ 300 回を迎えられるという朗報をいただいた。年間約 30 回、月 2～3 回のペースで毎回講師を招き、10 年近く続けられてこられた快挙である。

筆者は、国際協力機構（JICA）中国事務所に勤務していた 2011 年 6 月、山口さんから誘われ、同会の発足三周年記念の集まりで「日中関係と ODA～なぜ日本は対中政府開発援助を開始したのか？」と題した報告を行う機会があった。

報告を終えて、山口さんから、「この報告のなかで私にとって特に印象深かったのは、岡田氏が、ODA を経済や貿易の問題から説き起こしながら、さらに日中両国の戦後処理の問題として悲しみや癒しの共有、戦争の記憶化、記念化といったところまで踏み込んでいたところであった。」との核心をついたコメントをいただいた。「感謝する、しない」のレベルで水掛け論に陥っていた対中援助の問題を、戦後処理、日中和解プロセスの角度からも考えるべきというのが私のメッセ―ジの一つだったからである。

それから 6 年余りの歳月が流れ、今年 2017 年の夏、改めて「日中両国の戦後処理の問題として悲しみや癒しの共有、戦争の記憶化、記念化」を考える機会を得た。

2009 年に公開された羽田澄子監督「嗚呼　満蒙開拓団」は、筆者にとって衝撃的な映画であった。そしていつかこの映画の舞台となった方正県を訪れたいという思いは、ようやく今年 2017 年 8 月に、方正友好交流の会の大類事務局長のご支援により実現した。また現地では、方正県人民政府外事僑務弁公室の張紅麗女士にご案内いただくなど、方正県側のバックアップをいただいた。映画の主題となった方正地区日本人公墓に加え、まだ人民公社が残っていた 1980 年代初頭から方正地区の農村に住んで稲作技術協力のボランティアを行い多大な成果をあげてきた岩手県沢内村の農民・藤原長作氏（以下、藤原と略称）の記念碑や、藤原の功績を展示する博物館・展示館なども見学する機会を得たことは、極めて貴重であった。

本稿では、方正友好交流の会及び方正県関係者への御礼も込めて、藤原による稲作技術協力を中心に、現地での見聞を報告させていただきたい。

■日中開発協力史の中の藤原長作

今回筆者が方正県に向かった主な目的は、研究課題として取り組んでいる日中開発協力史の事例として、日本と歴史的因縁が深い東北地区において、改革開放初期にど

のように日中協力が展開されたのか、藤原の足跡をたどることであった。

李海訓氏の研究（李海訓『中国北方における稲作と日本の稲作技術』東京大学社会科学研究所、2014 年 3 月）によれば、黒龍江省における日本の稲作技術の展示・伝播は 3 つのルートがあったという。すなわち、個人レベルで行われた方正県における藤原長作と、海倫県における原正市による畑苗育苗技術、及び政府レベルで行われた三江平原における竜頭橋モデル地区事業である。

藤原長作自身は黒龍江省でのみ稲作技術協力を行い、訪中回数も 1981 年を皮切りに 80 年代前半を中心とした 6 回程度にとどまっている。後述のとおり省内及び全国への技術普及は、藤原が育てたカウンターパートたちが担ってきた。

他方、原正市は 1982 年からの 17 年間で合計 49 回もの訪中を行い、中国滞在日数は 1,686 日に及び、3 市 24 省（区）の 214 市県を巡回するなど、自らが精力的に全国をかけ回った。その結果、李海訓氏によれば、中国においては原の方が藤原より全国的に知名度が高くなったようで、1990 年に国家友誼奨を受賞した原は、1998 年 11 月の江沢民訪中の際に、他の農業専門家とともに北海道で江沢民と面会する栄誉も得ている（藤原は同年 8 月没）。

しかしながら、今回現地を訪問してみて、藤原が行った仕事は、改革開放への転換点という時代背景に加え、方正県という、日中関係史において特別な意味を持つ地域が舞台であったこと、さらに藤原自身が貧農の出身であり、小学校を出てすぐ農業に従事したという異色の専門家であったことなど、日中開発協力史の中で異彩を放つ存在であったとの感を強く持った。以下順に説明していこう。

■方正県に残された藤原長作氏の足跡

方正県内で現在でも確認することができる、藤原の功績を「記憶化、記念化」している施設として以下のものがある。

➢ 藤原長作記念碑

藤原長作記念碑は、日中友好園林内に「中国方正県人民政府」と「日本国岩手県澤内村」の共同名義で 2004 年 9 月に建立された。碑文には以下のとおり記されている。

> 藤原長作（1912 年 12 月 3 日－1998 年 8 月 7 日）、日本国岩手県沢内村出身。1981 年から 1998 年まで、古希の年を以って中日友好事業に身をささげ、前後 6 回、自分から望んで、自費で方正に来訪し、無償で寒地水稲乾育栽培技術を伝授し、方正県ないし全中国の水稲生産技術革新に突出した貢献をし、方正県と日本国との科技交流の成功モデルとなった。その後、沢内村村長太田祖電の推薦を経て、佐々木寛、有馬富男が方正で水稲超稀植試験を進め、藤原長作水稲栽培技術をさらに豊富に発展させた。藤原長作には「方正県栄誉公民」が授与され、黒龍江省科技貢献奨、中国国際合作奨を獲得した。

「中日友好園林」内に建立された藤原長作氏の記念碑

記念碑の碑文

➢　方正水稲研究院

方正のインターチェンジを降り、市街地に向かうと、左手に「方正水稲研究院（以下「研究院」）の文字がひときわ目立つガラス張りのモダンな建物が目に入る。

研究院の研究内容は、①水稲新品種試験、②水稲ハイテク栽培技術試験、③水田生産精準化作業、情報化管理であり、研究院の周辺にはハイテク技術試験モデル園区（200 ムー）がある。ここでは、水稲新品種試験（70 ムー）、水稲ハイテク栽培技術試験（130 ムー）、さらに水稲智能化管理などの高度な研究が行われている。

研究院側の説明を聞くと、門外漢の筆者の想像を超える中国農業のハイテク化に驚かされる。説明展示には、「智恵農業」をスローガンに、ビッグデーター、インターネット、可視化プラットフォームなどといったハイテク用語が並び、実際に人工衛星、無人飛行機、ドローン、地上のモニターカメラなどによって膨大な情報が収集・分析されるリモートセンシング技術が駆使されているようだ。病虫害専門家診断では、農民はスマホにより直接研究所の専門家とやりとりをして、対策のコンサルテーションを受けている。

また、「方正農村産権交易服務中心」が研究所内に設置され、農地の権利の交易がおこなわれていた。「現代農業総合改革」をスローガンに、耕作権の流動化、工業化と都市化、さらに方正大米の産業化といった課題が研究されている由であった。

こうした一連の展示の中で、方正の水稲発展の歴史において、1981 年から「日本農民専門家藤原長作先生の寒地水稲乾育稀植栽培技術」が導入されたことが位置づけられていた（写真）。

「方正水稲研究院」の外観

農民はスマホで直接研究員に相談できる

稲作発展史の展示に登場する藤原長作氏

ハイテクを駆使した「智慧農業」を展開

➢ 方正稲作博物館

中国で初めてとなる稲作博物館が、2011 年、方正県に開館している。

博物館の入り口に掲げられた「前言」では、藤原の業績を、日本語で以下のとおり説明している。

> 1981 年に日本の水稲専門家藤原長作先生と一緒に「寒地水稲乾育栽培技術」の試験に成功した。水稲の単位面積産量は 200 キロから 500 キロに上がった。1988 年 11 月に、この技術は「中国科学技術進歩賞」の二等賞を獲得した。1989 年に、中国科学技術委員会はこの技術を重要な普及プロジェクトに列した。「八五（第 11 次五ヵ年計画）」期間、全国の栽培面積は 2.3 億ムーに達し、平均単位面積産量は 84.63 キロで、152.7 億キロの籾も増産した。これは寒地水稲乾育栽培技術に新紀元を開き、国家糧食安全の保障にも大きな貢献をした。

また、展示スペースにおいても、「藤原長作と寒地水稲乾育栽培技術」というこのテーマを詳しく説明する大型パネルを設置し（写真）、藤原の来華以後の協力過程と増産過程が、写真入りでつぶさに説明されている。

また、方正農業発展の歴史的段階を示すパネルは、「原始篇」「初級篇」「変革篇」「貢献篇（伝播篇）」「現代篇」と区分けしているが、藤原が協力した時代は「変革篇」として描かれている。

2011 年に開館した「方正稲作博物館」の外観

「藤原長作氏と寒地水稲乾育稀植技術」の展示

➢ 「稲之道」（藤原氏展示館）

方正県徳善郷徳善村にある「稲之道」という稲作の展示館を案内いただいた。ここには、方正県の稲作の歴史や商品の展示以外は、ほとんど藤原氏の技術指導時の農村での写真や、李鵬総理、王震副総理との接見、引進国外智力領導小組、農業部、方正県などからの表彰場面の写真であった。さらに何と藤原氏が実際に使った食器や麦わら帽子などの生活物品までが保存・展示されていることに驚かされた。

「稲之道」（藤原氏展示館）の外観

1980 年代方正県科学技術委員会試験小組と藤原

藤原の当時の生活用品が展示

李鵬総理から表彰を受ける藤原

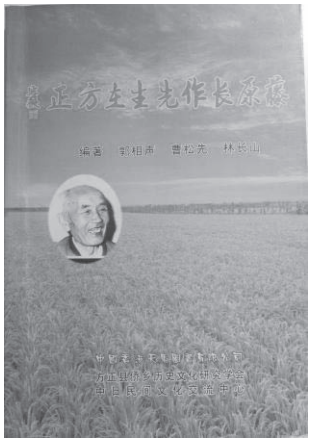
➢ 藤原が寄宿した富余村の杜萌武家

1981 年 4 月に藤原が最初に方正県に着任した際、県政府が準備したのは県の招待所であった。これに対し藤原は、「私のことを気遣って大事にしていただくのは、とてもありがたいども、わたしは百姓をしにきたのです。泥まみれになりにきたのです。こんな立派な招待所さ入っていては、百姓はできない。だから、生産大隊の誰かの家さ、泊まり込めるようにしていただきたい」と申し出たという（及川和男『米に生きた男』249 頁）。

最初は戸惑った県政府であったが、藤原の決意が固いことから宿舎探しを始める。白羽の矢があたったのは、杜萌武氏であった。1980 年代は農村の大部分は藁ぶきの家であり、当時富余村の最もよい三間の家は杜萌武の家であった。日本人を「日本鬼子」とみていた彼は最初は拒絶したが、政府が状況を説明したことによりようやく藤原を受け入れたのである（郭相声他『藤原長作先生在方正』21 頁）。

そうした経緯のある杜萌武氏宅がまだ現存しているとの話を聞き、富余村まで案内していただいた。地元の方々に案内していただきたどり着いたのが写真の家である。既に空き家になっていたが、1981 年当時、藤原氏がここで中国の農民にお世話になりながら稲作技術協力の日々を送ったことを想起すると、感慨深いものがあった。

藤原が寄宿した富余村の杜萌武家



2012 年出版の「藤原長作先生在方正」

➢　中国側作家による藤原氏評伝『藤原長作先生在方正』（2012 年 10 月出版）

筆者の最大の関心である藤原についての文献としては、これまで、日本で出版された及川和男『米に生きた男　日中友好水稲王＝藤原長作』、そしてこの本をベースとした大類善啓「水稲王　藤原長作物語　中国の大地に根づいた日中友好の絆」『風雪に耐えた『中国の日本人公墓』ハルビン市方正県物語』があった。
今回、張紅麗女士の計らいで、幸運にも以下の文献を入手できた。

郭相声・曹松先・林長山編著『藤原長作先生在方正』中国香港天馬図書有限公司出版、2012 年 10 月

中国側が執筆した 277 頁に及ぶ上記評伝は、中国側の視点から見た藤原が詳細描かれている点で極めて貴重である。以下、筆者が一読して興味深かった点を紹介してみよう。

■『藤原長作先生在方正』が描く藤原氏の軌跡と日中開発協力史

まず、同書の目次を以下に示すので、全体の輪郭を理解いただきたい（筆者仮訳）。

≪目次≫

はじめに—中国、日本水稲史概述
【第一編】
第 1 章　日本友好訪中団の訪中期間、藤原先生に深い考えを残した
第 2 章　藤原長作先生が自分の思いを率直に述べる
第 3 章　藤原長作先生の試験田
第 4 章　出水才見両腿泥
第 5 章　乾育稀植高産水稲は、方正人民と全省人民に希望を喚起した
小結
【第二編】
第 1 章　藤原先生は名誉を得て帰国
第 2 章　藤原先生は中国方正県を思い、忘れなかった
【第三編】
第 1 章　藤原先生の第三回目の中国方正県での稲作技術継続指導
第 2 章　寒地乾育稀植技術の第二の成果
第 3 章　藤原先生はすべてを掌握し、彼の試験田を護る
第 4 章　赤津益造先生が日友協に 1 通の手紙
第 5 章　方正県は再度高生産に勝利する
第 6 章　中日合作テレビ作品≪友誼大地≫が友誼を増進

【第四編】
第１章　藤原先生の稲作技術が方正で全面普及
第２章　日本岩手県沢内村が方正に友好訪問
第３章　方正県水稲栽培技術視察団が訪日
【第五編】
第１章　方正県の乾育稀植水稲は100万ムーを技術突破し、その後方正を出て“点火”
第２章　藤原先生の稲作革命“星火燎原”
第３章　“点火”、“焼荒”、“開花結果”
第４章　姜言易が、日本の専門家が尊敬する水稲専門家になる
第５章　劉漢学同志は、藤原先生の稲作技術を普及後、“三種技術類型”と総括
【第六編】
第１章　1987年から1994年まで、藤原先生の技術は全国に普及し、歴史上かつてなかった成果をあげた
第２章　藤原先生の稲作革命は中国の大地に喜びを伝えた
第３章　藤原先生の学生、農民水稲専門家丁佩剣が、藤原先生の技術を基礎に稲作を更新する成果を創造
【第七編】
第１章　藤原長作先生と日本の友人
第２章　藤原先生と中国農民の兄弟
第３章　藤原先生と工藤清子
第４章　生活の中の藤原先生
第５章　藤原長作先生と有馬富男先生
第６章　藤原先生、有馬先生の魂が同胞の墓とつながる
第７章　日本政府のODA援助計画
第８章　日本官方、民間の方正県訪問の簡易記録
第９章　方正県ハイレベルの訪日状況概要
【編者の言葉】

（１）中国農業発展史の中の袁隆平と藤原長作

中国・江西省出身の袁隆平は、「雑交水稲の父」と呼ばれ、中国における水稲育種のパイオニア的存在である。本書においては、「南には袁隆平、北に藤原長作がおり、南北の挟撃により、中国の農業の伝統的な稲作の歴史を変えた」と評し、藤原を袁隆平と並ぶ人物とまで高く評価している。

（２）中国側が藤原を受け入れるまでの過程－贖罪と四つの近代化への貢献

藤原が方正県に正式に赴任するのは、1981年4月の方正県人民政府からの招聘状によるものだが、招聘状が発出される背景となったのは、その前年、1980年6月に日中友好協会が派遣した「日中友好黒龍江省農業視察訪中団」への参加であった。

同訪中団来訪時、方正県政府会議室で県の歴史上初めての外国との科技交流となった「中日友好農業科技交流会」が開催された。この交流会の場では、水稲の低温冷害問題に話が集中したが、この場で藤原が報告した、水稲低温冷害を解決する研究成果について注目が集まった。

当時の方正県の単位当たり生産量は、一ムーあたり200～300斤であったが、藤原は、一ムーあたり400～500キロが可能としたのである。出席した中国関係者は、皆息を止め、お互いに疑いの目でみたという。藤原はこう続けた。

「もし皆さんが自分を歓迎してくれたら、自分の増産技術を普及させたい。技術伝授の目的は、中日両国人民の世世代代の友好と、貴国が早期に四つの近代化を促進するためである。過去、日本の軍国主義分子が中国を侵略し、多くの無辜の中国人に危害を加えた。私は当時中国にまだ来ていなかったが、日本国民として深く疼きを感じる。自分は共産党ではないが、ベチューインを知っている。彼は偉大な国際主義戦士であり、私は彼に学ばなければならない。自分が伝授する技術に報酬は要らない。日中友好の架け橋になり、自分の実際の行動を以って、中国人民に罪を償いたい。」

藤原の言葉は、「日中双方の人々を感動させ、震撼させ、十秒の沈黙後、嵐のような拍手が起こった」という。県長は手を差し出し、「尊敬する藤原先生、我々はあなたを方正に歓迎する」と述べた。そして翌年、方正県政府は、黒竜江省政府の指導の下、招請状を発出したのである。

（３）藤原を取り巻く中国の行政機関の役割と相互関係

上記のとおり、藤原は方正県政府からの招聘状に基づき訪中し活動を展開していくが、藤原が活動するにあたって様々な中国側の行政機関が関与している。それぞれの機関がどのような役割を担い、どのような関係であったのか、改革開放直後の援助受け入れ行政の観点からも興味深い。

以下、中央、省、県の各レベルでの主な関係機関を整理すると以下のとおりとなる。

【中央レベル】
国務院引進外国智力領導小組弁公室、国家外国専門家局、国家科学技術委員会、農業部、中日友好協会

【省レベル】
黒龍江省人民政府、黒龍江省科学技術委員会、黒龍江省中日友好協会、黒龍江省農業科学院、東北農学院

【県レベル】
方正県党委員会、方正県政治協商会議、方正県政府、方正県外事弁公室、方正県科学技術委員会、方正県農業局、方正県農業局農業技術ステーション

上記を見ると、主に4つの系統が相互に連携して藤原を支えていたことが分かる。

第一に、科学技術系統である。県－省－中央と、一貫して科学技術委員会が実質的なイニシアティブを握り、主管部門として以下の関連系統と連携していたことが見て取れる。

第二に、農業系統である。方正県の農業局及びその下の農業技術ステーションが藤原の実質的なカウンターパートとなり、また農業科学院、東北農学院などの研究教育機関が、普及・教育面で関与していた。

第三に、外事系統である。日本との対外関係は、日中友好協会－外事弁公室のラインが機能していた。藤原の中国との接点は日中友好協会であり、窓口として機能していた。

第四に、外国智力導入系統である。国家外国専門家局は、外国智力導入を統括するユニークな機関であり、外国専門家の功績を管理し、顕彰する機能も有している。国務院引進外国智力領導小組弁公室は、国家指導者がトップとなるこの分野における最高調整機関であるが、国家外国専門家局が事務局機能を担っていた。

（４）試点と漸進主義

中国における改革の進め方の特徴として、まず「試点」を作り、そこでの成功体験を徐々に広めていくという「漸進主義」が挙げられるが、藤原の技術協力展開においてもこの方式が採られていた。

藤原を受け入れるにあたって、現地の農民が最も懸念したことは、試験が失敗した場合の損失であった。県の科技委は、もし試験に失敗したら、同等の水稲の産量を賠償すると約束することによって、ようやく農民との合意を得ることができていた。

この117ムーの「試点」において、1981年度、ムーあたり680斤という、従来の方式に比べ倍以上の収穫が得られたことが確認されると、翌年、方正県は試験田を拡大し、外に向けて普及していく計画を立てる。朝暘人民公社富余大隊では試験田面積を600ムーに拡大し、1ムーあたり1000斤を計画した。藤原は24の試験スポットの技術指導工作を担当し、試験範囲は、朝暘人民公社を越え、宝興、紅旗、天門、伊漢通、会発の6公社、13大隊、25生産小隊、試験面積4,556ムーに及んだ。

さらに1984年の新春になると、県委、県政府は「1984年から開始し、3年間で方正の1万ムーで、ムーあたり1000斤の重点試験を行う」計画を策定する。1年目は準備、2年目は集中実施、3年目に成果を確認するという計画である。この計画は、省

科技委が立案し、農科院と農学院が専門家を提供し、方正県が組織指導をするとの体制を整えた。

加えて 1984 年春、方正県は専門家を集め、約 1 ヵ月で藤原の稲作技術システムを総括し、『寒地水稲乾育稀植高産栽培技術』を執筆編集して、1 万冊を印刷するなど、ステップバイステップで藤原が伝えた技術を普及していったのである。

（５）宣伝工作と≪友誼大地≫

藤原の活動についてテレビ番組が制作されている。1982 年、日中友好協会の赤津益造副会長は、黒龍江省中日友好協会会長にテレビ作品を撮影するアイデアを提出する。この提案を黒龍江省は重視し、黒龍江省テレビ局と省委宣伝部などがチームを編成して、1983 年 2 月中旬、中日両国のテレビメディアが≪友誼大地≫撮影チームを方正県に派遣して撮影したことが記されている。

1983 年制作のこの番組が保存されていれば、貴重な資料となる。当時の関係者からの情報提供をお待ちする次第である。

（６）草の根技術交流の開始―方正県と岩手県沢内村

藤原の訪中をきっかけに、方正県と藤原の出身地である岩手県沢内村の交流が 1983 年から始まる。1983 年 7 月、沢内村から方正県への第一次友好訪問が行われた。これは前年 1982 年 12 月、黒龍江省科技委の張副主任が訪日した際、岩手県沢内村まで出向き、藤原に加えて太田祖電村長らと会談し、その際太田村長の方正県訪問の打診があったことが契機となったものである。

太田らが方正県滞在中に出席した座談会では、沢内村議会会長が牛の種を改良した経験や豚の冷凍精液で人工授精する技術などを紹介したが、この会議の最後に、方正県から 1 名の農業技術員、1 名の畜産技術人材と 2 名の医療人材を沢内村に派遣し研修させることで合意した。これは未だ改革開放が始まったばかりの時代背景を考えると、極めてユニークであったと言えよう。

（７）稲作革命の「星火燎原」―方正県による国内稲作技術合作の展開

藤原が伝えた水稲乾育稀植技術は、最初のステップとしては、方正県から陝西省や内蒙古自治区、河北省への広がりを見せる。その過程を見ていこう。

1986 年 1 月、中共黒龍江省委員会、黒龍江省政府は、方正県政府を 1985 年度「農業技術拡大先進県」に奨励した。同年 2 月、方正県と黒龍江省科技協会が組織した水稲乾育稀植諮詢サービス小組が陝西省、内蒙古自治区等で諮詢サービスを行うと同時に、7 つの試験地点を視察した。これは方正県が派遣した農民技術員が、初めて省外で水稲乾育稀植を技術指導した事例となった。

1989 年、方正県は河北省の試験地点でも成功をおさめ、河北省全体を揺るがすこととなった。河北省科技委は、1990 年に試験地点の面積を広げることをアピールした。1990 年 1 月には、唐山市で全省の培訓班が実施されたが、会場に入りきらないほどの人が集まったという。

1989 年秋には、西部地区の新疆ウイグル自治区が方正県を視察し、技術指導を要請した。1990 年初め、方正県は人民代表大会主任、科技委主任らを新疆に派遣し培訓班、試験点を実施した。彼らの努力により、新疆地区の特色に適応した水稲乾育稀植高産栽培技術が形成された。さらに 1990 年には、河南省原陽県からの技術導入依頼があり、1991 年に培訓班、1992 年に大面積の試験と普及が進み、方正県からは 17 名の農民技術員が 17 の地点で技術指導を行った。

このように数年で、方正県の乾育稀植技術は全国に普及し、中国の水稲栽培は新しい水準に達して、巨大な効率と利益を創造したと評価されている。このことは鄧小平の「科学技術は第一の生産力」という主張を証明したものとも解されている。

（８）藤原の若き後継者たち

前述のとおり、藤原は原正市と異なり、自ら方正県以外で稲作技術協力を積極的に展開することはなかった。しかし、方正県の増産成功により、同技術の成功経験を他の地域へ普及することは、自ずと方正県の重要な任務となっていった。またこのことは方正県の栄誉でもあったのである。

方正県委、県政府は、藤原の成果を全国に普及することを決定し、1984 年から 1993 年まで、方正県は毎年百名余りの水稲技術員を県外に派遣し、技術を伝えていく。

例えば、典型的な農民技術員である王志林は、1987 年から 1993 年まで、チチハル、内蒙古、河南省で技術を普及した。丁佩剣は 1981 年に藤原と出会い、藤原を師とした農民学生であるが、1992 年、県科技委は彼を貴州省に派遣し、苗族、イ族などの少数民族地区で協力を行わせた。少数民族地区で言葉が通じないため、現地の科技委は 2 名の大学生を通訳として派遣したという。

また、藤原の技術は、「革命老区」大別山にも伝わった。大別山は貧困地区で農民の生活は苦しく、方正県は藤原の技術を革命老区の人民に贈ることを決定したのである。1992 年、それまで 8 年余り外で農業指導をしてきた高連喜を安徽省の大別山のふもとの村へ派遣し、高は苦労の結果、増産に成功し、現地の最高記録を残している。

こうした事例は枚挙に暇がなく、方正県の水稲技術員が短期間で藤原の技術を吸収し、全国の貧困地区に赴いて藤原から伝授された技術を着実に普及していったことは、特筆すべきであろう。

（９）“寒地型”から“暖地応用寒地型”“暖地型”へ

劉漢学氏は、1965 年に東北農学院を卒業し、方正県科技委副主任を歴任したが、80

年代に藤原の技術を全国に普及した代表的人物である。

劉は、20 年余りの稲作研究の中で藤原の稲作革新の基礎を継承し、改善したが、劉はその過程で、条件が異なる各地のニーズに基づいて、藤原の“寒地型”技術が“暖地応用寒地型”、さらに“暖地型”に変化していったと総括している。

1982 年から 1986 年の 5 年間、藤原の技術は方正県から黒龍江省全体の大地に適用されていったが、これは北方寒冷地区の水稲技術を形成した。その後、1986 年に最初に技術幹部と農民技術員が陝西省と内蒙古に派遣されたが、ここでは“寒地型”を応用した試験を行い、現地の気候・土壌条件に合わせ改良した“暖地応用寒地型”のひな形となった。

1989 年 8 月、国家科技委は赤峰で“三北”地区技術普及現場会を開催し、これにより“三北”地区で技術が広範に普及応用され、その後、南の河南、湖北、四川、安徽など、典型的な温暖湿潤地区にも展開していくが、ここは二期作地帯で、北方と全く条件が異なっており、完全な“暖地応用寒地型”技術が形成していくことになる。

こうして南方の広大な温暖湿潤地区で藤原の技術を普及する過程で、さらに応用して“暖地型”技術を形成されていったのである。

（１０）日中戦争の傷跡と日中技術協力

藤原氏が寄宿した富余村の杜萌武家については既に触れたが、同書の中に日中戦争の傷跡に関して概要次のような記述がある。

「当時の中国は貧しく、村落の大部分は草木で作った家であった。藤原先生は外国専門家であったが、彼は何度も、自分に高い待遇を与えるな、私は農民である、中国では私も（人民公）社員だと。

しかし方正の人々は申し訳なく思い、萌武新が建てた、富余村でただ一つ 3 間ある草と泥の構造の家に藤原を住まわせた。家の主は、偽満州時代、“勤労奉仕” 隊として、日本人が作った飛行場に派遣され、日本鬼子の欺きと侮蔑を受けたことがあった。そのため最初は日本人が住むことを快く思わなかった。

朱科技委副主任は、この日本人は当時の日本人と同じでない、彼は日本の水稲専門家で、方正に稲作技術を伝授するために来た良い日本人だ、彼はお金もとらず技術を伝授すると言っている、彼は殺人と放火の贖罪に来た、と説得し、納得させた。

当時の村の書記は、藤原先生を迎えるための準備で、前の晩眠れなかった。多くの村民は、藤原先生に対しいろんな言い方があった。友好的でない言論を恐れた。

当日 9 時、全村民が日本の客人を迎えた。省科技委も同行しており、挨拶すると、全村民が拍手で日本の友人と省の指導者を歓迎した。言葉は通じなかったが、藤原先生の笑顔と表情が、彼の内心の感激を表していた。

杜は忘れられない思いを語る。偽満州時代、日本人が飛行場を建設し、鉱山を開発したが、中国人が住んだところは犬小屋、豚小屋のようなところだった。日本人が一番で、二番は漢奸と二鬼子（朝鮮人）であった。たくさんの人間が亡くなった。

家の前に住んでいた張家の奥さんは、開拓団の残した残留婦人であった。藤原先生はこの状況を知って、自発的にお見舞いに行った。日本語を交わし、気持ちは感動していた。老張夫人は涙を流していた・・・」

一方、既述のとおり藤原の稲作技術協力を戦争の贖罪ととらえる記述は本書の中に多く見られることに加え、藤原を、「平和の時代のベチューイン」と高く評価している記述も見られる。

「毛沢東が高く称賛したベチューインの国際主義精神は、今も中国人民の心の中に永遠に刻まれているが、数十年の時を隔て、日本の平和の使者として、藤原長作先生が、報恩、贖罪と無私の貢献の気持ちを以って、万里の海を越え、自らの一生の研究成果を中国の農業に捧げた。この老人は、平和の時代のベチューインであり、中国人民の尊重と追想を受け、彼も中国人民の心の中に刻まれた偉大な歴史的人物である。」（編者の言葉より筆者一部要約）

■日中の狭間に揺れる「日中友好交流の聖地」

こうした“美談”が方正県と日本の関係の基調となっている一方、方正県の中日友好園林をめぐっては、方正県を“漢奸県”と誹謗し、一部の活動家が日本人公墓をペンキで「碑文字損壊」するという事件が 2011 年に発生している。
この事件をめぐっては、同書において以下のように記している。

「あるネット民が無責任に方正県を“漢奸県”としたが、これはまったくの笑い話で、外国人の笑いものにされるところであった。“漢奸県”は、方正人民の心を傷つけ、これはいささか中国人の愚昧さと無知でもあった。」
「方正県の 7 月 28 日は 1 年 1 度の“蓮花節”で、≪日本開拓団民亡者録≫はまず日本のネットから発出され、国内で騒ぎになった。“方正県政府は、商売と資本誘致のため、媚日行動を進めている”と定義した。この定義が全国の真相を知らない国民とネット民の騒ぎを掻き立て、県外に出た庶民も、身分証によりホテルの受け入れを拒絶されたりした。こうした笑い話は、真に人を泣くに泣けず、笑うに笑えない状況にした。しかしどうしようもない。」
「開拓団は、日本の戦争の埋葬品であり、侵略集団に付属しているとしても、彼らは日本政府の棄民である。こうした亡民と日本の戦犯の名簿の区別はないのか？自分は、≪日本開拓団民亡者録≫の措置は賢い行いであり、中国の大地に戦争を警示し、中日人民を平和に向かわせる警示の碑であると認識している。」
「この本は、“漢奸県”で起きた、日本人の物語である。どれほどの社会効果があるか筆者には予測がつかないが、藤原精神を弘揚させることは、中国作家の良心であり、歴史的責任であると考える。」（編者の言葉より筆者一部要約）

ここまで記してきたように、方正では日中双方の草の根の人々の努力により、様々な「悲しみや癒しの共有、戦争の記憶化、記念化」がはかられ、藤原の貢献も広い意味でこの努力に列せられると考えられるが、一方で、政治外交の大きなうねりの中、方正は日中の狭間に揺れ動いているように見える。

こうした方正を目の当たりにすると、現下の厳しい日中関係の中で、改めて日中和解に向けた道筋のヒントを得たような気がした。

筆者は2014年から大学で教鞭を取る機会を得たが、今年の1年生は1998年生まれであり、「戦争の記憶」はますます遠いものとなっていることを日々実感させられる。筆者が東京で参加している日中関係促進を目的とした民間諸団体でも、若者をどう取り込んでいくか、日中関係に関心を持ってもらうかが一大課題となっているように見える。

NPO法人「日中未来の会」代表の南村志郎氏（元西園寺公一秘書）は、1956年の初訪中以降、今日までの約60年間一貫して日中関係に携わっておられるが、南村氏は1960年代初め、中国の指導者の一人が日本からの訪中団との会談で「加害者（日本）は過去を忘れまいとし、被害者（中国）が忘れようとすれば将来の日中は明るい」と話したことを忘れられないとしばしば述べている。

筆者は、具体的にそれがどのような場面だったのか気になっていたが、先般、日中文化交流協会機関紙「日中文化交流」第859号（2017年10月1日）を読んで詳細が明らかになった。以下1965年2月1日同紙第90号より「再録」された亀井勝一郎「梅花ひらく」の一部を引用する。

> 私は1960年はじめて中国を訪問したが、そのとき陳毅副総理から言われた次の言葉を忘れることができない。
>
> 「我々は過去のことを忘れたい、忘れようと言っている。あなた方は忘れないと言う。そこではじめて両国民のあいだのほんとうの会話が成立するでしょう。そうです。我々が永久に日本を恨み、あなた方日本人が我が国に与えが損傷をあっさり忘れるとしたら、両国はいつまでたっても友好関係に入ることはできません。」
>
> 両国民の交流の上でのこれが根本原則である。

また亀井は、「自分で自覚しないでおちいっている植民地根性への抵抗力」と「明治以来の日本人に甚だかけていたアジア人としての連帯感」がこれからの日本にとって二つの大きな使命であると指摘した上で、「そのためには日中文化交流の上でも、あらゆる団体を通じて、今後は更に多くの青年諸君が参加することが望ましい。また中国の歴史や現状に詳しい人々は、その知識を何よりもまず青年のために提供してほ

しい。二十年、三十年、あるいは百年後の日本と日本人のことを考えながら日中文化交流のために前進しよう。」と主張している。

今から50年以上前に書かれた亀井の主張は、今日でも、いや今日の状況に照らすとますますその輝きを増しているのではないかという気がしてならない。筆者自身を含むシニア世代は、日々学びつつも、自らの経験と知識をできるだけ多くの日中の若者に伝えていく努力をすること、そのことは今後一層重要になるであろう。

本稿がその一助になれば、誠に幸いである。

（本稿は、「北京日本人学術交流会」300回記念誌に寄せたメッセージを一部使用しています。）

記録映画『葛根廟事件の証言』が完成した

大島 満吉

はじめに

旧満州で起きた様々な事件の中で、ソ連軍による民間人の虐殺はこの葛根廟事件が最大と云えます。この事件は、終戦前日の８月 14 日に事件は起きました。場所は満州国の西側にある興安南省興安街です。住民約 1300 人が、ソ連の開戦を知って避難行動を開始したのですが大惨事となりました。

省都である興安街には興安総省の公署、旗（県相当）を治める旗公署、警察署、病院、学校、農事試験場、生活必需品倉庫、蒙民厚生会など主要な役所が揃っている所でした。郊外には東京荏原郷開拓団が約 800 名、帰流河佛立開拓団（哈拉黒ともいう）も約 600 名いました。

軍の関係では特務機関・五三部隊・軍官学校（陸軍興安学校）・憲兵隊、満州国軍第二師の部隊などが興安街にありました。

８月９日未明、ソ連の宣戦布告が発せられると、日本の軍隊は極秘裏に撤退を開始していました。しかし市民は知らされず、移動を知った人でも戦闘開始による日本軍の行動である、と誰しも思って当然でした。

10 日にはソ連の偵察機が興安の上空に現れたのですが、市民にそれほど逼迫感はありませんでした。興安の街には盤石の関東軍が控えていたからです。ところが早くもソ連の空軍による爆撃があり、街は一変しました。役所の指示で市民は二分され、西地区に住む約半分の 1400 名は高綱信次郎協和会副長の指揮により扎賚（ジャライ）特旗（次頁の地図、参照）に向かうべく避難団が行動を開始します。

東半分の住民である約 1300 名は、旗公署の浅野参事官の指揮のもと同じくジャライ特旗に向かう事になりました。高綱隊はトラック輸送と列車の利用が叶い、混乱はあったもののほぼ計画通りに進みました。残る浅野隊は列車も無く、トラックどころか馬車さえもない状態におかれました。

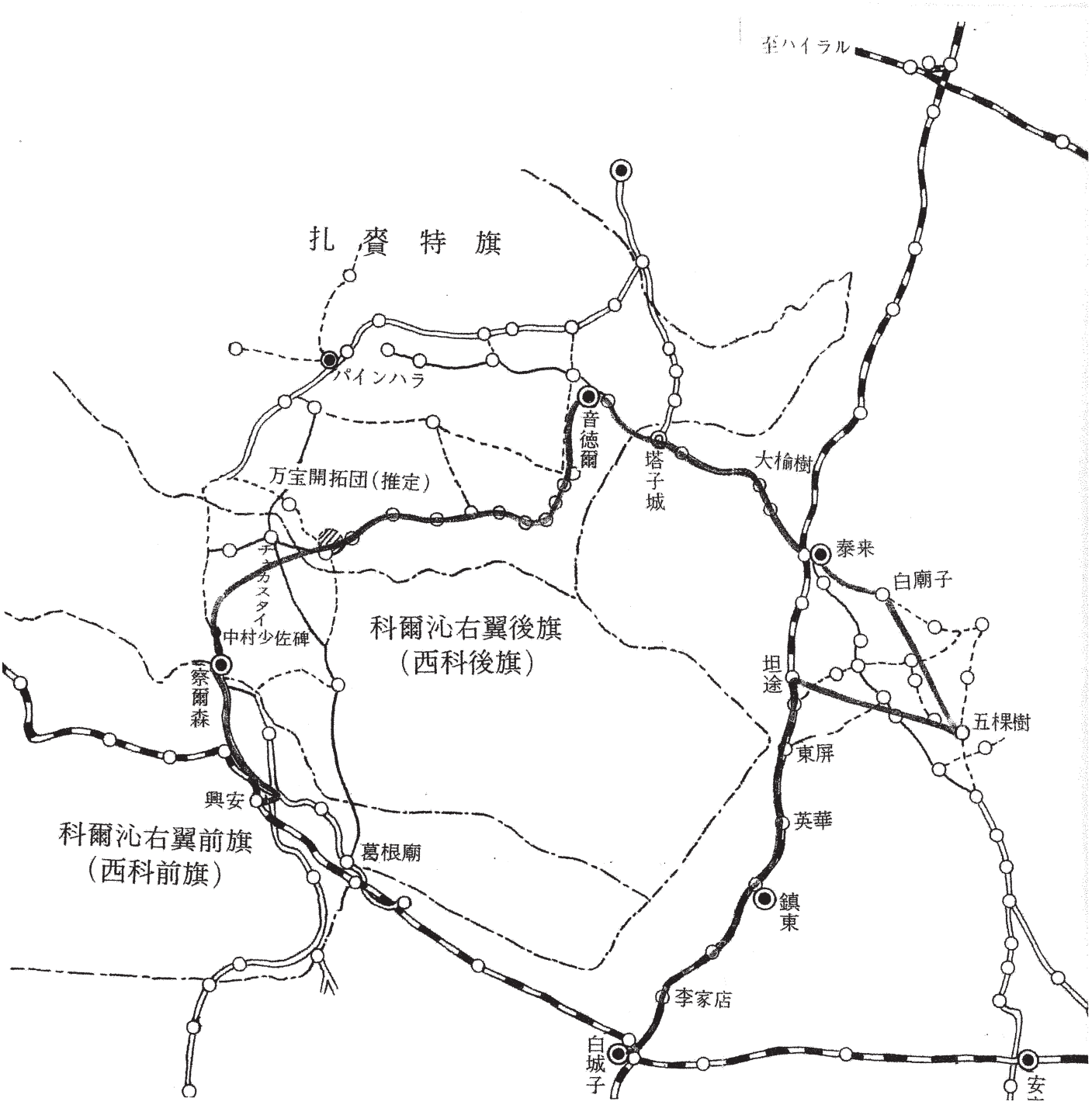
ここまでの前段は映画の中に入っていません。ここまでは当時の概況です。11 日になって浅野隊は行動を起こします。ここから映画は始まります。

制作者は 43 歳の田上龍一さん

映画を制作したのは戦後生まれ、43 歳の田上龍一さんです。映画を作るのは初めてだそうです。田上さんは報道機関で仕事をしている映像ディレクターです。

この映画を撮ろうとしたきっかけは、新聞報道に出ていた小さな記事でした。「葛根廟事件の証言　草原の惨劇・平和への祈り」という冊子が作られたという内容でした。

葛根廟事件とはどんな事件なのか全く知らない出来事です。田上さんは、1000 人が帰らぬ人となったソ連軍の虐殺とはどんな内容なのか知りたくなったのです。


至ハイラル
扎賚特旗
パインハラ
音徳爾
塔子城
大榆樹
万宝開拓団(推定)
泰来
白廟子
中村少佐碑
科爾沁右翼後旗
(西科後旗)
察爾森
坦途
五棵樹
東屏
興安
英華
科爾沁右翼前旗
(西科前旗)
葛根廟
鎮東
李家店
白城子
安

発行元の興安街命日会の代表である私（大島）に問い合わせがあり、2015 年７月に問題の葛根廟を訪れる訪中団が結成される事を知ったのです。これはグッドタイミング、もしかすると自分がやりたいと思っていたドキュメンタリー映画を創れるかもしれないと、この時すぐに決意したそうです。

写経をする大櫛戊辰（つちや）さん

事件のあった８月 14 日は、葛根廟事件の命日として毎年、東京目黒の五百羅漢寺にて慰霊祭が行われます。高齢の為に上京が叶わなくなった大櫛さんの魂の写経から映画は始ります。365 日の日付を入れて書き上げ、それを羅漢寺に送り届けようとするものです。

大櫛さんは当時 17 歳、映画が完成する 2017 年には 89 歳、事件を語れる唯一の社会人です。当時、電信電話局に勤めていました。

爆撃を受けて電話局が通信不能になる場面、徒歩で避難する人たちが集結する場面、数少ない男子としての警護役、戦車隊に襲われて逃げ場を失う場面、遂に最期か・・・故郷や肉親の姿が浮かぶ。映画は、生き残った時の状況が一度に出るのではなく、他の人の証言と交互に出て来るのです。

白濱真砂子さんの証言

次は興安総省の参与官であった白濱晴澄氏の長女である真砂子さんの証言です。当時は女子大の学生でした。参与官とは行政の日本人最高責任者です。現在の内蒙古自治区全体の総責任者の立場でした。

ソ連との開戦の一報が早朝に入った時から緊迫した時間が流れます。白濱さんの父は公署へ出掛け、家族８人の避難行動が事細かく語られて行きます。役所ではトラック１台が用意され、モンゴル人の最高責任者である博彦満都・省長の一家と共に葛根廟へ向かった様子を語っています。

参与官の父とは役所の前で別れたのが永遠の別れとなりました。葛根廟から日本人の乗る避難列車に乗ることが出来たものの、その必死の行動は正しく戦乱下の証言です。

一般に高級幹部は先に避難したような言われ方が多いですが、白濱さんの家では父を失い幼い弟妹３人が日本に帰国後に栄養失調で次々に斃れた様子を語って、風聞とは違う現実を強調しています。

伏見恵子さんの証言

次に出て来る伏見恵子さんは当時女学校の一年生でした。今の中学一年生のことです。夏休みを興安の実家で過ごし、少し早目でしたが学校の準備で新京（長春）の借家まで母と共に来ている時でした。開戦の事を聞き、母は父のいる興安に帰ろうと言うのを恵子さんは「私も女学生だから学徒としての勤めを果たす方を優先したい」と母と別れて新京に残ったのが永遠の別れになってしまった事を述べています。責任感旺盛な軍国少女だったのです。

毎年慰霊祭に奉納する千羽鶴を今日も手折る姿は特に印象的です。

父の最期を見たと云うお手紙には、銃撃によって体は蜂の巣のように穴が開いていた・・・と。新京で別れた母も興安には戻れず、行方不明の状態です。三人の家族がバラバラの状態で今日を迎えた運命を証言しています。

私、大島満吉の体験

この拙文の筆者の大島は国民学校４年生の体験です。隣組の中に兵隊の宿舎があり、鉄砲の扱い方を教えてくれた話、興安の街が空襲を受けた様子、リヤカーに荷物を積んで避難を開始する状況、愛犬の「チビ」を連れての行動、戦車が見えた時の様子、銃撃を免れたものの死者が多く、父や兄も見つからない中で負傷者に水をやる母の姿などを克明に話します。

夕刻になり、生きている人がいない中で遂に母は決意します。もう自分達も行く処が無い。３人の子を抱えた母は絶望のあまり、３歳の美津子を借りた刀で手に懸けてしまいました。「死にたくない」と私は、後ずさりしてその場から離れます。追い込まれていた母の気持ちを思うと今でも胸が張り裂けそうです。

藤原作弥さんの体験

藤原さんは、父親が軍官学校の文官教授であった関係から、軍の情報を得て軍の家族と共に列車で避難する事ができました。「できた」と言っても列車に乗れたという意味だけで、その後の逃避行は皆と同じで浮浪児体験もしました。

後年になってこの事件を聞き、同級生の多くも犠牲になった事を知りました。自分だけが生き残ったという贖罪意識から満州や命日会に携わるようになりました。

藤原さんはかつて時事通信社の解説委員長もやり、日銀副総裁も務めた人です。田上さんが映画を撮りたいと参加した訪中団に藤原さんも参加していました。

佐藤雅寛さんの体験

佐藤さんは当時３年生で父が警察官でした。一緒に行動していたのですが、父親は警護の役目もあり、佐藤さんの家族と一緒にはなれませんでした。戦車の襲撃からは逃れられたのですが、戦車が去った後の生き残りは女子供しか見当たりません。それでも何人かが集まり、白城市を目指して逃げるのですが、頼りになる人はいません。

大人たちは死を覚悟して水の中に入りました。浅くて死ぬ事はできなかったのですが、その後の逃避行が大変でした。地元民に追われた時に佐藤さんが反抗的な言葉を発したと、手にしていた刀剣のようなもので頭と背中を切られた痕を見せます。

夜の逃避行で銃声に驚き、背を低くして行動するうちに母と妹とはぐれてしまいました。自分は何とか帰国出来たのに、途中まで一緒だった母と妹の消息は遂に掴めない状況です。

高田京子さんの体験

高田さんは白阿線の終点にあたる阿爾山から列車で南下し、省都である興安街に下車してしまいました。父が経営する興安ホテルの従業員たちと一緒に避難するつもりでした。

父とは合流できないまま、後続の列車が来ないと知り、日本人最後の避難団である浅野隊に組み入れ行動を開始しました。

結果は葛根廟事件に遭遇し、従兄弟は銃弾に当たり手当が出来ず犠牲になりました。弟は牛車に乗せられて居たのですが、犠牲者の下で生きのびる幸運を得ました。その場を脱出したものの、食糧も無く安全な場所もありません。トウモロコシ畑に身を隠しながら数日を過ごし、白城子方面に向かいました。日本に帰国出来たのは半数に減っていました。

残留孤児・石田たか子さんの証言

石田さんは当時５歳、弟は３歳でした。父は召集されて母が幼い子３人を連れて避難しました。

戦車が去ったあとの周辺は死人ばかりでした。役所の指示かもしれませんが、母は毒薬を子供達にも与えて自分も飲んでしまいました。石田さんはこれを飲むと死ぬと思い、自分で口から出すと弟の口からも指を入れて出させました。母と妹はその場で死んでしまいました。

石田さんは蒙古人に助けられましたが、成人してからの結婚生活は、望むような結果ではなく苦労が絶えませんでした。日本に帰国してからは皆さんの手助けで安心して暮らせるようになりました。「今が一番幸せです」とのことでした。

たどたどしい日本語で語る帰国孤児の証言は身につまされるものがあります。

残留孤児・依田照子さんの証言

依田さんは一年生に入学したばかりでした。父親は召集されており、母は四人の子供を連れていました。戦車が来た時、依田さんはランドセル一つ背負い走って逃げました。

その一瞬の違いで自分は生き残りましたが親を見失った依田さんは、大人を探してついて行くしかなかったのです。大人はいつも危険にさらされていました。依田さんの場合は親切な中国人に助けらましたが、多くの女性は生きて行くのが大変でした。

今でも依田さんは自分が日本人なのか中国人なのか、世の中の人の見方次第で立場が変わります。依田さんの娘も日本人でありながら中国人にさせられる。親子の分断も悲しい現実だと思うのです。

慰霊の旅に参加した遺族

遺族の一人、青木浩さんはこの旅行団に加わって現地での慰霊を実現させました。実父の姓は傍士であり、青木さんは幼児の時に母のもとで育てられました。５歳の頃、父に呼ばれて対面しました。その頃は、父だと云う認識ではなく、ただの小父さんだったと思っていたようですが、その時の１枚の写真だけが親子の絆としての証拠になりました。

その写真を持参し、地に伏して当時を偲ぶ青木さんの姿は真に迫ります。一緒に暮らした思い出はありませんが、肉親の情愛は 80 歳になっても変わらないのです。

傍士家の家族５人がこの地で亡くなり、血筋を引くものは自分１人である事が悲しい。

ウユンと呼ばれた孤児

もう一人の残留孤児は烏雲と書いてウユンと読む日本名・立花珠美さんです。事件の時は１年生、家族６人が避難の為に興安の駅に着きました。列車に乗る寸前に、出張していた父の正市さんが出張先から帰途にある事を知りました。５人の子を連れた母は一人では限界であり父との合流を望んで列車に乗らず、父を待つ事にしました。

結果は列車が興安まで来る事が出来ないと判明し、最後の日本人避難団である浅野隊に加わって避難するしかなかったのです。

５年生の長女の力を借りても下の子４人を連れた母は大変でした。戦車が来た時、姉は一人で走って逃げました。ウユンさんは怖くて母の側にいつもつかまっていました。小さい二人の子は馬車に乗せられていたので一緒ではありませんでした。

戦車が去った後、母は絶望して抱えていた一番小さい弟を短刀で刺し、自分も切りつけていました。ウユンさんは驚いてその場から離れました。しかし行くところが無いので戻ると、母は未だ息をしていました。母はウユンさんに袋から出した写真とおカネをウユンさんに持たせ「父を探しなさい」言いつつ息が切れてしまいました。

ウユンさんは父の名と母の名と自分の名を一生懸命に繰り返して忘れないようにしました。姉も死んでいました。家族５人で生きている人は、ウユンさんだけになっていました。

しかしウユンさんは、残留孤児でありながら中国の国会議員になった人です。またコルチン沙漠を緑化すべく植樹活動を展開し、日本中を動かした女性であります。

胸に迫る証言者の言葉

大島・高田・佐藤さんと三人の残留孤児たちはいずれも小さい時の体験なので、事件の全体像は語れません。しかし、生き残った証言を出来る最後の世代であり、戦争の証言としては 21 世紀最後の証言映画となるかも知れないのです。

映画は、ゆふいん文化・記録映画祭　2017／6 月　**第 10 回松川賞**の受賞作品となり、続いて公益社団法人映像文化製作者連盟が主催する「映文連アワード 2017」において**企画特別賞の受賞**作品**となりました。**

映画の公開方法は９月現在、まだ決まっていません。2018 年には一般公開できるルートができる事を願っています。当面の連絡先は以下の大島満吉宅ですのでご一報ください。

〒178－0065　東京都練馬区西大泉５－６－８　電話０３－３９２４－７７６４

（おおしま・まんきち：1935（昭和 10）年生まれ、群馬県出身。1946 年、満洲より日本に引揚げる。東京の家電会社を定年退職し、現在興安街命日会代表。著書「流れ星のかなた」ほか私製本多数）

映画「葛根廟事件の証言」を制作して

田上 龍一

戦後 70 年を経てなお、多くの人が知らない事実がある――

生存者は百数十人

太平洋戦争が終結する前日の昭和 20（1945）年８月 14 日、旧満州（現中国東北部）から引揚げ避難中の日本人の一団が、ラマ教寺院葛根廟（内モンゴル自治区）付近で旧ソ連軍の戦車隊の襲撃にあい、1,000 人以上が死亡した。生存者は百数十人にすぎないとされ、犠牲者の多くは女性と子供だった。この「葛根廟事件」は、日本敗戦の混乱時に満州で日本人が遭遇した惨劇の中でも、最も犠牲者の多いものだったといわれている。「星火方正」の読者には事件をご存じの方は多いと思われるが、一般的にはそれほど認知されていないのではなかろうか。

あの日、満州で何があったのか。筆者は生存者や関係者のインタビューで構成したドキュメンタリー映画「葛根廟事件の証言」を制作した。今年５月に完成し、複数の映画祭に出品している。６月に大分県の「ゆふいん文化・記録映画祭」で第 10 回松川賞を受賞し、11 月下旬には映像文化製作者連盟主催の「映文連アワード２０１７」で企画特別賞を受賞することが決まっている。今後上映してもらえる劇場や団体を探す計画だ。

事件を知った小さな新聞記事

この度、方正友好交流の会から映画についてアピールする機会を頂戴した。無名の映画に対する厚遇に感謝申し上げるとともに、筆者がどうしてこの映画をつくろうと思ったのか、振り返りたい。

2014 年の夏に目にした小さな新聞記事がきっかけだった。それは葛根廟事件に関する証言集の上梓を知らせる記事で、筆者は初めて事件のことを知り、同時に満州について何も知らない自分の無知を恥じた。

他の太平洋戦争の悲劇に比べて、満州に関しては、ノンフィクション、フィクションともに、これまで伝えられる機会が少なかったように思う。昭和 20 年当時、満州には約１５５万人の日本人が居留し、ソ連侵攻後は、１５５万通りの辛苦があり、地獄があったはずなのに、同じ日本人であるはずの筆者は、そのうちのひとつも知らない――。筆者のように満州についてほとんど知らない人は、同世代や次の世代にたくさんいるだろう。

関連書籍に何冊か触れた後、筆者は満州とりわけ葛根廟事件のことをもっと多くの人に知ってほしいと思うようになった。

体験者の最高齢は 89 歳だった

2015 年 6 月末に撮影を開始し、2016 年 10 月までに計 11 組 12 人に取材した。インタビューに応じて下さった方のうち、最高齢は大正 15 年生まれの方で取材当時 89 歳。最年少は昭和 15 年生まれの方で同 75 歳。戦争体験を話せる人たちが高齢化し、その声を伝えるのが日々難しくなっている。そんな中、このような機会を得られたことはとても幸運だった。インタビューに応じて下さった方たちは、ある人は声を振り絞るように、ある人は記憶の糸をたぐり寄せるように思い出しながら辛い経験や思いを語って下さった。語り部たちと間近に接し、その体験を聞き、そしてそれを記録し伝えることが光栄であると実感する日々だった。

また、関係者による慰霊の旅へも同行した。筆者の訪中は初めてだった。瀋陽から夜行列車でウランホト市に向かう途中、明け方に見た広大な草原の風景の美しさが忘れられない。葛根廟や事件現場付近も撮影したが、70 年以上前にあれほど凄惨な出来事があったとは思えないくらいの緑が鮮やかな景色で、ひっそりした静寂に包まれていた。

映画では、証言者の語りの背景に、犠牲者の声なき声が響くようにつくることを目指した。観ている人が、証言者から直接話を聞いているような気持ちになってほしい。戦争に無関心な人が、先の戦争について興味をもち、自ら知ろうとするきっかけにこの映画がなることを願っている。

赤星月人「葛根廟事件邦人遭難の図」 天恩山五百羅漢寺所蔵

（たのうえ・りゅういち：1974 年、大阪府で生まれる。映像ディレクターとして活動中。映画制作は今回の作品が初めてである。現在、東京都在住）

私を動かす大きな力

―中国残留孤児問題への取り組み、その一年をふりかえる―

中島 幼八

私だけでなく、中国残留孤児の体験を持つどの人も中国に足を向けて寝られない気持ちを強く持っていると思う。とりわけ近年、日中の国民感情が極めて悪化するなかで、中国を曲解する言論には黙って見過ごすわけにはいかない。意地でも、加害者側の私たちに命を与えてくれた中国人養父母の心情をかばいたくなる。

あの戦争で祖国に見捨てられた私たちにとって、中国こそ自分たちを育んでくれた故郷である。従って、この歳になると、ひと一倍ふるさとや育ての親を思い、感謝しているのだ。この一年をふりかえる時、それが私を動かす大きな力であった。

会場を埋め尽くした人々

昨年 10 月に中国残留孤児問題フォーラムを立ち上げ、江戸東京博物館の会場を埋め尽くし、中国人養父母への感謝で 650 名の来場者から共鳴を受けた。その第二弾として、今年４月の清明節にハルビンにある日本 731 部隊罪状陳列館において犠牲者への追悼を行い、そこに常設の事務所がある養父母連絡会に協力を得て、養父母や中国在住の元孤児たちと交流を行った。その取り組みについて、本誌の前号に紹介したように、２つの訪中団の参加者にとって感動と学習の連続であった。

その体験を自分たちのものにとどめず、報告会という形で広く伝えようと、9 月 17 日にまた江戸東京博物館において、謝恩と巡礼の訪中報告会を開いた。あいにく、18 号台風が東京地域を通過する日であったにも拘わらず、150 席しかない会場を 167 名の来場者で埋めた。午前に 731 部隊の真相を紹介した写真展に合わせ、部隊員の証言や被害者の訴えを紹介したビデオを上映した。

午後には、ハルビンの追悼会で掲げた「反対戦争　熱愛平和」（元孤児葛西泰男氏揮毫）の横幕をかざして、元孤児二人の進行で報告会の幕を開けた。VTR で訪中の様子が紹介されたあと、「二つの祖国」などの歌唱、石垣島から駆けつけた訪中者による中国抗日運動を伝えるスピーチにつづき、女性訪中者三人によるトークで養母と対面したときの感動、および残留孤児の体験や歴史が熱く語られた。

さらに、後半の講演では 731 部隊の遺跡に見る数々の犯罪行為、平頂山事件における日本軍の虐殺行為などがある一方、それら加害責任に対し、中国側が一貫して寛大な対応で臨み、撫順戦犯管理所の存在や残留孤児たちへの救助などがその裏付けとして紹介された。

質疑の時間では活発な発言が相次いだが、とくに帰国者三世の来場者が自分の祖母と母親が受けた苦労を涙で訴え、会場がしんとなり、深い感銘が流れた。終了後のアンケート

は 80 通も寄せられた。「歴史の事実を知った」、「中国人養父母へ感謝」「残留孤児の生の声を聞き、真の姿をこの目で知った」など、真実への志向が強く反映されるものであった。

たかが報告会に過ぎなかったが、これを可能にしたのは一般募集で参加した、いわばツアー客たちの努力であった。旅行中、食卓ではいつもなにかの問題について、喧々がくがくに議論を展開した人々が、この報告会のために自ら主催者に成り変わって、準備を進めた。当日、会場の設営・照明や受付から、登壇する司会・講演・スピーチ・トークに至るまですべて参加者の手によるものであった。考え方が全然違う者同士が一緒に取り組んだことに大きな特徴があったし、今後の取り組みになにかを示唆するように思われた。

帰国者教育に携わった先生たち

この一年をふりかえる場合、どうしても自画自賛になりがちであるが、ご容赦いただきたい。その事例をさらに２つ記したい。

１０月中旬に都内の夜間中学の教師たちの集まりがあった。これまで学校では帰国者の教育に携わった先生たちであるが、東京都夜間中学校研究会引揚者教育研究部という組織であった。当初、夜間中学に帰国者がずいぶんいたが、いまは激減しているようだ。これまで多くの帰国者がお世話になっていることは私もかねてから知っていた。今回日中友好協会東京都連合会の紹介で直接その教育者たちに体験を話す機会を得た。私もあらためて感謝の気持ちを持って臨んだ。日頃先生方は帰国者から様々な体験を聞いておられると思うが、私の体験は取り立てて新しいものはないと判断した。重点的に終戦直後の情勢や開拓団全体の状況を話した。帰国者はあの戦争では被害も受けたが、その前に加害者側であったことへの反省をも強調した。

また戦後 70 年の首相談話にもふれた。それには残留孤児を取り上げたが、しかし政府としての反省もなければ、感謝も述べてないので評価できない、と。さすがに教師であるだけに熱心に聞いてくださった。ある先生はいまでも自分のクラスに 61 歳の二世がいて、一所懸命日本語を勉強していると話してくれた。

中国残留孤児や婦人の問題を振り返るときに、数え切れないほどボランティアの役割が大きかったと認識している。それらを歴史の記録に特筆すべきであると常々考えてきたが、また今回の機会で学校教育の教師たちについても決して無視できない存在であると認識を新たにした。

雲南市での平和講演会

さて、島根県の雲南市は日中関係者の間でも意外に知られていない。３万人の街であるが、縁があって地元の戦没者遺族会訪中団に便乗して昨年一緒に方正を訪れた。帰国後、拙著「この生あるは」を大量に普及していただき、そして私の体験談を聞くという平和講演会を開いてくださった。

雲南市は平和宣言した街で、三刀屋（みとや）町に永井隆平和記念館もある。大東町戦没者遺族会

（難波幸夫会長）が主催する平和講演会は10回目を迎える。そのほか毎年平和展も行っている。その意味でかなり異色な遺族会である。

前回の平和講演会は地元の引揚者である毛利悦子さん（元教師）の講演を行ったとのこと。敗戦時に内蒙古から引き揚げる途中、苦しいところで地元村民の大八車に乗せられて一命救われたという体験、私が聞いても新鮮で胸にじんとくるものがある。そして今回は私の、また中国の話である。しかし、よく聞いてみると関係者たちの親はほとんどフィリピンで戦死されたようである。やや不思議に思われた。

当日会場に入ったら、これまで経験したことのない雰囲気が感じられた。体育館の２階にもうけられた会場にびっしり埋められ、前の方に半分ほどは小学生で、後ろは大人たちが占めていた。ちょうどステージの脇の壁に「温故知新」の大きな額がかかっていたので、思わず冒頭からその言葉から説き始めた。喋っている内に生徒たちの目つきや大人たちの動きがビンビン私に伝わってくる。それにつられて、だんだん熱を上げて、マイクをそっちのけにして、身体が前のめりになって喋りまくった。

残留孤児を判断するときに腕にある天然痘の注射跡を見るんだよ、と言ったら、生徒たちはみな自分の腕をまくったりする。私が16歳で帰国できたのも、そのきっかけを作ってくれたのは、梁先生という恩師からの働きかけがあった、先生の言うことをよく聞くことが大事だよとか、説教めいたことも訴えた。生徒たちの反応はすべて私に届いていた。

質疑では引揚げ経験を有する方が数人ご自分の体験を披露された。なかには木次（きすき）から来られたという 95 歳の少年義勇隊の経験者が、下半身マヒにも拘わらず自ら車を運転して、松葉杖で階段を上がってこられ、朗々と体験を語った。しかも私と同じ寧安にいたとは驚いた。無事に帰られたかなと心配して電話したところ、「畑に出ている」と家族の方が言う。まさに戦争経験者の真骨頂と感心したのである。

そのほか準備にあたった難波会長は過労で倒れる寸前だったようだ。そのエネルギッシュな姿を見るにつけ、不思議と力が伝わってくる。引揚者二世でもある藤井勤副市長が開会の冒頭に挨拶されたあと、夜の懇親会にも顔を出され、雲南市はたたら製鉄の発祥地だと誇らしげに語った。また松江からも「撫順の奇蹟を引き継ぐ会」の活動をばりばりしている女性２人が見えた。ここでも新しい人脈ができて、また楽しからずや、と疲れも忘れるほどだった。

（なかじま・ようはち：1942 年、東京の三田で生まれる。東京都派遣の満州開拓団に家族と一緒に満州へ。敗戦時は３歳。幾多の辛酸を舐め、1958 年帰国。日中友好運動に参加し、通訳として活動する。著書『この生あるは』発売元・亜東書店）

2017年10月18日付、山陰中央新報

元中国残留孤児の中島さん平和訴え

雲南で講演

第2次世界大戦後に中国残留孤児として生活し、帰国後に日本語・中国語の通訳として日中交流に尽力した中島幼八さん(75)＝東京都世田谷区在住＝を招いた平和講演会が17日、雲南市内であった。他国との友好関係や戦争のない平和な国づくりの大切さを訴えた。

中島さんは1歳で旧満州に渡り、終戦直前の3歳の時に旧ソ連が侵攻し、収容所に入れられた。寒さと飢えで、実母が中国人の行商人に「育ててくれる人がいたら預けてほしい」と託し、青年期まで中国の養父母に大切に育てられた。

当時の体験を振り返り「多くの残留孤児が中国人の養父母に助けられた」と感謝し、「これからも当時の生活を伝えながら、平和がいかに大切かを訴えたい」と話した。

大東小学校6年の上代小建太君(12)は「貴重な経験を聞けた。戦争からたくさん学ぶことがあると思った」と話した。

平和講演会は、雲南市の大東町戦没者遺族会（難波幸夫会長）が戦争体験者らを招いて2008年から毎年開いている。240人が耳を傾けた。

（奥原祥平）

中央真ん中にいるのが中島幼八さん

元残留孤児の近野省三さんも会場より発言、注目された

忘れられない“満洲”の思い出

―残留孤児フォーラムに参加して―

大津 弘子

はじめに

私は中国残留孤児ではないのですが、この会に出てみたいなア・・・妙に懐かしさを感じました。満鉄社員であった父から、シヘイガイ（四平街？　私の生まれたところらしい？）、ハルピン、奉天，大連等、幼い耳にしみ込んでいたのかもしれません。

満鉄病院で生まれた私は、母の病気のため、院内隔離という状態で、母乳にもありつけず、1年4か月にわたり、看護婦さんがくれる、真っ黒なパトローゲンを哺乳瓶からおいしそうに飲んで、すくすくとたくましく育っていったようです。父は仕事の帰りにそっと様子を見に来ると、中国人の患者さんの間をバレーボールのように、手から手に渡り、やがてベッドの上に転がって、笑っていたそうです。安静を要する患者さんも、へとへとになるまで遊んでくれたそうです。満鉄病院は幼い私にとっては、パラダイスのような楽しいところだったのでしょう。パトローゲンのお陰で足が異常に強く、最後に住んだ大連の大きな通りの、凍てつく寒さの中、シューバ（毛皮のコート）を着て、毎朝クーニャンと1時間に及ぶ散歩が大好きな子供に成長していったそうです。

そういう私の原点ゆえでしょうか。ハルビンという懐かしい響きに誘われたのでしょうか？　この大陸に生を受け、大連の港から日本の下関港に無事到着するまでの数年のエピソードを、後年父の思い出話を交えて、三つだけ書こうと思います。

乗客を乗せずに霧の中に消えていった亜細亜号事件

日本から宮様　政治家、新聞記者、その他、もろもろのおつきの方達等の大所帯だったそうです。当時父の勤務していた駅は、いったん全員、パスポートを渡して降りなければならないシステムになっていたそうです。なんと父は全員無事に乗ったと思い、出発オーライ・・待ってくれーとズボンを上げながら走ってきた、都新聞の記者を乗せ忘れてしまったそうです。このことで、でかでかと新聞紙上に書かれてしまい、父は4か月の減俸を食らったそうです。

中国人の厳しい子供のしつけ

当時家には2人のクーニャンがいました。若いクーニャンは、私といつもおままごとをして遊んでくれた、12か13歳の仲良しの女の子でした。ある日父が両手にその子と私の手を引いて100段もあるような,長い階段を降り、黒豚がうようよしている満人街（編集部注：当時の日本人は中国人のいる街をこう呼んでいた）へ入っていきました。とある家の門に立ち父が大声で叫ぶと、中から男がのそっと出てきました。一言二言父がその男に話すと、

怒り狂ったその男がクーニャンの三つ編みをむんずとつかみ、大声で、みんな聞いてくれ・・・うちの娘は　ご主人様の奥さんの首飾りを盗んだんだア・・　そう叫ぶと大勢の人が集まってきました。クーニャンの泣き叫んでいる声，この映像は３歳だった私の脳裏から今でも消すことができません。中国人は、大勢の人の前で大恥をかくと、二度と悪いことをしてはいけないと思うんだよ、あの子のおとうさんは　あの子をいい子に育てようとしているんだよ。父は、泣いているわたしの頭を優しくなぜてくれました。

東海林太郎が笑って唄った赤城の子守歌

最後のこの件は残留孤児の方たちにお披露目するのは、大変申し訳なく躊躇いたしました。お許しくださいませ。

夜、食事がすむと、丸メガネの人が現れて、これから 唄いますが 子供さんをお借りしたいと言いました。それからステージの側にいた私を手招き、おじさんの背中に乗せられました。私はおじさんの唄う横顔を見ているうちに、むらむらといたずら心が生じ、耳をひっぱったり、鼻の穴に指を・・笑ったことがない紳士といわれている、彼のキャラクターに大きなキズをつけてしまいました。

今回の残留孤児の皆様の辛い悲しい過去、三世の方のあふれる涙・・・・そのような想像を絶する経験の中においてさえ、貧しいが心ある養父母に感謝していらっしゃる方たちに胸が熱くなりました。

この会を立ち上げ、長きにわたりお力を注いでいらっしゃる中島幼八氏に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（おおつ・ひろこ：旧満洲の大連生まれ。父の転勤に伴い、瀋陽、ハルビンなどで過ごす。日本の敗戦後、中国から引き揚げる。ファションモデルや芸能関係の仕事などを経て、外資系保険会社事務所を立ち上げ、保険業務に携わる。現在、横浜市在住）

「赦された戦犯たち」の歴史

芹沢 昇雄

１．「中帰連」とは？

「中帰連」の正式名称は「中国帰還者連絡会」と言います。

敗戦後シベリアに抑留された約 60 万人（1 割が犠牲）の中から、中華人民共和国（以下、中国）独立翌年の 1950 年に、旧ソ連から中国に「戦犯」として引き渡された 969 人が「撫順戦犯管理所」に収容されました。また敗戦後も八路軍と戦った一部の元兵士など 140 人は山西省の「太原戦犯管理所」にも収容されていました。この 1000 人余りが帰国翌年の 1957 年に反戦平和と日中友好を願って「中帰連」を組織し、高齢のため解散した 2002 年まで自ら体験した加害や虐殺などを証言して来た団体です。

２．移送と収監

彼らはシベリア各地から国境の町「綏芬河」の駅までは貨車を三段に仕切り押し込まれ、中国側では客車が待ち看護婦さんが「体調の悪い人はいませんか？」と車内を回り、暖かい食事も用意されていました。彼らはソ連と中国の待遇の違いに大きなショックを受け、なかには「俺たちは中国に良いことをしたから」と勘違いしていた人もいました。

ソ連からは「帰国」と聞かされ貨車に乗せられましたが、列車は途中から西へ走り 3 日かけて着いた先が「撫順戦犯管理所」でした。管理所に着くと 20 名ほどが一部屋に入れられ鍵をかけられました。その部屋には「戦犯遵守規定」の貼り紙があり、それを見た彼らは「俺たちは戦犯ではない！上官の命令を聞いただけで、戦犯とはもっと偉い人たちだ」と猛反発しました。管理所は「解りました」と遵守規定を剥がしましたが、彼らが戦犯であることに変わりありませんでした。

彼らの多くは「焼き尽くし、奪い尽くし、殺し尽くし」の所謂「三光作戦」（中国側の表現）どころか、生体解剖・実験、強制連行、強姦、実的刺突（じつてきしとつ）（中国人を縛りつけ刺す。初年兵の実践訓練とした），人間地雷探知機（先頭に中国人を立たせ地雷があるかどうか確認させる）・・・・等、多くの市民をも加害・虐殺をして来ました。

過去に自分が「何をしたか？」は自分自身が一番知っていることであり、内心は「処刑されるのでは？」と恐れていました。しかし、彼らは周恩来の「戦犯と言えども人間であり、日本人の習慣と人道を守り罵倒も殴打も許さない」との指示で、何の強制労働も強制学習もなく人道的に扱われました。

食事も当時中国人がコウリャン飯を 1 日二食しか食べられない状況下で、彼らには 3 食白米を食べさせ、魚野菜など中国人数人分の食料を一人に与えられました。彼らの中には「これが最期の晩餐」と思った人たちもいました。また、焼却炉の煙突が立つと「あれで焼かれるのだ」と恐れた人もいました。

当初、看守の皆さんも「何で日本鬼子にこんな厚遇するのだ！」と反発もあがりましたが、周恩来は「20 年後に解る」と看守をも諭し教育しました。そして、彼らの人道的待遇はいつまでも変わることはありませんでした。

３．認　罪

当初、敵対関係にあった戦犯と看守の皆さんとは、徐々に信頼関係が築かれ、管理所内で自主的に希望者だけの「勉強会」も始まり、侵略戦争や虐殺に至った原因を考えるようになりました。それには中国側も必要な図書など提供しましたが、決して強制ではありませんでした。

やがて 3 年目頃から徐々に自らの過去を顧みて認罪するようになりましたが、その経緯の中では喧々がくがくの議論もありました。ある元兵士が体験した事実を「貴方が命令した」と告白し認めれば、「俺の立場はどうなる」と反論する人もいました。

ある日、元中隊長が管理所中庭の全員の前で、自分の行った虐殺などすべてを告白し、自から処罰を求め謝罪しました。この告白をキッカケに徐々に認罪が進んで行きました。

しかし、この「処刑されるかも？」との思いの苦しみの中で、病死の他に、自殺した元兵士が 2 人いました。一人は管理所の大きな便槽に飛び込み、看守が引き上げマウスツーマウスで糞尿を吸っては吐き出し救命しようとしましたが、残念ながら救えませんでした。もう一人は便所清掃用のクレゾールを飲んで自死しました。駆けつけた看守は「誰が殺すと言った！」と号泣したと言います。しかし、認罪は軍の高官ほどその時期は遅かったことを自ら認めています。

その頃になると鍵が外され管理所内の交流も自由になり、囲碁や将棋、麻雀など自由に遊び図書室もでき、クラブ活動も始まり映画会や運動会、文化祭もしていました。健康診断も受け自由な生活をしていました。

ある戦犯は梅毒で歩行困難でしたが、当時、非常に高価で入手困難だった「ペニシリン」を日に何本打ってもらい全快した人もいました。また「身体がなまっちゃう」と自ら作業を申し出て瓦生産もしましたが、これも希望者だけでした。当時の状況はＮＨＫが取材に行っており、その写真や映像が記念館にも残っています。

４．生存確認と判決

まだ国交のない 1954 年 11 月、「中国紅十字会」の李徳全会長が管理所に収容されている「戦犯名簿」を持参し来日しました。家族は敗戦 9 年目にして初めて夫や子の無事を知り、家族の訪中や交流も可能になりました。しかし、なかには既に葬式を出されたり、奥様が再婚されていたなどの状況もありました。

検察は証拠をすべて握っていましたが決して自白を迫ることはなく、被害者が訴えても複数の証拠がなければ認めず自らの「告白・認罪」を待ちました。1956 年に瀋陽と太原で「特別軍事法廷」が開かれ 1062 人の戦犯が刑に問われ、すべての人が罪を認めました。そ

のうち起訴されたのは政府・軍高官の僅か 45 人だけでした。

しかも、その中に一人の無期も死刑もありませんでした。判決原案には死刑も無期もありましたが、周恩来が「制裁や復讐では憎しみの連鎖は切れない」と認めず 4 回も判決文の書き直しを命じた結果でした。更にシベリアの 5 年と管理所 6 年の計 11 年が刑期に参入され、殆どの戦犯が満期前に帰国を許されました。また 45 人以外は全員「起訴免除」で即日釈放され、処刑をも覚悟していた彼らは法廷で号泣しました。

法廷から帰ると所長や看守の皆さんから「オメデトウ」と迎えられ、何とお祝いのパーティーの席まで用意されていました。この裁判は 1956 年に 3 回に分けて行われ、興安丸で天津から舞鶴への帰国も 3 回に分けて行われました。帰国の時は新しい服に毛布や靴などの他に、現金 50 元まで支給されそのお金でお土産を買って帰国しました。

しかし、周恩来が「信頼関係を築いて平和を守りたい」と投げた友好のボールを、日本はキチント受け止めることをしませんでした。

５．帰国後の生活

彼らは帰国すると「アカ、大陸帰り」などのレッテルを貼られ公安に監視されました。その偏見と差別のなかで就職も困難で、屑鉄商や牛乳配達から帰国後の人生を始めた人もいました。そんな環境のなかで帰国翌年の 1957 年に「中帰連」を立ち上げ北海道から鹿児島まで全国に支部も出来ました。そして、中帰連は帰国後も毎年のように管理所を訪問し交流を続け、1988 年には管理所の中庭に立派な「謝罪碑」も建立しました。

尚、2000 年に慰安婦問題を裁いた国際民間法廷の『女性国際戦犯法廷』で加害証言をした二人の元兵士は「中帰連」でした。ＮＨＫが加害と被害証言をカットして放送し大きな問題になりました。後日、当時官房副長官だった安倍晋三氏がＮＨＫ局長に「公正な報道をお願いします」との圧力が原因だった事が判明しました。安倍氏の圧力で既に完成済みの放送テープの再編集が急遽始まりましたが、時間切れで 4 分短く放送されました。

安倍氏の圧力が判明した時に加害証言した金子安次さん(2010. 11 逝去）に感想をお聞きした処、放送前にＮＨＫの女性から「放送で実名を出しても宜しいでしょうか？」と確認電話があり、金子さんが「いいですよ、私は証言者ですから」とのやりとりがあったと、金子さんから「ファクス」が私に届きました。本人に実名報道の了解・確認を取った後のカットが、どうしてＮＨＫ自身の「自主的再編集」の筈がありません。

６．「中帰連」の解散

彼らは高齢のため 2002 年に解散しましたが、その翌日、彼らの運動を支援してきた人たちがその思い受け継ごうと『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』を立ち上げ全国に 10 の支部ができ、そこでも中帰連は証言を続けました。しかし、高齢のため中帰連の皆さんも次々に鬼籍に入り証言活動が困難になり、その資料も散逸する状況になりました。

彼らの亡き後この歴史の事実を後世に伝えるには、彼らの映像や本などの資料を使って

伝えるしか方法がありません。そこで、その資料を収集し散逸を防ぐため 2006 年に川越に『中帰連平和記念館』を NPO 法人として立ち上げました。

また、彼らは右翼からの「嘘・洗脳」批判への反論に、1997 年に『季刊 中帰連』を発刊しましたが、私たちはその発行も続けています。この『中帰連』発行所と『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』、そして『中帰連平和記念館』は相互に助け合い運動をしていますが、各組織は独立しています。また、現在の「記念館」の土地と中古倉庫は札幌在住で中帰連副会長だった大河原孝一さん（2014.10 逝去）が全国の仲間にカンパを呼びかけ、不足分は一般カンパも集め購入しました。

７．中帰連平和記念館

前記の通り「記念館」は 2006 年に NPO 法人として開館し、2016 年 11 月に『10 周年集会』を開くことが出来ました。この 10 年間一切の公的補助は受けず、全国のご理解ご支援下さる皆様の「会費とカンパ」のみに支えられて運営出来たことに、心から御礼と感謝を申し上げる次第です。

記念館の初代理事長は元日教組婦人部長だった仁木ふみ子（2012.8 逝去）でしたが、現在、松村髙夫理事長（慶応大学名誉顧問）と共に理事 15 名、監事 2 名の 17 人のボランティアで運営しています。

記念館には一般市民の他に新聞社や記者、NHK、海外の中国中央 TV（CCTV）、香港フェニックス TV、環球時報・・・・などのジャーナリストや、内外の学者・研究者なども来館しています。

2008 年には記念館でも資料提供し協力した『認罪～撫順戦犯管理所の 6 年』が NHK-BS で放送され、「ギャラクシー大賞」や「放送文化賞」を受賞し BS で再々放送されましたが地上波で放送されることはありませんでした。これが NHK の現状・限界かと思います。

記念館には今も「撫順戦犯管理所」や北京の「中国友誼促進会」の皆様が来館し交流を続けています。また、私たちも管理所、平頂山、ハルビン 731、方正（ほうまさ）日本人公墓・・・などを訪れています。

記念館では年 3 回の『会報』発行と、総会と年 4 回の理事会の午後に、参加自由・無料の『中帰連に学ぶ会』を開き講演会や勉強会を開き、ホームページやメーリングリストも設定しています。また 3 年に 1 回、世界各地で開催される「平和博物館国際ネット」（事務局：オランダ・ハーグ）、国内各地で毎年交流会を開いている「平和博物館市民ネット」や「戦争遺跡保存ネット」にも参加し交流しています。

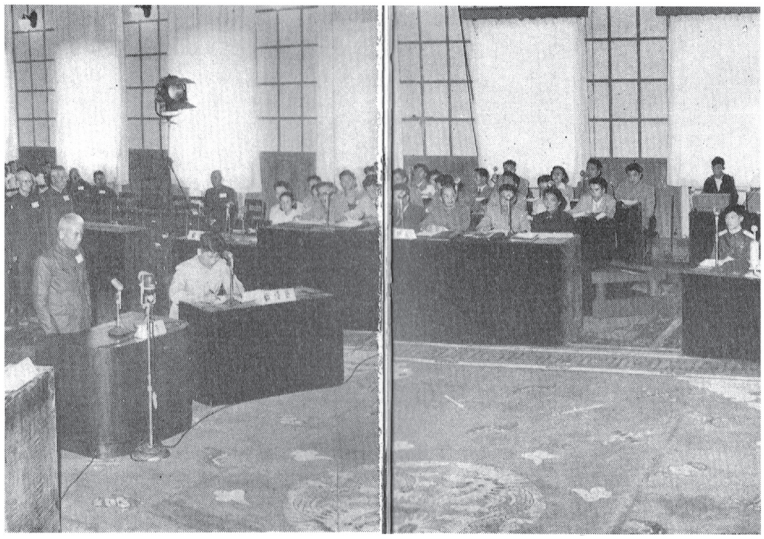
管理所では「人間は強制では変わらない」ことを示し、また戦争と言えば誰でも被害は訴えますが「原因、責任、加害」を語ることは少なく、私たちは負の歴史の事実を「教訓として生かすため」これからも運動を続けます。

ドイツのワイツゼッカー元大統領は敗戦 40 年の国会で「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」と演説し世界から喝采を浴びましたが、中国にも「前事不

忘　後事之師」というまったく同じ諺があります。

【NPO 中帰連平和記念館】（開館日：水、土、日）
350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6　TEL&FAX：049-236-4711
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com　HP：https://npo-chuukiren.jimdo.com/

（せりざわ・のぶお：1941 年、東京神田岩本町で生まれ東京大空襲に遭う。東武鉄道で電車の検査に 42 年間従事。その後「当番弁護士制度を支援する市民の会・東京」で活動。現在、NPO 法人中帰連平和記念館事務局長）



法廷で裁かれる戦犯たち

日本へ引き揚げる元戦犯たち
（1956 年天津港で）

白西紳一郎さんを偲んで

横井幸夫（元東レ株式会社）

日中協会理事長の白西紳一郎さん（以下、白西さん）が１０月８日に亡くなった。招かれて行った旅先・大阪での急逝だった。私は亡くなる６日前の１０月２日に東京の中国文化センターで開かれた「中日国交正常化４５周年記念　情と形～四人のまなざし～」という展覧会の開会式で白西さんと会って、話を交わしたばかりだった。知りあって１０年以上になる。初めて会ったのは何時で、何処だかは忘れてしまった。

この時もそうだったが、近ごろは日中交流関係の集まり、開会式で出会い、さらにその後の懇親会で親しく話を交わすことが多かった。白西さんは日中関係の会合、シンポジウム、記念パーテイの出席者の常連だった。日本各地で開かれる日中関係の集まり、開会式のほとんどに、ということは毎日のように、出席していた。私は白西さんと付き合いが長くてあえて二人の記念写真を撮る関係でもないので、二人で写った写真は残っていない。１０月２日に会った時もいつもと変わらなかった。この時、白西さんとツーショットの写真を撮っておけばよかったと悔やまれる。

昨年２０１６年６月５日に東京の中央大学駿河台記念館で方正友好交流の会の講演会が開かれ、白西さんが講師だったので聴きに行った。旧知の方正の会事務局長　大類さんが案内をくれたのだった。

講演会の後、方正の会の事務局がある日中科学技術文化センター内の会議室で講演者の白西さんを囲んださささやかな懇親会が開かれた。参加者は２０人弱だったと思う。

ビールと簡単な食事の懇親会だったが、とても盛り上がった楽しい集まりだった。私はこのときほど白西さんと話したことは無かった。白西さんは人格者で、威張らず誰に対しても、ということは私に対しても、いつでも親切に、優しく接してくれた。

白西さんは日本政府にも中国政府にもはっきりモノの言える人だった。立場上、公式の場で日本政府、外務省を批判することはなかった。しかし、親しい仲間うちの集まりでは対中政策に関わる外務省を厳しく批判していた。白西さんは多くの与野党の政治家や外務省ＯＢと親しい関係をもっていた。いまの政治家、外務省に任せていたら日中関係は改善しないという危機感があったように思う。

私は白西さんから生い立ち、人生のこと、日中関係のことなどをゆっくり聴きたいと常に考えていた。しかし、白西さんは亡くなった。もはや白西さんに会うことも話を聴くこともできなくなった。日中関係の将来を心から心配していた日本人がまた一人亡くなった。（２０１７／１１／８）

白西紳一郎さんの思い出

大類 善啓

どういうきっかけでこういう話になったのか詳細は忘れた。電話で、右翼の巨魁と言われた田中清玄の話になった。白西さんは、戦前の武装共産党時代の闘士だった田中清玄がコミンテルン時代、鄧小平と付き合いがあったという話をされた。その関係で、鄧小平が来日した時、田中清玄と因縁浅からぬ山口組の大親分、田岡一雄との関係で、鄧小平のボデイガードを山口組がやったという話である。その話を聞いて驚いた私に白西さんは、「日中関係にはいろいろとあるんだよ」と言われたので、ぜひメモワールとして残してほしいと言ったが、「それはなかなか書けないよ」との返事だった。

私が『ある華僑の戦後日中関係史』を出し、韓慶愈さんのことを書いたら、拙著を 10 冊ほどまとめて買っていただいたことがある。韓さんとは旧友でもあり、また、戦後の日中関係を共に生きてきた韓さんとの人生はまた、白西さんの人生と重なる点も大いにあったのだろうと思う。

白西さんが亡くなり、また一人、戦後の日中関係を深く知る生き証人が消えたことを改めて思う。

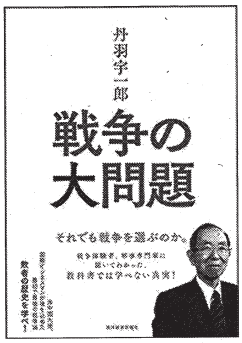
2017年10月1日発行、（公社）日中友好協会「日本と中国」

日本と中国

"日本と中国"を読む

丹羽宇一郎著『戦争の大問題』を読んで

方正友好交流の会事務局長・元本紙編集長　大類（おおるい） 善啓（よしひろ）



東洋経済新報社
1,500円（税別）

戦争の真実を知れ！

北朝鮮の核実験が強行され、日本でも一部の世論から「制裁を強化せよ」といった強硬論が台頭している。そのような危機的な状況を煽る中、本書刊行の意味は大きい。

有能な商社マンとして生き、その後駐中国大使を歴任した当協会会長の著者は、死亡率79％のフィリピンから生還した元少年通信員やシベリア抑留経験者、上官に理不尽な殺人を強要された元初年兵、元日本遺族会会長らから話を聞き、戦争の実態を明らかにしつつ「戦争の真実を知ること」が重要なのだと力説する。

本書冒頭には、元総理の田中角栄氏の次の言葉が掲げられている。「戦争を知っている世代が政治の中枢にいるうちは心配ない。平和について議論する必要もない。だが、戦争を知らない世代が政治の中枢になったときはとても危ない」

まさに現代の日本がそうだ。著者の危機感もここから出発している。飢えの苦しさから、戦争下のジャングルの中でかつての仲間の兵士の肉を食らう。シベリア抑留中、看守のロシア兵から「日本には食人の風習があるのか」と問われたという体験者の声など、極限状況における人間の狂気を表わす戦争の実態を明らかにする。

現実の戦争を知らない政治家が空論を振り回す今日、「リアルなイメージを持てるような戦争の真実」を伝える本書をぜひ、多くの人たちに読んでほしい。

2017年9月25日付、読売新聞朝刊

編集手帳

『ひとりの日本兵』という詩がある。日中戦争の最中、銃弾に斃（たお）れた日本兵が、中国の農民によって手厚く埋葬される情景が描かれている◆中国共産党の武装工作隊の指揮官で詩人でもあった陳輝の作だ。「故郷の母親は息子の無事を祈っているにちがいない」と、日本兵を悼む。この詩は、中国で高い評価を得てきた◆だが、昨今は作者を売国奴と批判する声も上がる。「残念ながら、恨みを教え続けてきた教育が、一部の中国人の心をねじ曲げている」。元人民日報論説委員の馬立誠氏は、『中央公論』10月号でこう憂えている◆中国黒竜江省の方正県には、終戦時の混乱で亡くなった満蒙開拓団員らが眠る日本人墓地がある。1960年代半ば、当時の周恩来首相の許可を得て県当局が建立した。ところが6年前、墓の近くに県が慰霊碑を建てると、反日青年がペンキをかける騒ぎとなり、碑は撤去された◆日中国交正常化に向けて、田中角栄首相が北京に飛んだのは45年前の72年9月25日だった。いつから日中間にすきま風が吹き始めたのか。田中首相とがっちり握手した周恩来の穏やかな笑顔が懐かしい。

2017. 9.25

ちち特報部

「私たちの犠牲で帰ってこられたことは覚えていてほしい」

軍国主義 絶対反対だ

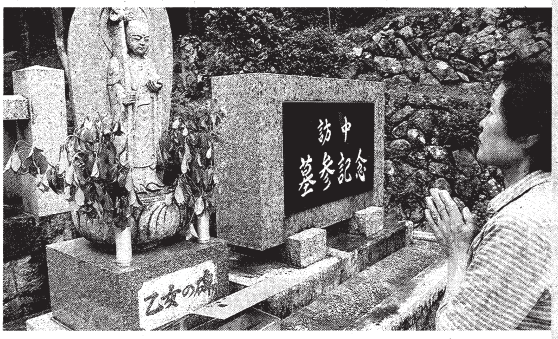
結局、弱い人のところに来る

団幹部とソ連軍との間に当時、どんな「交渉」があったかは知らない。引き揚げ後も、幹部からは何の話もなかった。ただ、引き揚げ後、団員の間で被害に遭った女性が中傷されたという話を聞いた。憤った。「私たちがどれほど悲しい思いをしたか。私らの犠牲で帰って来られたということは覚えていてほしい」

被害に遭った別の女性(九一)=岐阜県在住=も「逃げたいと思うことがどれだけあったか」と振り返る。

「開拓団の係の方に『きょうはあんた出番だで、すまんけど出てくれ』と頼まれた。怖いけど日本に帰らなきゃ、怖い目に遭ってでも、ここでみんなのためにならなきゃ、と思って」

性病にかかったが、引き揚げ後、夫となった男性にはすべてを打ち明け、診断書も渡した。岐阜県内の別の場所に移住し、必死に働いた。「私らがここまで生きてこられるとは思いませんでした。こういう歴史も大事な歴史。死んでも忘れません」。現在は三人しか生存者はいないという。



㊤満州時代の写真を見せる「性接待」を強いられた91歳の女性　㊦「乙女の碑」に手を合わせる、敗戦当時10歳だった安江菊美さん=岐阜県白川町で

歳だった安江菊美さん(八二)は「私たちを助けてくださった方々のことを忘れることはできない」と話す。

「旧満州・黒川分村遺族会」は八一年、「性接待」の犠牲になって亡くなった女性たちを慰霊する「乙女の碑」を地元の神社に建立した。安江さんは、そこでしばしば手を合わせる。地元の人でも、この碑の由来を知る人は多くない。

安江さんは当時、幼いながらも「性接待」を知っていた。まきで風呂焚きの手伝いをした際、自分たちが風呂に入れると喜ぶと、母親に「娘さんたちがソ連兵のところに行って私たちを助けてくれるのだから、あなたは一生懸命風呂を焚き

栄養失調になった妹の治療のために、医務室に行っていたことで「洗浄」を受けている様子も分かった。

引き揚げ後、遺族会による慰霊祭が開かれてきた。しかし「性接待」が公に語られることはなく、開拓団の記録文集にもそれに触れるような記述はない。

安江さんが「性接待」も含めた歴史を語り継ごうと決意したのは、被害者の一人の女性が亡くなったことがきっかけだった。仲が良かった九十一歳の女性は亡くなる直前、安江さんに「私たちの犠牲を知らない人たちにも伝えてほしい」と頼んだ。その後、安江さんは「満蒙開拓平和記念館」(長野県阿智村)など

待」についても伝え始めた。

遺族会の「環境」の変化も安江さんの取り組みを後押しする。戦後に日本で生まれた開拓団員二世の藤井宏之さん(六七)が二〇一二年に遺族会の会長に就任。四人の兄姉を満州で亡くした藤井さんは、歴史を語り継ぐ意味をかみしめる。

「自分ができることは、次世代に伝えること。それが犠牲になった方々への供養の一つとなる」

戦時性暴力に詳しく、黒川開拓団の元団員たちの聞き取り調査をしたNPO法人「社会理論・動態研究

研究員は「元団員には『団の恥』という意識が強く、これまで詳しい経緯は語られてこなかった。しかし、慰安婦の問題などが議論され、自身も高齢化する中、体験を歴史に残しておかなければならないという意識が強まった」と話す。

前出の女性(九一)は「遺言のつもり」と水も口にせずに約三時間語り続けた。

「戦争なんて結局ね、弱い人のところに来ちゃうからやっちゃいけない。話し合いは何年かかってもいい。武器を使っちゃいけない」

女性のノートには、こんな一文が書き留められている。「七十年すぎても　消すことのできない事実　軍国主義絶対反対だ」

デスクメモ

「生きて虜囚の辱めを受けず」と威張っていた人物が捕虜になるや、平然と同胞を売ったといった話は「昭和」まではよく聞いた。人のあさましさ。戦争の記憶が薄れるにつれ、またぞろこの種の「愛国者」たちがばっこしている。素性は進行中の政権の醜聞を見る限り、変わらない。(牧)

2017年7月2日付、東京新聞朝刊

こちら特

戦争の惨めさを知った

満蒙開拓団 ソ連兵への「性接待」

70年超経て「封印」解く

16~20歳の女性「差し出す」

戦前、旧満州国（現中国東北部）に国策として送り出され、敗戦後の逃避行で大勢の犠牲者を出した「満蒙開拓団」。そこには敗戦直後、開拓団を守るためとして、ソ連兵に対する「性接待」を強いられた若い女性たちがいた。この事実は開拓団員の引き揚げ後も長く封印され続けてきた。しかし、少なからずの被害者が亡くなり、残る女性たちも高齢となった。そうした女性たちが最近、重い口を開き始めた。（佐藤大）

「自決のがれて　一息つくまもなく　接待にきりかえられる」

「乙女ささげて　数百の命守る」

A4のノートには、手書きでそう記されていた。現在、東京で暮らす八十九歳の女性は約二年前、戦後七十年を過ぎたところから、つらい記憶を綴り始めた。

女性は戦前、岐阜県黒川村（現白川町）の「黒川開拓団」の一員として満州に渡った。敗戦直後、ソ連兵への「性接待」を強いられた。当時、十七歳。「ものすごく恥ずかしく、戦争の惨めさをさんざん知った」

黒川開拓団は一九四一年から、中国吉林省の陶頼昭に入植した。人数は約六百人。敗戦後、極寒や食料不足、チフスなどで約三分の一が死亡。生き残った約四百人の多くは、四六年九月までに日本に引き揚げた。

女性は継母が黒川村出身だった関係で、団員となった。開拓団の「満州開拓女塾」で「大和なでしことは何か」などを学ばされていたが、敗戦から約一週間後に進駐してきたソ連軍の襲撃に団員らはおびえた。隣の開拓団は集団自決に追い込まれ、黒川開拓団でも集団自決やむなしの声が上がった。食糧も不足した。

「奥さんたちには頼めんでね、あんたら独身だけ、どうか頼む」。開拓団の幹部が未婚女性たちにソ連兵への「性接待」を要求したのはそんな時だった。十六～二十歳ぐらいの未婚女性約十五人が集められた。

食糧の提供を受けるためにも、ソ連兵に女性たちを「差し出す」という。女性は逃げたかったが、団全体の生死が関わる事態に「嫌だ」とは言えなかった。

開拓団の共有施設の一室には、ずらりと布団が並べられていた。仕切りも何もない。交代でソ連兵の相手をさせられた。ソ連兵は銃の先で女性たちの体を小突き、丸太のように倒した。

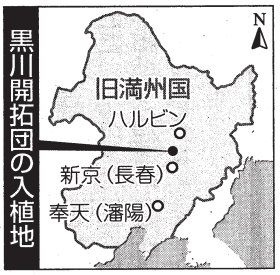
「慌てているわ、扱いは恐ろしいわ。物扱い」。ソ連兵が駐留した十一月まで「性接待」は続いた。

女性たちは性病やチフスへの感染を防ぐため、医務室で「洗浄」を受けた。それでも感染した。「接待」を強いられた人のうち、四人が亡くなった。女性もチフスにかかり、高熱で塗炭の苦しみを味わった。

日本に引き揚げた後も、恐怖は焼きついていた。ベルトの音がするだけで、怖くて振り向いた。父親にベルトのないズボンをはくよう求めた。東京で家庭を築いたが、夫には死別するまで「性接待」についてひと言も話さなかった。子どもたちにも言っていない。

ただ戦後七十年が過ぎ、自らの体験を伝えるべきではないかという気持ちが芽生えた。「このような不潔なことは表に出してはいけないと思ってきた。でも、次第に戦争なんてやるべきではないという声を上げなきゃ、という責務というか気持ちが起きた」

黒川開拓団の入植地



満蒙開拓団　1931年の満州事変以降、日本が国策として旧満州や内モンゴルに送り出した農業移民団。国内の食糧政策、ソ連の侵攻を防ぐという思惑もあった。約27万人が海を渡ったが、敗戦後の逃避行中、ソ連兵や中国人の襲撃、飢えや寒さ、病気で約8万人が死亡。中国人家庭に預けられた子どもらは中国残留孤児となった。

◀ 自筆のノートを見せる「性接待」の被害者だった89歳の女性

部　FAX 03（3595）6911　Eメール tokuho@chunichi.co.jp

中国人女性に再び光

李徳全氏

日本人戦犯の帰国に尽力した中国人女性がいたことを今、記憶する人は多くないだろう。中国赤十字会会長だった李徳全氏（1896～1972）。日中国交正常化から45年の今年、その功績に再び光を当てる取り組みが日中双方で広がっている。

（佐藤大）

国交正常化前 邦人戦犯帰国に尽力

キリスト教徒だった李氏は教師などを経て、同じキリスト教徒で「クリスチャン・ゼネラル」と呼ばれた軍閥・馮玉祥氏（一八八二～一九四八）と結婚。日中戦争後は内戦の混乱中に託児事業に尽力した。一九四九年の中華人民共和国成立後、大臣に当たる「衛生部長」に就任し、中国赤十字会会長も兼任した。

李氏が率いる訪日団は五四年、日本赤十字社の招きに応える形で実現した。当時、日本は台湾と国交を持ち、中華人民共和国を承認していなかった。戦犯として中国に収監されていた日本人は家族も行方が分からない状態だったが、李氏は千人余のB・C級戦犯の名簿を携え、帰国を促進する。李氏の親しみやすい雰囲気もあって、各地で大歓迎を受けた。

影響を与えたのは、戦犯の帰国だけではなかった。当時、中国黒竜江省で残留孤児となっていた中島幼八さん（七五）＝東京都世田谷区＝の行方を捜していた母親は、訪日団の一員に必死にメモを手渡した。「中国で息子を預けた。調査して頂けませんか」。それをきっかけに中国赤十字会が中島さんを探し出し、母親と中島さんの養父母との手紙のやりとりが始まる。中島さんは五八年に帰国を果たした。中島さんは「母親は亡くなるまで『李徳全さん、李徳全さん』と話していた」と振り返る。

書籍刊行、映画化も

日本人女性と握手をする李徳全氏（左奥）＝伝記「李徳全」提供

訪日団は十四日間滞在し、副団長だった廖承志氏は経済人たちと会談を重ね、特に高碕達之助氏（後に通商産業大臣など歴任）との話し合いは、両氏の頭文字をとった「LT貿易」の基盤となる。これを通じて拡大した民間の経済関係が国交正常化の背景の一つになったとされる。ただ、李氏は正常化五カ月前の七二年四月に亡くなった。

「新日中友好二十一世紀委員会」の日本側委員だった作家の石川好氏は二〇一四年、李氏の孫に当たる羅悠真氏から李氏についての話を聞き、李氏が果たした役割の大きさを知ったが、李氏について残っている資料が少ないことに驚いた。日中交流の扉を開いた人物として日本の新聞に寄稿したところ、日中双方で反響を呼ぶ。中国社会科学院教授の程麻氏と北京大日本研究センター常務理事の林振江氏が李氏の伝記を書くことになり、日中で資料を集め今夏に出版。まもなく日本語版の「李徳全」（日本僑報社）も刊行された。日本のキリスト教徒や研究者でつくる「李徳全女史研究会」も設立された。

十月には、明治大学で「国交正常化前の秘められた歴史」と題し、李氏に焦点を当てたシンポジウムが開かれ、羅氏や程氏、林氏も参加した。日中で映画化に向けた動きがあることも報告された。

シンポジウムのコーディネーター役を務めた明治大の加藤徹教授（中国文化研究）は「今では忘れ去られた存在になっていたが、戦争の記憶がまだ生々しい時代に女性が来たということで、日本の世論もがらっと変わった」と分析した上で、日中友好の歴史をひもとく意義を強調する。

「日中は隣同士の国なので、嫌な思い出もたくさんあり、それを忘れることもできないが、実は非常に心温まる思い出がある。日中近代史には、まだまだ未発掘の忘れ去られたようないい話が眠っている」

部　FAX 03(3595)6911　Eメール tokuho@chunichi.co.jp

残留孤児に寄り添う介護を

中国語で対応 民間施設乗り出す

中国残留孤児は、長年の苦労の末に帰国を果たした後も、言葉の壁や生活習慣の違いから地域で孤立する人も少なくない。こうした帰国者は「老い」を迎え、介護が必要になると、ますます孤立を深めがちであることから、この状況を少しでも改善しようと、帰国者たちを対象にした民間の有志の介護施設が登場し始めている。（佐藤大）

長寿楽園で「跳棋」をしながら過ごす市川恵子さん（左から2人目）

東京都板橋区に今月二日に開所した「長寿楽園」。中国からの帰国者たちを主な対象にした通所・訪問介護の施設だ。所内で使われるのは、多くが中国語。食事はヘルシーな中華料理が提供される。

六日、訪ねてみると、通所者で中国残留孤児二世の市川恵子さん(六七)が不意に、中国語の歌を歌い出した。スタッフの三上貴世さん(四五)たちが手拍子を入れると、市川さんの顔がほころぶ。その後、三上さんを相手に、中国でよく遊んでいたという「跳棋」(ダイヤモンドゲーム)を始めた。

母親が残留孤児で約十年前に帰国した市川さんは現在、都内で中国人の夫と暮らしている。中国語しか話せないのに加え、近年、日常生活に不便を感じるようになり、この施設に通い始めた。市川さんは「ここはサービスがとてもいい。私はとても幸せです」とにっこり笑った。

長寿楽園を運営するのは、残留孤児二世の庄司正美さん(五八)。黒竜江省で生まれ育ち、残留孤児の母まさるさんと共に一九八五年に来日した。今は都内や川崎市内に中華料理店を五店舗構える。

生前、まさるさんは介護施設には行きたがらなかった。日本語は話せたが、生活習慣の違いから溶け込めなかったためだ。庄司さんは「帰国者の方たちが穏やかに暮らし、日々楽しく、孤独や病気の苦しみを和らげられるよう寄り添える場所をつくりたかった」と介護事業に乗り出した理由を話す。庄司さんのめいに当たる三上さんもこの思いに共感し、運営に加わった。

埼玉県所沢市の訪問介護事業所「虹」は、昨年六月から帰国者らへの訪問介護を始めた。十一日、残留孤児二世でケアマネジャーの上條真理子さん(三七)が、残留孤児だった木村和子さん(七六)宅＝所沢市＝を訪問する時に同行した。

木村さんは中国籍の夫・許金昌さん(七七)と二人暮らし。足が不自由なため、金昌さんに頼らざるを得ない。老人ホームに入居したこともあったが、日本語が話せないことなどからなじめなかった。

今は毎日午前と午後の五十分ずつ、「虹」から食事や掃除など身の回りの世話をするヘルパーが派遣されている。上條さんが夕飯の支度をしつつ、中国語で語りかけると、木村さんもにこやかに言葉を交わした。自らの境遇を知るヘルパーの中国語による介護に、木村さんは「ありがたい」と喜びつつ、「もう少しゆっくりお話をする時間もあれば」と希望を述べた。

訪問介護を受ける木村和子さん㊨と許金昌さん㊧

国のきめ細かい支援 必要

厚生労働省によると、帰国を果たした残留孤児らは約六千七百人。平均七十六歳で、四人に一人は介護が必要という。同省は、中国語で対応する介護施設をホームページなどで紹介しているが、常時対応できるとは限らず、満足な介護を受けられない孤児は少なくないとみられる。同省は中国語ができるボランティアを養成し、介護施設や自宅に派遣する事業を、ようやく今月から始めたばかりだ。

残留孤児の問題に詳しい神戸大の浅野慎一教授（社会環境論）は「残留孤児には言葉の問題があり、二世も経済的に困窮している人もおり、介護で行き詰まる人は多い。高齢化に伴って介護の需要は増えている」と指摘する。「さかのぼれば、国の政策で帰国が遅れたことで、介護の問題も大きくなってきた。国などによるきめ細かい支援が必要だ」

2017年9月27日付、読売新聞夕刊

満州開拓民の悲劇 追う

兵庫 70歳写真家

集団自決の地 撮る

終戦前後の混乱期に満州（現中国東北部）で集団自決に追い込まれた開拓民の悲劇を伝えようと、兵庫県尼崎市の写真家・宗景正さん(70)が、犠牲者の眠る地をカメラに収め続けている。帰郷を果たせなかった人々の無念をしのび、10年前から撮りためた写真は3万枚以上。30日には報告集会を開き、撮影した写真とともに現地の経験を語り継ぐ。

きっかけは、夜間中学で日本語を学び直す中国残留邦人への取材だった。多くの孤児を生んだ満州の歴史を調べるうち、100人以上が集団自決した開拓地が17か所あると知り、「国策に人生を翻弄された人たちの記録を残したい」と思い立った。

以来、400人以上が自決した旧東安省（黒竜江省）など4か所に足を運び、今年6月の訪問先には旧但東町（兵庫県豊岡市）から約480人が入植した旧浜江省（黒竜江省）を選んだ。終戦直前に侵攻した旧ソ連軍から逃げ切れずに多くが川に集団入水し、298人が亡くなったとされる。

同行したのは、宗景さんの活動を知った兵庫県明石市の石田拓男さん(68)。一家7人で入植した父・義雄さん（2010年に92歳で死去）は、集団自決で母と当時の妻、弟、妹の4人を失ったが多くを語らずに亡くなっており、「親類の苦難をこの目で確かめたかった」という。

かつて開拓村があった場所に行くと、集団入水した川は既になく、1日がかりで捜した現場はトウモロコシ畑だった。住民から「この辺を深く掘ると骨が出てくる」と教わり、宗景さんらは遺骨すら捜してもらえず亡くなった犠牲者を思い、手を合わせた。

宗景さんがこれまでに撮影したのは、今回の約2000枚を含めて3万枚以上。今の街並みや軍事施設跡など、当時の面影を追ってきた。パネル展や講演の資料に使っていたが、いずれは写真集にするつもりだ。時間の経過とともに現場の特定は年々難しくなっており、「残された時間は少ない。出来る限り記録を続け、後世に残したい」と語る。

開拓団が集団自決した現場の写真を広げ、訪問時を振り返る宗景正さん（左）と石田拓男さん（兵庫県尼崎市で）＝近藤誠撮影

極東ロシアでアイヌ人に出会う

―ウラジオストク、ハバロフスクへの旅―

大類 善啓

ソ連崩壊で途絶えた民間交流

畏友、石井昭男さんの誘いに乗って、この9月17日から24日までの1週間、シベリアのウラジオストクとハバロフスクへ行ってきた。石井さんは、人権やマイノリティーをテーマに関する長年の出版活動の功績で、アジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞を2008年に受賞された方である。

昨年もバルト三国へ行かないかと誘われ、共にヘルシンキを経て、エストニア、ラトビア、リトアニアの首都の街々を歩いた。しかし残念ながら今回は体調が優れず、石井さんは旅を取りやめ、ご一緒できなかったのは残念だった。

旅の主催は日ロクラブ主催という。日ロクラブと言っても知る人は少ないだろう。昨年11月に結成され、活動はまだ緒についたばかりである。

かつてソ連邦が健在だったころ、ソ連との友好団体が日本にもあった。それを支えていたのは主に旧社会党の人たち、とりわけ構造改革派という人たちが主流だった。ところがソ連邦は崩壊し、旧社会党や総評も変質し、その名前は歴史の彼方に消えてしまった。当然といえば当然か、新しいロシアになって民間レベルの交流活動は途絶えてしまった。これではいけないと、国や組織などにとらわれず、柔軟な発想でロシアの人たちと草の根交流をしよう、それが大事だということで日ロクラブが結成された。

旅のメンバーは初岡昌一郎（元姫路独協大学教授）さんや、在米ジャーナリストとして活躍された北岡和義さんら一級の知識人から労働運動の歴戦の闘士まで多士済々である。

極東ロシア、シベリアへの旅

さて、ロシアとの交流といっても、首都モスクワやサンクト・ペテルブルグとの交流となると中央レベルの交流になって組織的になりかねない。日ロクラブを主宰する人たちはロシア側と相談して、日本と最も近いロシアの人たちと交流しようということで、極東ロシア、シベリアのウラジオストクとハバロフスクへの旅になった。

シベリアに出かける前に学習しようと、ロシア連邦交流庁代表で歴史学博士、国際関係学博士のヴィノグラドフ・コンスタンチンさんの講演があった。彼は冒頭、今でも毎年、ロシア中央政府が把握していない村があり、「シベリアで今年も２～３の村が発見されました」というニュースが流れるという。中央政府が知らないシベリアのどこかの村で、人々がひっそりと生き続けているのだ。シベリアはそれだけ広大であり、まだまだ未知なるものが潜んでいる、と言えそうである。

シベリアはかつて流刑の地であり、またロシア正教と相いれず、宗教的弾圧を逃れ、モスクワなどの大都会を離れて、シベリアで生活する人たちがいるのだ。

美しい街、ウラジオストク

今から半世紀ほど前、私は新潟から船に乗ってナホトカに行き、ヨーロッパに渡った。

軍港であったウラジオストクは、外国人はもちろん、ロシア人にも開放されていなかった。1991 年のソ連邦崩壊後、やっと外国人にも開放された街、それがウラジオストクである。

日本に最も近いヨーロッパの町、ウラジオストク。坂のある街、ウラジオストはロシア語で「東方を征服せよ」という意味のようである。ウラジオストクのロシア科学アカデミーの人によれば、ロシア人は 17 世紀の初めごろからシベリアへ進出し始めたという。そこは「未開の地」と言っても、ロシア人から見ればそうであって、シベリアには大昔から先住民がいたのだ。

日本語を話すブリヤート女性

その先住民族の一つであるブリヤート人と親しく話す機会があった。

成田空港からシベリア航空で２時間半、ウラジオストクに着いて３日目の夕方、ロシアの人々に書道体験をしてもらおうというイベントがあった。日本から浅野元紀、井川公子さんら書家が二人、また訪ロ団の団長を務めた江田五月さんも書道を嗜み、披露した。

江田さんは大きな紙に「一期一会」と書き、「皆さん、ほしい人はいますか」と参加者に声をかけたところ、遠慮がちに２、３人が手を挙げた。20 人ほどのロシアの人々が好奇の目をもって書道イベントに見入っていた。その中に日本語を話す若い女性がいた。

顔立ちは日本人そっくり。我が団の人と日本語で話していたので、てっきり日本からの留学生だろうと思っていた。が、しばらくして私も彼女と話をしたら、ブリヤート人だと言う。

マリア・ブトウエバという彼女はブリヤート族（モンゴル系）で、ウラン・ウデ出身とのことだった。と言っても私にとって初めての地名だ。手元の地図を出すと、彼女はその地をさっと見つけ、その故郷はウラジオストクからシベリア鉄道で３日かかるとのことだった。日本語を現地の日本人に少し習ったと言うが、ほぼ独学に近いようで、現在はウラジオストクの極東連合大学で経済学を学び、英語も達者だ。２年後には日本に留学したいと言う。

アジア系はシャーマン信仰

まさかここロシアでアジア系の人々に会うとは思わなかった。自分の無知をさらすようだが、仕方がない。

さて、極東ロシアの少数民族といえばナナイ族という民族がいる。「地球の歩き方」シリーズのシベリア編にはナナイ族のことが出ているところを見ると、シベリアの少数民族では有名なのかもしれない。ハバロフスクからバスで１時間半ほど北へ行ったところにあるナナイ族のところを訪ねた。

最初に現れたリューダという女性は白ロシア出身という白人の女性、ロシア人だ。しか

し私たちの前に現れた25歳になる娘さんはモンゴル系の顔立ち、父親はナナイ族だ。

このナナイ族はシャーマン信仰ということで、我々を居間に案内する際、ある儀式があった。父親が小さい木を削った木くずに火をつけ煙を焚き、夫人が小さい太鼓を叩く中、煙の中をくぐって部屋に入って行くのだ。いわば魔除けのセレモニーなのである。

白ロシア出身の夫人がナナイ族について語ってくれた。

彼らは今、ナナイ語は話せないと言う。先のブリヤート女性も彼女の両親もブリヤート語を話せず、会話はロシア語だということだった。少数民族の言語は滅び、大国の言語、ここではロシアが支配言語なのである。

二葉亭四迷とウラジオストク

ウラジオストクでは日ロフォーラムが開催され、ロシア側から５人、日本側から６人が発言した。日本側からは、老人介護問題など両国で共有できる課題がある。それぞれ地域社会で解決しなければならないので、お互い問題意識を共有していこう。また、自治体交流や農業協力の可能性などが提起された。そして改めて、草の根交流の重要性を確認し合った。

フォーラムでは発言されなかったが、日本人参加者の中でただ一人、農業に従事している人がいた。彼、中村繁太郎さんはウラジオストク近郊の農民の所に視察に行った。帰ってから、彼の話を聞くと、シベリアのリンゴや苺は、日本のものと比べると、本当に小さかったという。中村さんは、農業技術の交流が進展すればシベリアの農産物の生産量は飛躍的に発展するだろうと報告された。

私は、日本とロシアの人々とは「国家とか民族とかいう観念を超えて交流しよう」と発言した。その折り、明治の作家・二葉亭四迷がエスペラントをこのウラジオストクでロシア人のポストニコフから学び、ウラジオストクが日本に最初にエスペラントが伝わる奇縁のある町であることを話した。

ポストニコフは実際にその後、帰国後の二葉亭を日本に訪ね、当時のお金で50ドルを二葉亭に手渡しエスペラントの本を出してほしいと依頼、二葉亭は『世界語』を、そしてすぐにまた『世界語読本』という冊子を出版した。それがベストセラーになり、日本でエスペラントが普及するようになったのである。

「私は人類の一員である」という思想

エスペラントの創始者であるザメンホフは現在のポーランド、当時は帝政ロシアの支配下にあったリトアニア領の町、ヴィヤリストクに生まれ育った。そこでは主に、ロシア人、ドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人たちが住んでいて、言葉の違いから意志が通じず、市場や通りではしょっちゅう喧嘩が絶えなかった。

ユダヤ人ザメンホフは小さいながらも民族間の争いに心を痛め、お互いに共通の言葉があれば喧嘩も無くなるだろう、と思った。そこから世界共通語を創ろうという思想に至り、エスペラントを創った。

その後、彼はいわゆるエスペラントにおける内在思想、Hamaranismo（ホマラニスモ）に到達するのである。ホーモとは人類、アーノは一員、イスモは主義、そこから生まれたホマラニスモは日本では人類人主義と訳されている。

我々は日本人とかロシア人ということではなく、「人類の一員である」という、この考えは、偏狭なナショナリズムを克服するという意味で、私は近年この思想こそ、世界を救う、ナショナリズムを超える思想だと大いに共感していて、これまた不明を恥じるが、ザメンホフを本当に見直している。

20 世紀が生んだユダヤ系の知の巨人、精神分析学のジークムンド・フロイド、共産主義のカール・マルクスの思想が少しばかり今や色あせる中、シオニズムはユダヤのナショナリズムに陥るだろうと予言して「イスラエル建国」に異議を唱えたザメンホフの人類人主義は、日本の思想界、いや世界の思想界も、もっと本気になって考えるべきだと思っている。しかし残念ながら、英語帝国主義ともいうべき、英語が国際語として普及する今日、今なおエスペラントは少数派言語にとどまり、また人類人主義 Hamaranismo と言っても知る人ぞ知るという状況なのである。

フォーラムでは私は、ロシアも日本の人たちもこの思想を基に、国家や民族という観念を捨て去り、お互いに「人類の一員である」という考えの下、草の根交流をしていこう、と発言を終えた。

その時、安倍晋三が「美しい日本を取り戻す」と言っていたことを思い出し、少しロシア側を刺激しようと、「安倍は何故、美しい日本を取り戻すのではなく、美しい世界、美しい宇宙を取り戻そうと言えないか」と発言した。これに関してロシア側の反響は実のところどうだったかわからないが、日本側の事務局を務めていた佐々木啓之（元都会議員）さんは「大類さんの発言、良かったよ」と終わった後、握手を求めてくれ、少しばかり安心した。

ハバロフスク近郊でアイヌ人に出会う

ナナイ族のいる村に行った折り、アムール川沿いをナナイ族の婦人と歩き、この川底から石碑が出たところに案内された。夏になると町からロシア人たちがたくさん川辺に押しかけてきて川岸が荒らされる。そこで、ここはナナイ人にとって神聖な場所であることを示すため、その石碑を引き上げ川岸沿いにその石碑を立てた。その石碑には象形文字が書かれていて、また目とか太陽のような模様も描かれていた。

ナナイ族の婦人はその模様を「目」だろう、と言う。しばらくすると、突然のように、明らかにモンゴル系の顔立ちをした男が現れた。私はその男を意識して言ったのではないが、アメリカインディアンのホピ族には、このような模様を太陽として描き、崇拝している旨を話すと、通訳のオリガ女史がそのままロシア語に訳した。すると、そのモンゴル系の男は、「そうだ、これは太陽だ、彼女は間違っている」とナナイ族の女性を指さして言うのだった。

その川岸沿いから帰りのバスに乗り込むべく歩いていると、乗用車に乗ったアジア系の

男に出会った。運転手の後ろの席にいたその彼に私は、「ヤポンスキー」だと自分を指さした。日本人だというロシア語がどういうわけか出てきたのだ。するとその男はドアを開け、「俺はアイヌ人だ」と私に握手を求めてきた。その後すぐに彼は車を走らせようとしたが、10 人ほどの我がグループの日本人たちを見ると、ロシア語で何か言った。オリガさんは、彼は今、「日本人はたくさんのアイヌ人を殺した、と言いました」と訳したのだ。

確かに、北海道の松前藩を始め日本人たちが先住のアイヌ人たちを殺し、彼らが住んでいるところから追放したのは歴史が教えるところだが、それより、この極東ロシアにアイヌ人が住んでいたことを知り驚いた。“日本”や海を越えてアイヌ人たちは、北海道にもシベリアにも住んでいたのである。近代の国家が成立する以前、人々は国境などというものを意識することなく、それこそ「国家とか民族という観念もなく」、おのおのが共存して住み生活を営んでいたのである。

ブリヤート女性
マリア・ブトウエバさんと筆者

突如現れたモンゴル系男性。

ナナイ族の娘と筆者

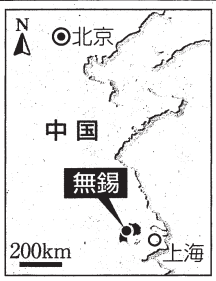
（おおるい・よしひろ：1979 年より中国と関わる。現在、本会事務局長、日中科学技術文化センター理事。著者『ある華僑の戦後日中関係史』、共著に『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』など。近年はタンゴ音楽に関する評論やエッセイも書く）

日中交流 つないだ桜満開

中国江蘇省の無錫市で、日中の民間団体が桜の植樹を始めて、今年で三十周年を迎えた。当初は千五百本だった桜の木は、今では三万本にも達し、無錫は中国随一の桜の名所と言われるまでになった。日中関係がぎくしゃくした時も途切れることなく続いてきた交流は、次の世代へと引き継がれていく。

（無錫で、浅井正智、写真も）

無錫で30年 政府間悪化時も継続



中国五大淡水湖の一つ、太湖の西北岸。スッポンが首を伸ばしたような形の小さな半島が、湖に向かって突き出る。風光明媚なこの場所に、桜の美しさが見事に溶け合っている。

「無錫国際花見ウィーク」の開幕日となった三月二十七日。陽光降り注ぐ公園では、日中の関係者が集まり、三十周年記念式典を開くとともに、咲き誇る桜を満喫した。

「日中間には不幸な過去がある。二度と起きないように桜を通じた交流を続けてきた」

植樹の担い手 若い芽も育つ

中国江蘇省無錫市で、咲き誇る桜を楽しむ中国人観光客たち

植樹を行ってきた「桜友誼林保存協会」の新発田豊会長（六六）は、活動の原点をこう語る。桜の苗木の贈呈が始まったのは一九八七年夏。日本では、前年に発売された演歌「無錫旅情」が、この年にかけて大ヒットした。

植樹されている面積は六十五万平方メートル。ナゴヤドーム六個分の広さだ。日本人になじみ深いソメイヨシノだけでなく、八重桜や河津桜など百種類近くに上る。三月から四月にかけて約四十日間にわたって満開期間が続くのが特徴だ。

桜を植えたらそれで終わりではなく、維持管理を担う中国の営林局職員に東京・上野公園で研修してもらうなどフォローも怠らない。息の長い交流の裏には、地道な活動の蓄積がある。

ただ「この三十年間、障害もなく交流が発展してきたわけではない」と黄錫強・江蘇省外事弁公室副主任が言うように、中断の危機もあった。最大の試練が、二〇一二年の日本政府による尖閣諸島国有化後の日中関係の悪化だ。

日中は、いったん政府間関係が険悪になると、そのあおりで民間交流も途絶えてしまい、回復に何年もかかってしまう。当時ほとんどの民間交流が中断する中、新発田さんは「やめるのは簡単。継続こそが大切だ」と一人で訪中。中国側から「こんな時に来てくれてありがとう」とかえって大歓迎を受けた。記念式典に出席した片山和之・在上海日本総領事は「政府間関係が困難に直面したときも、日中の交流を草の根で支えてきた」とたたえた。

交流の担い手が高齢化する中、若い芽も育ってきている。「日中の未来を考える会」の上海支部代表で、IT企業勤務の倉岡駿さん（二七）は日中の若者約七十人とともに参加した。「三十年前に活動を始めた皆さんがやったことを私たちが受け取っている。それを下の世代にも伝え、日中をいい方向に持っていきたい」

無錫市人民対外友好協会の王錫南会長は「三十年は区切りではない。若い後継者を育て、さらに交流を広げていきたい」と話した。

黄力新（方正県外事僑務弁公室主任）主任来訪

大類　善啓

去る９月 28 日（木）、方正県外事僑務弁公室黄力新主任らの表敬訪問があった。私と参与の牧野八郎さんが対応した。黄主任のお名前はもちろん承知していたが、氏が主任に就任してからは残念ながら方正を訪問しておらず、お会いするのは私も牧野さんも初めてである。

黄主任には改めて、公墓を維持管理していただいていることに感謝の意を表した。しかし一方、この間の公墓を参拝した人たちの話を聞くと、花輪を捧げ写真撮影もできたが線香を焚くことが出来なかった、という苦情を聞いていたので尋ねたところ、「線香を焚くと山火事が生じる危険性があるので禁止している」ということであった。そう言われると、そういうものか、と半分ほどは納得した。

また黄主任の話によれば、在日華僑の１割が方正出身とのこと。少なく見積もっても６万人近い数字になりそうである。今回の来日も方正出身者の企業関係者が「方正県日本商工会」を立ち上げ、その設立総会に出席することも重要な要件であったようだ。ともあれ日本と方正との結びつきは益々強くなっている。

前列左より、大類、黄主任、牧野参与

2017年9月28日付、朝日新聞

日本へ引き揚げ 中国人画家描く

幅20㍍の大作、きょうから初公開

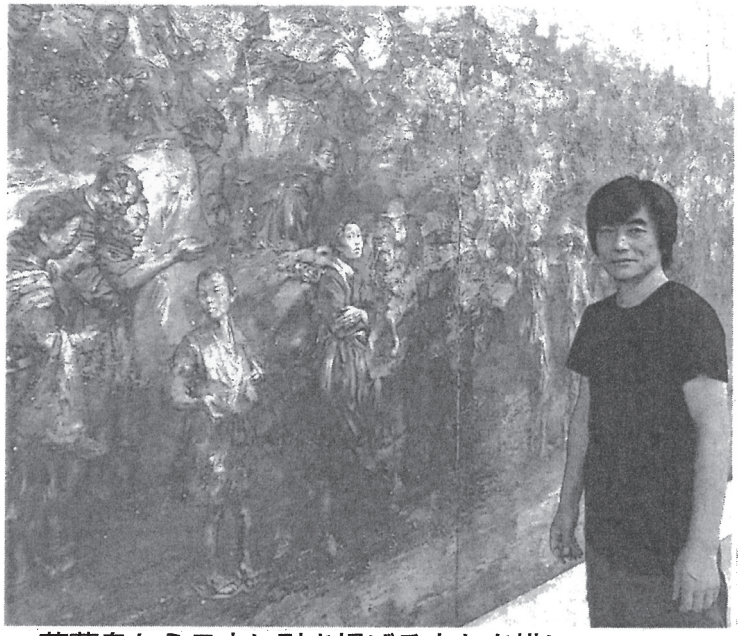
日中戦争後の混乱の中、中国遼寧省の葫蘆島から日本に引き揚げる人々を描いた幅20㍍の絵画を、同省瀋陽市の画家王希奇さん(57)が完成させた。中国で当時の日本人の苦難をテーマに描いた作品は異例。東京都港区の東京美術倶楽部（03・3432・0191）で28日から10月5日まで、初公開される。

遺骨を抱えた子供、恨めしそうに振り返る女性……。王さんが描いた「一九四六」には、満州各地から苦難の末に葫蘆島までたどりつき、引き揚げ船に乗る順番を待つおよそ500人もの人々が描かれている。

葫蘆島には戦後、日本に向かう船が出る港があり、1946～48年に約105万人が引き揚げた。王さんは葫蘆島市に近い錦州市の出身。5年ほど前、日本に引き揚げる子供らの写真を見かけ、強烈にひきつけられた。「戦争ではいつの時代も弱者が苦しむ。彼らも戦争の被害者だ」と資料を集めて制作を始めた。

葫蘆島の引き揚げの歴史は今は地元でもあまり知られていない。「両国の若者にも歴史を知ってほしい」という王さん。日中各地で展覧会を開くのが夢だ。

（瀋陽＝平賀拓哉）



葫蘆島から日本に引き揚げる人々を描いた「一九四六」と画家の王希奇さん＝7月、中国遼寧省瀋陽、平賀拓哉撮影

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945 年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない 1963 年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400 数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も 1984 年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03ー3295ー0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/

≪報告≫　　　　　　　　　ありがとうございました！

前号の会報 24 号入稿後、2017 年 4 月 28 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受取った順に記載しました。2017 年 12 月 5 日現在）

山田浩　大久保勲　加藤まり子　矢吹晋　野田尚道　長谷部照夫　肥後茂樹　松尾政司　田島正夫　榎戸吉定　小出公司　新田ますみ　鈴木敏夫（杉並）　田井光枝　篠田欽次　山内良子　高田京子　山田敬三　近寅彦　渡辺一枝　篠原圀雄　松田信義　登丸誠　澤岡泰子　田平正子　栗原彬　仰木忠幹　石橋辰巳　木戸富美江　白西紳一郎　田澤仁　中島紀子　貞平浩　小関光二　志村潤一　金成敬子　亀山英雄　田中正昭　山川梅子　神田さち子　照山真木子　長谷川清司　中井詔太郎　末広一郎　石田和久　小玉正憲　高橋幸喜　鵜澤弘　高橋守男　石原健一　岩間孝夫　十時哲哉　望月信隆　篠原淳子　山口真　柳瀬恒範　久保和男　橋本聰　中村静枝　藤井盛　杉田春恵　佐藤良夫　佐藤千栄子　秋葉二郎　石田武夫　竹中一雄　近藤耀子　高橋健男　小林淨子　黒岩満喜　唐沢修　大濵敏夫　小倉光雄　広田彰夫　中澤道保　稲吉康和　手塚登士雄　渡辺保雄　岡田照子　篠原五郎　寺沢秀文　矢野光雄　大久保明男　小岩盛廣　原田清冶　三原容子　及川淳子　鈴木幸子　横井幸夫　福田順子　高木昴　新谷陽子　三輪光佳　中島幼八　馬場信韶　前川よしえ　南雲英雄　さいたま市大宮日中友好協会事務局　浜谷惇　芳賀英吾　及川康年　岡庭成巳　宮原咸太郎　嶽﨑敦子　丹野雅子　東宮春生　金成弘美　山本武　名取敬和　西嶋拓郎　藤村光子

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

書籍案内を兼ねた編集後記　　大類善啓

『「京大俳句を読む会」会報―第４号―』

「京大俳句」は、1933 年に京都大学関係の若手俳人を中心に創刊され、自由主義を重んじ、実作・理論の両面から無季俳句や戦争俳句などの新しい俳句に取り組んだ俳句誌である。しかし 1940 年、厳しい言論弾圧（京大俳句事件）により主要同人が検挙され、第 86 号をもって廃刊に追い込まれた。弾圧されるまでは、文学界を席巻する大きな力になっていたという。

戦後、全巻が復刻されたことと、「京大俳句」の会員の旧居より、多数の関連資料が発見されたことを機に 2008 年、「京大俳句を読む会」が発足した。この４号には、本会の会員でもある新谷陽子さんが「満蒙開拓移民と俳句―その二　二つの引揚港を訪ねて」という文章を書いている。

「大陸の花嫁」だった新谷さんの母、井筒紀久枝さんが敗戦後詠んだ「帝国が唯のにほんに暑き日に」など、敗戦と引き揚げに伴う人々の哀しみなどを詠った多くの俳句も紹介している。舞鶴港と佐世保港の対照的な風景の描写も見逃せない。戦前の時代世相が俳句を通して甦ってくる異色の会報である。

定価 1000 円、送料 200 円 申込みは〒610－0102 京都府城陽市久世南垣内 177－2 新谷陽子方　「京大俳句を読む会」事務局　電話／FAX ：0774-55-6081 まで。

『満州開拓民の真実　なぜ、悲劇が起きてしまったのか』

小林弘忠　著

近年、満蒙開拓民関係の書籍も多く発刊されているが、本書は、時の為政者の極めて人為的な政策によって満蒙開拓民の悲劇が起こったことを、改めて想起させる。

関東軍が撤退を事前に開拓民に知らせるとソ連に気付かれる恐れがあるということで、開拓民に撤退するという情報を秘匿したこと。日本に列車で引き揚げる順番にしても、軍人、軍属が一番乗り、開拓民は一番最後だったこと。またポツダム宣言受諾を巡っての東郷外相や阿南陸相などの言い争いだ。例えば、米内海相の「レイテ、琉黄島、沖縄など然り、みな負けている」という発言に対して阿南陸相は、「会戦では負けているが、戦争では負けていない。陸海軍間の感覚が違う」という不毛な論争など、当時の戦争指導者たちの客観性を欠く論争や、東郷外相の「日本民族は皇室の下に永遠に置かれていることにより滅びることはないのです。国体護持さえあればあらゆる苦痛も我慢できます」という発言に表われているように、国体護持すなわち、天皇制を守る、そのことが最も重要な課題であり、国民、開拓民などの生命などは論外なのだった。

（定価：2000 円＋税　発行：七つ森書館　〒113－0033 東京都文京区本郷 3－13－3 三冨ビル　電話 03－3818－9311　FAX 03-3818-9312）

『ルポ　思想としての朝鮮籍』

中村一成（イルソン）　著

在日朝鮮人は様々な困難な状況の中で生きてきた。とりわけ戦前の時代は本当にひどいものだったと本書を一読して思った。

本書には高史明、金石範ら作家や詩人など、戦前から日本で生きてきた在日朝鮮人たちのすさまじい人生を取材した人物ルポルタージュである。彼らの人生を通して、どうしても譲れない一線、「朝鮮籍」を生きるとはどういうことなのか、を明らかにしている。現在優れた知識人として日本の中で生きる彼らも、戦前の子供時代から青年に向かう極貧の中、日本社会の差別の中で、暴力的な形でしか自己表現できなかったすさまじい体験を読むと、その時代を生きていない私などは言葉を失う。

「国家や民族の観念を超えて生きよう」と思いつつ、著書の次の言葉は私に重く迫ってくる。

＜「国境なんて関係ない」「国籍なんて記号だ」。しばしば聞く言葉だが、これらを口にする者はえてして、自らが「国民」である根拠を問う必要もないほど自明な「国民」である。今いる場所にいる自由も、国境を越えて移動する自由も、国籍国があるからこそ可能になっているという事実に無自覚なことが多い＞という著者の言葉を反芻しつつ生きていかなければ、と思う。

（定価 2000 円＋税　発行　〒101－8002 東京都千代田区一ツ橋 2－5－5　岩波書店
電話案内：03－5210－4000）

『知ってはいけない　隠された日本支配の構造』

矢部宏治　著

11 月に来日したトランプ米大統領は、米軍の横田基地から出入国した。米軍基地は日本の主権が及ばない場所だ。トランプを迎えた自衛隊幹部なども米軍からセキュリティチェックを受けたという。自尊心のある幹部たちは、実に屈辱的な気持ちになっただろうと思うが、実際はどうだったのか。私から云えば、日本の右翼がこの事態に怒らなかったのが不思議だ。

ことほどさように、戦後の日本社会の支配構造が本当のところどうなのか、を本書は明らかにしている。著者の言葉によれば「ウラの掟」があるという。その掟とは「日本の空は、すべて米軍に支配されている」、「自衛隊は米軍の指揮のもとで戦う」ということである。米軍が支配する広大な「横田空域」の存在や米兵の犯罪がほとんど日本側では裁けない「裁判権放棄密約」など、隠された日本支配の構造を明らかにしている。日本の実体を知るには必読の書だ。

（定価：840 円＋税。講談社現代新書　〒112—8001　東京都文京区音羽 2－12－21　講談社　電話 03－5395－4415　販売）

・・

今年夏のＮＨＫのテレビ番組は優れた番組が何本も放送された。会長の交代の影響もあるのか、今までの鬱積した真実への探求心がそうさせたのか。「731 部隊の真実」「告白　満蒙開拓団」など本当に見るべき番組が多かった。中国側は、「731 部隊の真実」などが放映されるようなら、歴史の真実を見つめる姿勢があり、評価できる。これなら歴史認識で合意できるだろうという意見があったという。

「戦慄の記録　インパール」もその優れた番組の一つだった。エンドロールで旧知の中野圭子さんの名前を見つけ、すぐに電話をして寄稿をお願いした。

歴史修正主義者が跋扈する今日、これからも満蒙にこだわらず、若い世代に伝えなければいけない重要な歴史的な事実を伝えていけるような会報にしていきたい。ぜひ読者諸氏の寄稿をお待ちしています。時に「どうも書くのは苦手だから」と尻込みされる方がいらっしゃるが、編集部宛てに手紙を書くような感じで書いていただければと思う。

泰阜村と方正県との友好提携 20 周年式典に招かれ、理事の藤原知秋さんと泰阜村に出かけた。式典と祝賀パーティーに参加したら、方正の総会で講演していただいた『原発危機と「東大話法」』の著者、東大教授の安富歩さんも出席されていたのには驚いた。安富さんにはいずれ寄稿していただく旨、約束した。本号は会報としてかなりの大部になったが、力作ぞろいと思う。忌憚のない批評をお寄せいただければ嬉しい。

≪表紙写真撮影：寺沢秀文≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 25 号）2017 年 12 月 16 日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町 3－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
㈳日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会